アートプロジェクトがつむぐ縁のはなし

絵物語·声·評価でひもとく　大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」の11年

アートプロジェクトがつむぐ縁のはなし
絵物語・声・評価でひもとく　大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」の11年

メモリバは本当に
「まちのバトン」になれたのでしょうか？

やはり、ちょっと迷惑な
プレゼントのままなのでしょうか？

1 絵物語をひらく

005 物語｜熊倉純子　絵｜目［mé］

2 声を聴く

030 はじめに〜シャボン玉で社会を彫刻する？　熊倉純子
032 「Memorial Rebirth 千住」とは
034 クロストーク「アートなんてわかんねぇ!」　大巻伸嗣×吉川和宏×髙橋純子×森司×熊倉純子
051 メモリバをめぐるビフォー･アフター･ボイス
068 コロナ禍をしなやかに生きる 「音まち」事務局と大巻電機K.K.の活動の記録　藤枝怜
072 大巻伸嗣とMemorial Rebirthの未来　大巻伸嗣

3 評価を学ぶ

086 アートプロジェクトの評価について　佐野直哉＋槇原彩
089 Memorial Rebirth 千住が生み出した価値とは？　佐野直哉
112 Memorial Rebirth 千住のステークホルダー　篠原美奈
114 「メモリーバックアップ」としてのロジックモデル　Memorial Rebirth 千住の10年間を事例として　槇原彩

129 「Memorial Rebirth 千住」年表　2011–2022
136 「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」これまでの主なプログラム
138 「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」年表　2011–2022
146 「Memorial Rebirth 千住」用語集
150 しゃボンおどりの歌

1

絵物語をひらく

物語 — 熊倉純子　絵 — 目[mé]

2012年の早春、
東京の足立区千住でMemorial Rebirthがはじまりました。
およそ10年前のことです。

たくさんのしゃぼん玉を飛ばして風景を変える
アートパフォーマンスのMemorial Rebirth、通称メモリバ。
これは、しゃぼん玉のアートが人々の縁をつむいでいく物語です。

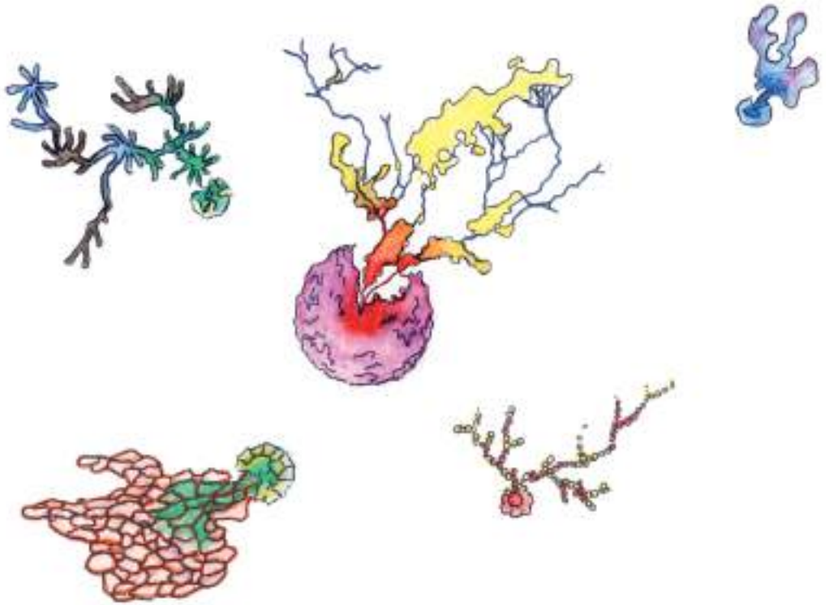
1年目はいろは通り商店街、駅から少し離れた静かな通りでの開催です。残念ながらお天気は雨。寒いなか、近くの小学校のPTAのお父さんたちが、熱心に手伝ってくださいました。雨のなかのしゃぼん玉という不思議な景色に子どもたちは大喜び。色鮮やかな傘や雨合羽が彩りを添えてくれました。

　でもきっと、誰もこれがアートだとは思わなかったでしょう。雨なのにしゃぼん玉をたくさん飛ばすなんて、物好きなひとたちだなぁ、誰だろう? そんな感じだったかもしれません。でも、準備のときから熱い想いで助けてくださった商店街の八百屋さん、本屋さん、こんにゃく屋さんは、とてもとてもニコニコしてくれて、その笑顔に少し勇気をもらいました。

2年目は千寿本町小学校の校庭です。校長先生はわたしたちの試みに全然関心を示してはくださいませんでしたが、快く校庭を貸してくださいました。しかし、「うちの学校の子どもたちは塾で忙しいから、来ないかもしれませんね」のひとことに、メモリバの作者のアーティスト・大巻伸嗣さんは青ざめます。まちからまちへ、バトンのようにメモリバが手渡されていってくれればという願いではじめたのに、誰がバトンを受け取ってくれるのでしょう?

心配になった大巻さんは、突然「しゃボンおどり」を発案します。千住は盆踊りが盛んなまちだと聞いて思いついたのです。ますますアートからは遠のくような気もしますが、藝大の卒業生の若手グループに作曲と振付を依頼し、まちの日舞の先生が主宰する盆踊りの会のおばあちゃまたちにご出演いただくことになりました。日舞の先生がたのご指導も仰ぎつつ、かわいい踊りが完成しました。

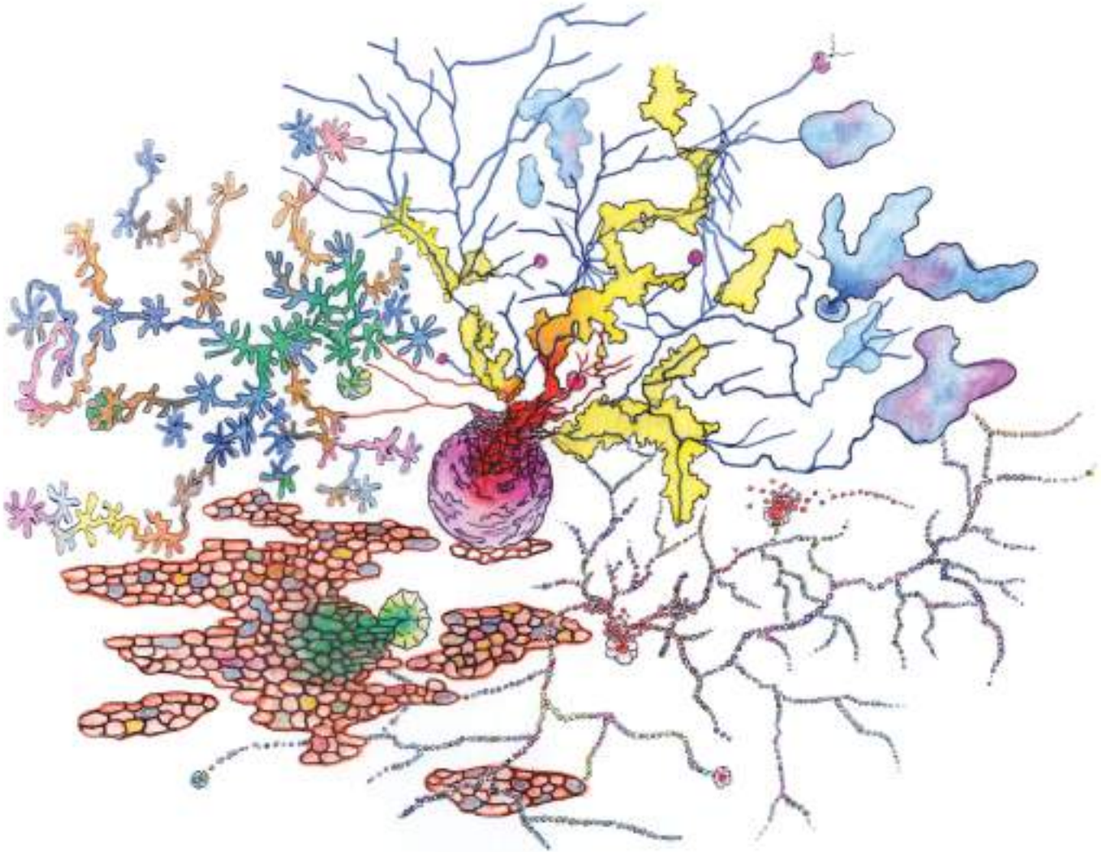
おばあちゃまたちのお話では、若かりしころは夏のあいだまちのあちこちで開催される盆踊りが若い男女の出会いの場だったとか。おばあちゃまたちの想い出の再生のために、若い男子を探さねば！ちょうどこのころ、駅の向こう側に東京電機大学が移転してきたので、学園祭を訪れてメモリバに関心を示してくれるひとを必死で捜索。やっと、とある研究室で若手の先生に巡り合います。秋の好天に恵まれたメモリバでは、校庭の真ん中にある大きな木の周りを回る「しゃボンおどり」に、おばあちゃまたちと子どもたち、そして大勢の電大の男子たちが参加してくれました。



3年目は駅の反対側に移動して、千寿常東小学校の校庭での開催です。副校長先生はとても興味を持ってくださって、PTAの役員のお父さんも情熱的！「PTAへの協力要請に教育委員会からの依頼状を出してください」とか、「誰もメモリバを知らないから、これまでの開催の写真展を校内で開こう!」とか、やつぎばやに指示がとんできます。まだまだ未熟なスタッフたちは右往左往、毎日ダメ出しを受けて怒られながら必死で奔走します。おかげで現場の熱量が高まって、大巻さんも夜の時間帯の開催を提案。電大生たちと子どもたちの写真撮影ワークショップをおこなって、まちのカラフルな写真を集め、宵闇のなか校舎に投影しました。

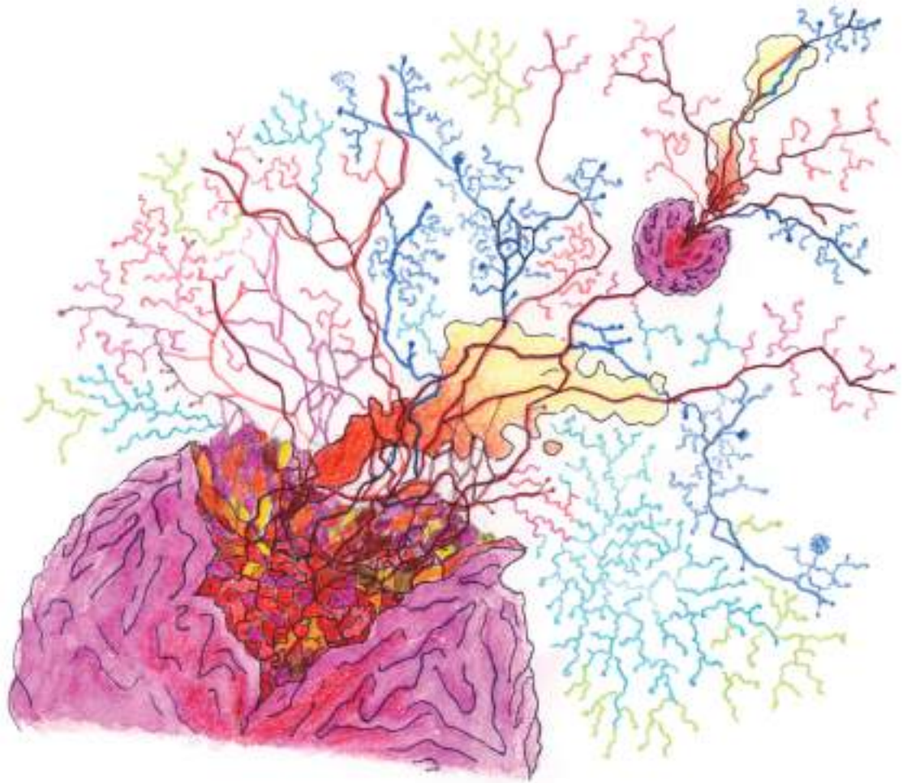
いっぽう、藝大の学生たちは千住のあちこちの小学校を放課後に訪れて、まだまだ知名度の低い「しゃボンおどり」のPRに走り回ります。その甲斐あって、夜の部は踊りを覚えた子どもたちと、市民サポーターたちの生バンドの演奏で盛り上がりました。

居酒屋のワンフロアを埋め尽くした打ち上げでは、PTA役員のおじさまから千住名物のべらんめぇ調でまたまた厳しいダメ出し。「お前らアートかなんか知らないけど、まちのことなにもわかっちゃいない」。でも、「仕方ないから、来年も手伝ってやるよ」という人情あふれるひとことに、メモリバの継続が決まりました。それまで、アートからのおせっかいでちょっと迷惑なプレゼントだったメモリバが、まちのバトンとなった瞬間でした。



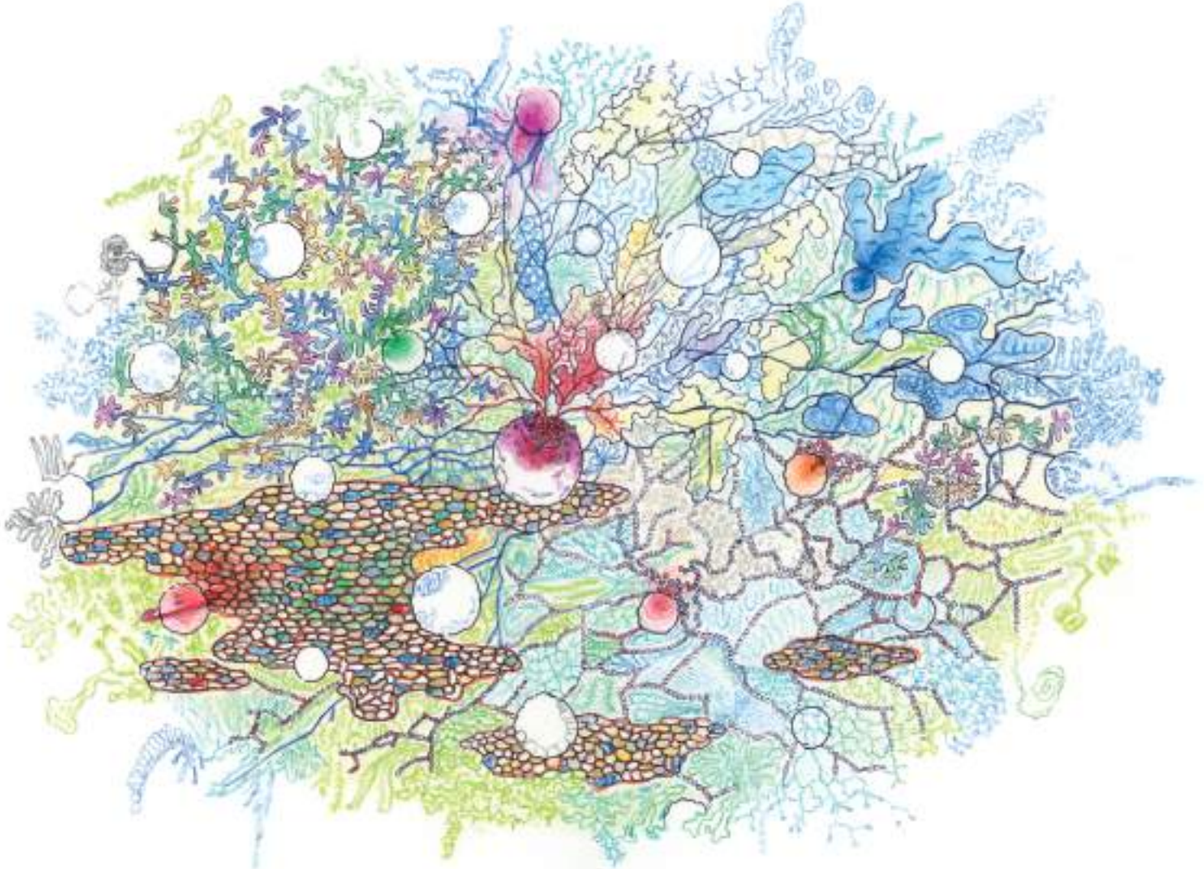
4年目は初の公園での開催です。まちのかたがたが構想段階から参加してくださって開催場所を選定しました。公園は誰もが来やすい場所なのですが、区の担当者は公園課との交渉が大変でした。

夜の部がきれいだったのでぜひ！というまちの要望に応えて、今度は本格的なLED照明を使った演出をしようと大巻さん。その予算の工面のために寄付集めにチャレンジです。商店街のリーダーの協力で、スタッフと藝大生たちがまたまた奔走して、スーパーやスナック、パン屋さんなど、何軒ものお店や市民のかたがたから寄付をちょうだいしました。



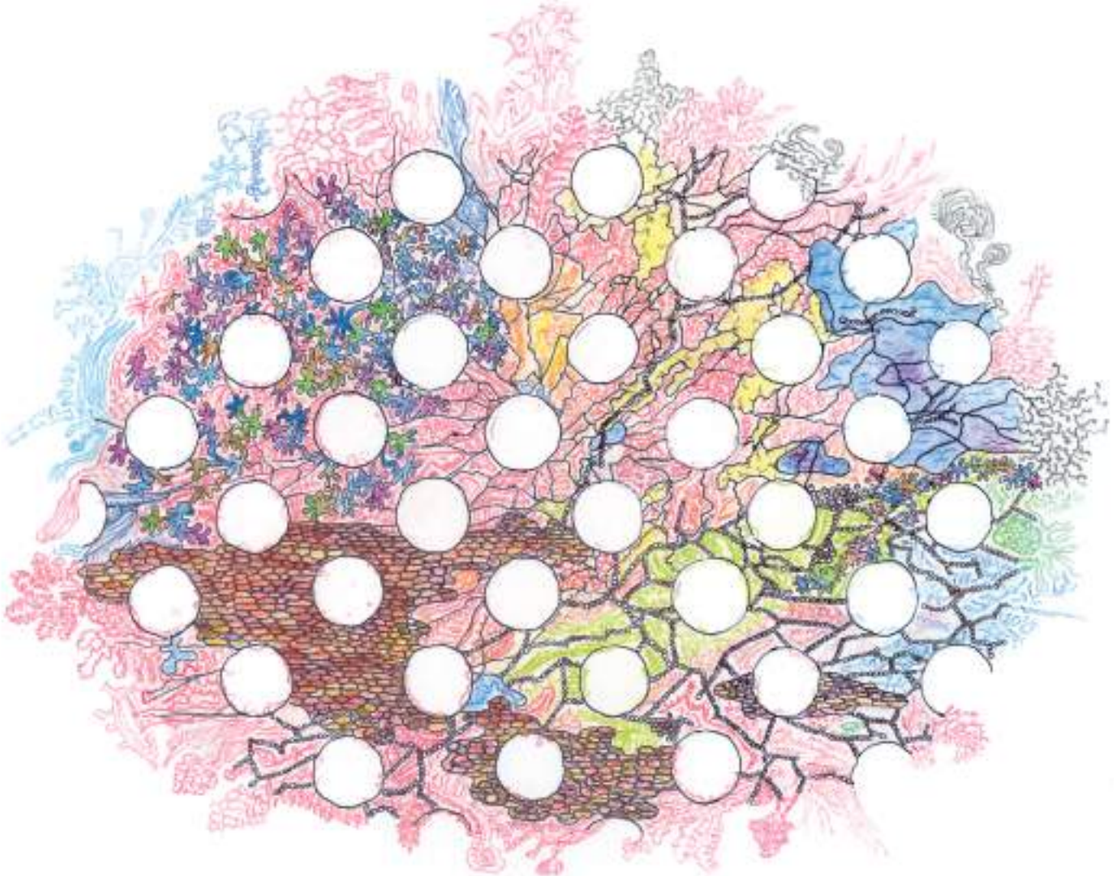
電大の先生の「エンジニアもまちやひとを知るべし」との教育方針から、ミーティングに参加させられる電大生たちは終始無言。しかし、公園の築山に映像を投影しようとアイディアを出し、これまで千住でメモリバが辿った軌跡を自転車で巡り、まったく専門外なのに映像作品をつくってくれました。

電大生の映像やプロの照明など演出が凝ったものになりそうなので、夜の部は「しゃボンおどり」を踊らずにしゃぼん玉と光の饗宴に集中してもらおうということになりました。昼の部に「しゃボンおどり」、夜の部はアートらしくという構成がここから定着します。夜の部で、お客様から「幻想的」というつぶやきが聞こえ、初めてメモリバが少しアートと認識された年でした。町会の協力で屋台も出て、昼の部はお祭り感が増しました。



5年目は千住の魚市場の駐車場での開催です。大きな会場なので、大巻さんから「みなさんで自由に、千住のあちこちでプレイベントをしてください」と、しゃぼん玉を出すマシンを10台ほどお借りすることに。PTAのお父さんたちとメカニックに強い電大生でチームを組んで、大巻さんの大事な作品であるマシンを自分たちで扱うことになりました。幼稚園や夏祭りなどあちこちでプレイベントを開催し、毎回「しゃボンおどり」の踊り方講習や、浴衣の端切れを使った衣装づくりワークショップを地道につづけました。

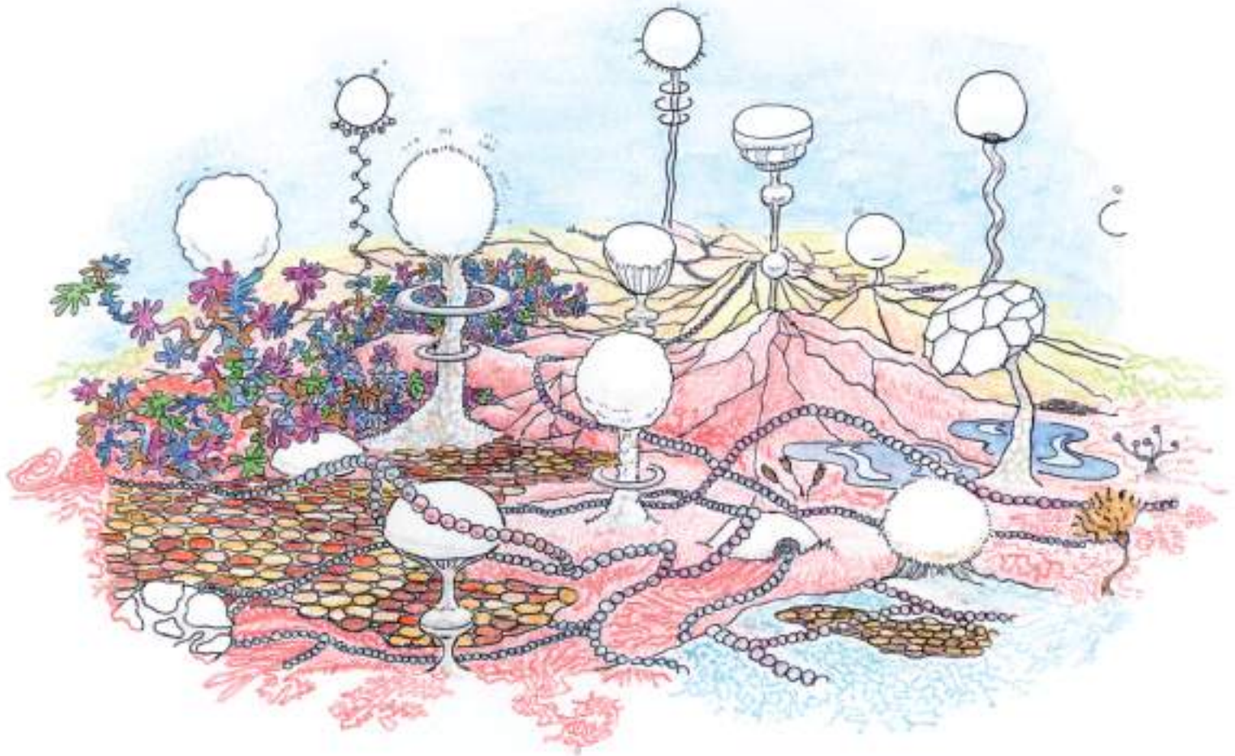
本番当日、昼の部から市場は大賑わい。「しゃボンおどり」の輪に全員は入りきれず、子どもたちに輪への参加を譲ったお母さんたちが、周りで見守りながら「しゃボンおどり」の手の振りを踊ってくださって、初めて市民のみなさんに愛されはじめていると実感しました。



夜の部は、コントラバスとピアノの演奏家を招いて、大巻さんの指揮で即興演奏をする演出のなか、会場中央に大きなタワー状に積み上げられたマシンの周りで若いダンサーたちがパフォーマンスをしました。スモークも加わった幻想的できらびやかなひとときに、5000人を超える観客は静まり返って魅入られていました。

「すごい！これはアートだね！」。市民チームで「メモリバの父」と呼ばれる、まちのリーダー格のかたも興奮しています。初年度からPTAのお父さんたちを動員して、会場警備を一手に担ってくださるメモリバの「影の仕掛け人」です。「もう、これ以上のすごいメモリバはできないから、ここで止めよう！」なんて、冗談なんだか、本気なんだか……。

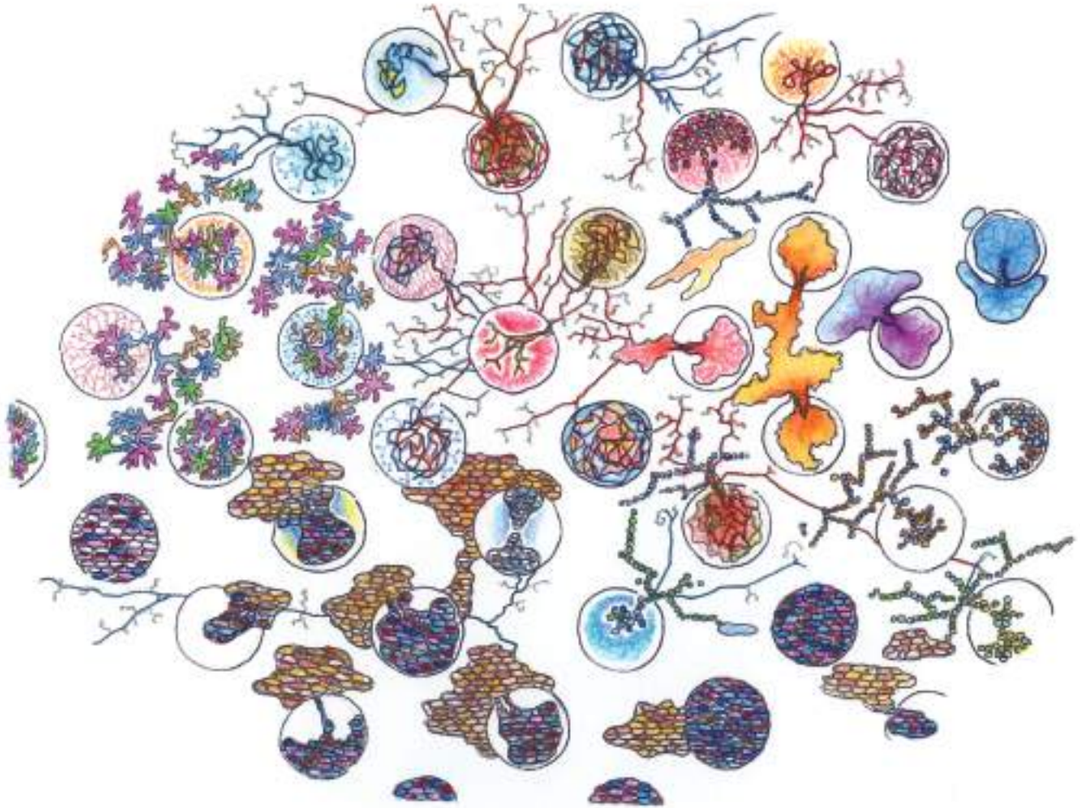
もちろん、メモリバの旅はつづきます。でも、メモリバは本当に「まちのバトン」になれたのでしょうか？ あちこちで「しゃぼん玉、見たことありますよ！」という声が聞かれるようになりましたが、「うちのまちに来て」という声は聞こえません。やはり、ちょっと迷惑なプレゼントのままなのでしょうか？



そんなもやもやを抱えながら、6年目は千寿青葉中学校での開催です。アート部や吹奏楽部が協力してくれて、アート部のみなさんの技術力で、浴衣の端切れを使ってアクセサリーが大幅にチャームアップ！ シャイな彼女たちですが、本番当日は小学生向けの「アクセづくりワークショップ」が大好評でした。別の中学の吹奏楽部や大人も加わって、「しゃボンおどり」の伴奏はすっかり生演奏が定着しました。どんどん縁が広がります。

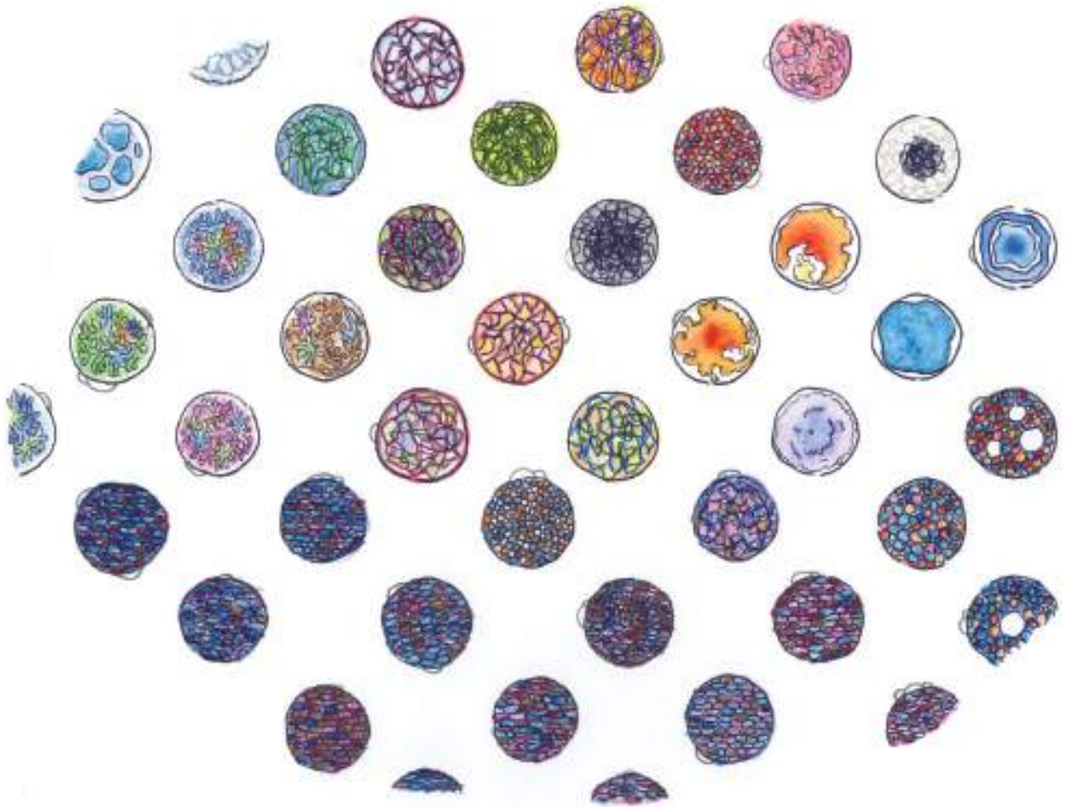
7年目は関屋の公園での開催です。マンション群に囲まれた公園は風が味方して、しゃぼん玉は竜のように舞い上がります。観客の歓声にあおられて、狂おしく舞うしゃぼん玉。

本番当日は、早朝のマシン準備からはじまって、じょじょにいろいろなひとたちが大勢集まって準備をするようになりました。大人や子どもの演奏者たち、踊り手たち、周辺警備のみなさん、屋台のひとたちなど、本番直前には200人を超えるスタッフや出演者たちが、会場や楽屋にあふれかえります。

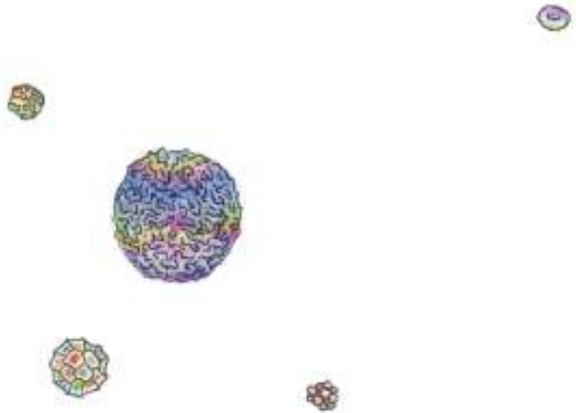


そして8年目。とうとう「うちのまちに来て!」という声をいただき、千住を飛び出し、荒川を越えて西新井での開催です。お招きくださった西新井第二小学校のPTAのご夫妻は、メモリバ市民チームによるマシンの扱い方講習会に参加して、前年の関屋公園ではスタッフも経験してくださいました。一緒に汗をかいてくれるならと、「影の仕掛け人」はじめ千住のかたがたも西新井への出張に大賛成。「しゃボンおどり」の歌詞も西新井バージョンがつくられ、西新井のかたがたから昔のまちの記憶をたくさんお聞きすることに。

こうして、千住のMemorial Rebirthは、千住だけのものではなくなりました。



9年目のメモリバは、10周年を記念する大規模開催に向けて、区内のあちこちで「しゃボンおどり」の紹介をしたり、学生発案の「メモリバ学校」と称したワークショップシリーズを開催したりして、縁を広げることを初めてしっかり自覚して、全員で本気の奔走です。しかし、区内最大の公園で2020年4月に開催予定だった10周年のメモリバを前に、新型コロナウイルスの感染拡大によって、すべては中止となりました。



コロナ禍でしんと静まり返るまち。でも、メモリバの市民チーム「大巻電機K.K.」の活動は止まりません。いまなにができるのか、模索がはじまります。これまで大きな本番のためにいつも走り回っていましたが、おうち時間ではK.K.が主役です。遠足も運動会もなくなった幼稚園や小学校の卒園式·卒業式に小さなメモリバを持っていっては? そんなK.K.のアイディアに、大巻さんも「これまでは大きなメモリバのためにみんなが集まる『One for all』だったけど、いまはひとりひとりのために小さなメモリバが出張する『All for one』をやろう」と言ってくれました。「メモリバのホームステイ」のはじまりです。

ご家族のもとにシャボン玉マシンを届けて、ベランダや庭先で家族がしゃぼん玉を囲んだり、取り壊される家屋でしゃぼん玉が静かに家族の追憶を寿いだり……。Memorial Rebirthはいま、足立のあちこちで小さな想い出をつむいでいます。

いつかまた、大きなメモリバができる日が来たら、小さなメモリバを受け取ってくれたみなさんの想い出が、きっとOne for allで集まって再生されて、縁の宴が花開く……。そんな日が来ることを夢見て。

2

声を聴く

2020年から、私たちはこれまでメモリバに
関わってきた人々にヒアリングを行っていきました。

市民、学生、企業、行政、アーティスト……。
新型コロナウイルスの影響で日常が変わりゆくなか、
65人、ひとりひとりにじっくりとお話を聴いていくうちに、
アートプロジェクトがまちでつないできたものが見えてきました。

はじめに〜シャボン玉で社会を彫刻する？

この本は、2011年度から始まった「Memorial Rebirth 千住」（通称「メモリバ」）というアートプロジェクトの11年を振り返るものです。アーティストの大巻伸嗣と足立の市民たちが共創するアートプロジェクトがつむいできた「縁」は、どのようなもので、なにを生み出したのでしょうか？

巻頭の絵物語で述べたように、メモリバは年に1回、学校の校庭や公園など、千住のいろいろな場所をシャボン玉でいっぱいにしてきました。しかし、コロナ禍で活動は停止し、私たちは立ち止まらざるをえなくなりました。そしてひとりひとりが考えました。「メモリバって、いったいなんなんだろう？」

そこで、私たちは集い、語り合いました（クロストーク「アートなんてわかんねぇ！」）。また、私の研究室でアートマネジメントを学ぶ学生たちが、65人のメモリバの仲間たちにインタビューを行いました。「あなたにとって、メモリバとは、いったいなんなのでしょう？」と（メモリバをめぐるビフォー・アフター・ボイス）。こうして集められた声をもとに編まれたのが本書です。

「縁」は、英語やフランス語には翻訳しづらい言葉ですが、社会学や政治学の専門用語を使うと、社会関係資本（Social Capital）と呼ばれるものに近いのかもしれません。アートプロジェクトが社会関係資本を生み出すという研究は実はたくさんあるのですが、実際に人々がどのように「縁」をつむいでいるのか、詳細な研究はまだ端緒についたばかりです。この本につづられた語りが「縁」の様子を垣間見るヒントになれば幸いです。

さらに、この本の後半では、科学的な「評価」の手法を用いて分析を試みています。メモリバの11年で生じた様々なことを可視化して価値化すべく、若手の研究者の方々に力を貸していただきました。社会的インパクト評価が世の中で取りざたされていますが、その手法であるロジックモデルにメモリバを当てはめるとなにが見えてくるでしょうか？

ところで、この本ではメモリバの芸術作品としての価値には触れていません。産みの親のアーティスト・大巻伸嗣は彫刻家です。シャボン玉が彫刻？ ちょっと謎ですよね。でも、会場を埋め尽くすシャボン玉が風に舞い、竜のように立ち昇る姿はまさに彫刻です。大巻さんは、空気に漂うシャボン玉で儚い「時」を彫刻しているのかもしれません。しかし本書で大巻さんは、「社会は可塑的である」と述べています。可塑的、つまり形づくることができる、ということです。私たちは、11年の年月をかけ、シャボン玉がつむぐ人の縁で、社会を彫り続けているのでしょうか？

最後に、この場を借りて、メモリバの舞台である「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」を発案し、当初より変わらぬ良きパートナーでいてくださる足立区シティプロモーション課のみなさまと、足立区の相談を受けて私の研究室に声をかけてくださり、長きにわたって共催の要となってくださったアーツカウンシル東京の森司さんはじめ歴代担当スタッフのみなさまに、心より御礼申し上げます。

また、この本は、膨大なインタビュー資料を読み解いて編み直し、メモリバも千住も知らない読者の方々に伝わる形に導いてくださった編集の今野綾花さん、そして、みんなの原稿を辛抱強く待ってくださったデザインの川村格夫さんがいなければ完成しませんでした。また、現代アートチーム・目［mé］は、巻頭の絵物語にすばらしい作品を描いてくださいました。この本が形になることにお力添えいただいたみなさまにも、心からの感謝を申し上げます。

東京藝術大学　熊倉純子

「Memorial Rebirth 千住」とは

1分間に最大1万個のシャボン玉を生み出す装置を数十個並べて、無数のシャボン玉で見慣れたまちを一瞬にして光の風景へと変貌させる現代美術家・大巻伸嗣のアートパフォーマンス、Memorial Rebirth（通称「メモリバ」）。

千住では、2012年3月にいろは通りから始まり、区内の小学校や公園など毎年場所を変えながらリレーのバトンのように手渡されてきました。その過程で、オリジナルの盆踊り「しゃボンおどり」が誕生したり、歌詞ができたり、夜空にシャボン玉を飛ばす「夜の部」が始まったりと、その形を変えながら、まちの様々な記憶と人をつないでいます。大規模な本番が難しい現在も、ひとりひとりの記憶やこれまでの縁から新たなつながりが広がっています。

［これまでの開催地］

2011年度 2012.3.17［土］
「Memorial Rebirth 千住いろは通り」
いろは通り商店街

2012年度 2012.11.24［土］
「Memorial Rebirth 2012 千住本町」
千寿本町小学校

2013年度 2013.10.19［土］
「Memorial Rebirth 千住 2013 常東」
千寿常東小学校

2014年度 2014.11.2［日］
「Memorial Rebirth 千住 2014 太郎山」
千住旭公園（太郎山公園）

2015年度 2015.10.11［日］
「Memorial Rebirth 千住 2015 足立市場」
東京都中央卸売市場 足立市場

2016年度 2016.10.9［日］
「Memorial Rebirth 千住 2016 青葉」
千寿青葉中学校

2017年度 2017.11.26［日］
「Memorial Rebirth 千住 2017 関屋」
関屋公園

2018年度 2018.11.18［日］
「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」
西新井第二小学校

クロストーク「アートなんてわかんねぇ！」

大巻伸嗣
吉川和宏
髙橋純子
森司
熊倉純子

千住のメモリバ10年の節目となる2020年、
アーティストの大巻伸嗣さんを囲んでトークイベントが開催されました。
初めは「わかんねぇ!」と言われたメモリバが、
どのようにして千住、そして足立区に根づいていったのか。
そして、大巻さんは足立区でなにを築こうとしているのか。
メモリバを一緒に育ててきた市民チーム「大巻電機K.K.」の吉川さん・髙橋さんとともに、
いまだからこそわかる未来のビジョンについて聞きました。

「わからない」から始まったメモリバ

森｜今日のトークイベントには「アートなんてわかんねぇ!」というすばらしいタイトルがついています。これは千住のメモリバに参加した市民の吉川さんが最初に放った名言なんです。メモリバは、この言葉から始まりました。

吉川｜僕がメモリバに関わり始めたのは、最初の開催である2011年度のいろは通り商店街からです。学生さんが僕のところに3人で来て、シャボン玉を何万個もあげるから手伝ってくれと言われたんです。子供が見たら喜ぶだろうなと思って、「じゃあ手伝いぐらいするよ」という感じで始まりました。いろは通り商店街というのは、ちょうど僕が当時PTA会長をやっていた双葉小学校の真ん前にあるんです。それで小学生のお父さん方に集まってもらって、警備などを手伝ったんですね。
当日は雨が降ってとても寒くて、はっきり言って「なんでこんな日にやんなきゃいけないんだろう」と思いました。子供たちも本当に来てくれるかな、喜んでくれるのかなと話していたんですが、それでもカッパ着たり、傘を持って子供たちが遊びに来て、雨のなかのシャボン玉に触ったりと、楽しんでくれたんですね。なので、これはこれで「やってよかったな」と思ったんです。
2回目の本町小学校ではしゃボンおどりができて、これは子供が喜ぶなと思いながら見てたんですが、なにがアートなのかは全然ピンと来なくて、子供が喜ぶイベントとしかとらえていませんでした。
常東小学校では夜の部のプロジェクションマッピングが始まって、その頃からなんとなく普通のイベントとは違うなと思い始めました。でも、僕にとって分岐点だったのは、やっぱり2015年の足立市場のときですね。夜の部で音楽とダンスの上演があったんです。僕からすると「変なダンス」なんですけど（笑）、上演中にシャボン玉が舞ったときに、僕も保護者たちもしんと静まりかえって、誰一人声が出なかったんです。最後の方で夜空にシャボン玉が竜のように昇っていって、これはすごいなって。そのとき本当に初めて「もしかしてこれがアートなのかな」って感じたんです。
歌にしても、練習のときには市民が集まって「あー」だの「うー」だの、いったいなにをやってるんだろうと不思議に思っていたら、それが本番、シャボン玉のなかで神秘的な音楽になるんですよね。大巻さんの作品のなか

吉川和宏　市民チーム「大巻電機K.K.」メンバー。千住在住。2011年度（会場:千住いろは通り商店街）からメモリバに参加

2011年度·千住いろは通り商店街の開催風景　撮影｜森孝介

にドンピシャではまっていて、すばらしいなと思いました。
そこで振り返ると、2011年度の雨のメモリバが、いま思うとアートだったんですよ。子供たちの黄色や赤やブルーのカッパと傘、雨のなかのシャボン玉。それを切り取るとすごくアートなんだって、いまになって感じました。これからもまだまだ大巻さんに期待しています。僕たちから大巻さんに要望することもハードルを高くしているので、よろしくお願いします（笑）。

森｜ありがとうございました。続いて千住のメモリバを見て「千住ずるい」って言ってしまった髙橋さんに、なにをずるいと思ったのか、どうしてメモリバを西新井に持っていこうと思ったのか、その辺りの話をお願いします。

髙橋｜土曜日も日曜日も街を歩いていると、千住はいつもなにか面白いものをやっているんです。西新井の方にはそういうものがなかなかなくて。子供が千住の中学校に通っているときに、一緒にやっていた千住の役員仲間に「千住ばっかりずるくない?」って言ったんですね。西新井もあるし花畑（はなはた）もあるし綾瀬もあるし、足立区ってこんなに広いのになんで千住ばかりにイベントが集まるんだろうという気持ちが私のなかにすごくあったんです。
そうしたら役員の友達が「メモリバはプレを2回やったら本番ができるよ」って言ってくれたんですね。「本当? じゃあ西新井に来てくれるかな」「できるんじゃないかな」って。その言葉に乗せられて、「じゃあ西新井に持っていこう」って思って、メモリバの話し合いに顔を出させていただいて、私の思いを伝えました。「西新井の『川の向こう』の子たちって、千住にはなかなか来られないんだよ。お金を払って電車に乗せてくれる親御さんばかりではないから、来られない子たちは一生あんなに素敵なものを見られないまま終わっちゃうんだよ」ということを伝えてお願いしたんです。
私は関屋から参加させていただいて、そのときに「これは一緒にやっていかなきゃ」って感じてずっとやっていたんですけれども。そうして西新井に来ていただくことになったときに、やっぱりしゃボンおどりの歌詞が「千住にお嫁に来ました」じゃないですか。でも西新井のみんなが聴いたときに「どうせ千住か」って言葉が絶対出てくると思ったので「歌詞を西新井に変えられませんか」と伝えたら、大巻さんから「いいですよ」とお返事があって。それから西新井の方々にいろんなお話をうかがって、それを参考に歌詞をつくっていったんですね。
当日は近くに駅もない西新井第二小学校にたくさんの人が集まって、綾瀬や竹の塚から自転車で来てくれたり、車椅子で来てくださったりしました。2000人ぐらいいらっしゃったのかな。みなさん「こんな素敵なものを見られるとは思いませんでした」と言ってくださって、それだけで私はもう本当に嬉しかったんです。
昼間はみんなで一緒に西新井バージョンのしゃボンおどりで盛り上がって、夜の部の音楽の歌詞では「タコタコタコ」とか……。西新井には日本最初の「タコの山（蛸を模した公園の遊具）」があるんですけど、それを盛り込んでくださって。「アリオアリオアリオ」「タコタコタコタコ」という歌が最後にひとつになって、鳥肌が立つくらいに素敵な音楽になっていました。最後に「アー」って歌って終わるんですが、ライトに照らされたシャボン玉がぶわっと上がって、本当に感動しました。これはアートだなって。アート、わかんないんですけどね（笑）。

2018年度·西新井第二小学校の開催風景　撮影｜富田了平

吉川｜「大巻さんの作品は」アートだってことがわかりましたよね。

森｜変な言い方ですが、千住のメモリアルリバースって最初から完成していたわけじゃないんですよ。大巻さんの作品としては横浜トリエンナーレで最初に制作されたもので、場や記憶という

髙橋純子　市民チーム「大巻電機K.K.」メンバー。西新井在住。2017年度（会場:関屋公園）からメモリバに参加

テーマを持ったものなんだけど、千住で毎年開催されるうちに、作品としてもどんどん変容しているんです。作品も大巻さん自身も変わって、それを取り巻く人も変わっていって、要素も増えていった。そこが非常に重要なポイントだと思います。特に大巻さんがメモリバという作品を貸し出したことで、千住や足立区で活動のリレーが起きているように思うんです。

大巻｜《Memorial Rebirth》という作品は横浜トリエンナーレからスタートしていて、自分のパフォーマンスも含めた場とのつながりをつくっていく作品です。でも、僕自身、作品を作品として考えるだけではなく、メモリバを通じて足立区という場をひとつの実験場にしたいと考えました。
僕はこれまでいろんな場に呼ばれていろんなパフォーマンスをやってきましたが、そうした場で実験ができることは少ないんです。例えば「メモリバをやってほしい」と呼ばれるだけだと、限定された時間、限定された場で、シャボン玉を飛ばすだけで終わってしまう。だけど、足立区では、《Memorial Rebirth》という作品を僕から一回突き放すことで、「足立区のメモリアルリバース」という存在にしてしまうことにしました。メモリバというのが僕とは違ったもうひとりの存在として、新しい響きあいをつくっていく、新しい可能性を開いていく。「メモリアルリバースさん」が、これまで見えなかったり言えなかったりしたことを語る代弁者になるんじゃないかと考えたんですね。シャボン玉はみんなが当たり前に知っているものだから、メタファーとかそういうもの以上に、可能性を開き、つなげていく存在になりうると思ったんです。
1年前ぐらいから熊倉先生と準備を始め、足立区で最初に説明会を開いたんですが、それこそ本当の最初は「なに言ってんの?」という話になったわけです。「アート? 美術? なんですか?」みたいな。けれど、そういう場で僕は「アートをしましょう」なんて一言も言っていない。「アート」とは僕は最初から言葉にしなかったんです。「メモリアルリバースというものを使ってなにかしましょう」と言ったんですね。メモリバを通じて10年、20年、30年かけて、なにかしらの連携や教育を生み出す可能性ってないかな、という話をしたんです。連携すること、教育すること、ソングライン的に教えていくこと。そういうことを地域で担ってきたのは祭りなんだけど、現代は祭り自体も崩壊してしまっていますよね。足立区には外から来た人がたくさんいて、マンションもどんどん建っています。歴史的な場所なんだけど、いまは（祭りなどが以前よりも機能していないので）そういうところに関わっていくことができなくなっている。そんななかで、幼稚園や小学校という小さなコミュニティがつながりをよくして、内でも外でも関係なく存在をつなげていっているんです。
だから最初に吉川さんにお願いしたのも、子供じゃなくて、親をどう引き出してくるかということでした。子供はシャボン玉で喜ぶと思うんだけど、親が「シャボン玉? なんだよ?」と言いながら来たときに、一生懸命やっている姿を見せて、わけがわからなくても「やってよかったな」と思えるようにする。そういう連鎖を、お祭りと同じような仕掛けでつくっていきたいという話を最初に足立区でしました。はっきり言って、それは面倒くさいことです。面倒くさいことを、どうやって自分たちの生活に植えつけていけるか、育んでいけるか。メモリバというひとつの存在を異物として生活のなかに入れたときに、なにかが起こるだろうと考えたんですね。
僕は千住に住んでいたので、千住に住む人たちが実はいろんなところで活躍しているのに、それがなかなか表に見えていないことを知っていたんです。例えば飲み屋のおばちゃんが実はシャンソン歌手だったから、盆踊りの曲を歌ってもらったらいいんじゃないかとか、地元で盆踊りをしていたおばちゃんたちも自分たちだけでひたすら踊っていたけど、こういう人たちが先生になったらいいんじゃないかとか。みんなが活躍したら面白い。そんなふうに、アートというより、エネルギーの集合体を作りたいと思ったんです。
つまり、僕のやりたかったのは、足立をメッカにすることです。足立が世界の中心になり、実験場になっていくような機会を作りたかった。そこが原点ですね。だから僕はアートとは一言も言っていないんです。なのに、吉川さんも髙橋さんも勝手にアートって言い始めてるんですよ。

Pic by paul barbera/where they create

大巻伸嗣　現代美術家、Memorial Rebirth 千住ディレクター。横浜トリエンナーレ2008で初めて発表された《Memorial Rebirth》を2011年度より足立区·千住で展開。千住の古民家を用いたインスタレーション作品《イドラ》(2012)、《くろい家》(2016、18)も手がけた

2013年度·千寿常東小学校の開催風景　撮影｜雨宮透貴

吉川｜ やられた（笑）。そういう裏があるとは思わなかったです。初めにメモリアルリバースって言葉を大巻さんから聞いて僕がすごいなと思ったのは、「記憶をリバースする」ということでした。「子供たちが大人になったときにシャボン玉を見て、あのときのシャボン玉すごかったよねって思い出すのがいいんだよ」って言われて、飛びついちゃったんですよね。メモリバが子供たちの記憶に強く残って、大人になっても千住の商店街や学校の記憶をまた思い出してくれれば、それ以上に幸せなことはないと思ったんですよ。だから大人たちにも、子供たちが喜ぶ様子を楽しんでくれればいい、だから一緒にやろうよと声をかけていたんです。裏をつかれていたとは思わなかったですね。大巻さんは「アートとは言っていない」と言うけれど、僕のなかでは、いまになるといろは通り商店街のメモリバはアートだったと思います。

髙橋｜ 吉川さんもそうですが、私も以前に小学校のPTAの会長をやっていたので、どうしても目線が子供のほうにあるんです。やっぱり足立区にはどうしても様々な格差があって、家でひとりでご飯を食べていたり、学校に行けなかったりする子供たちがいます。そういう子供たちがメモリバのようなものを平等に見る権利があるはずだっていう気持ちがありました。みんなが同じものを見られたら、大人になったとき、例えばメモリバを見たことで芸術の道に行く子が出てくるかもしれないですよね。たとえ学校に行けなかった子でも、選択肢が広がるんじゃないかなってずっと思っていました。
なので、メモリバも「足立区の子供たちをみんなで育てようよ」と声をかけながらやってきました。でも、このあいだ西新井第二小学校で開催したときには、高齢者の方もたくさんいらっしゃったんです。足立区には高齢者施設もたくさんあるんです。そういう方が「こんなものが最後に見れるなんて」って喜んでくれたのは、嬉しいなあって心に刺さりましたね。

人間も社会も粘土である

森｜ 大巻さんも、メモリバについてだんだん欲を出してきたじゃないですか。最初は「歌があるといいよね」と軽く言っていただけだったのに、それが「盆踊りをつくりたい」になって、藝大から作曲できる人や演奏できる人を集めてきて、毎年のしゃボンおどりをはじめ、様々なパフォーマンス、ワークショップが行われてきました。たくさんの才能を大胆に、湯水のように使っていますよね。

大巻｜ 藝大の学生が関わるのは大事なことだと思っています。足立区に藝大の音楽環境創造科があるというのは、この地域の特質なんですね。地域に宝を持ってるわけだけど、それをどうやって活かしていくか足立区の人たちは知らなかった。閉ざされた藝大という空間のなかで、なにが行われているか全くわからずにいたんです。
僕は人間を可塑的な粘土だと思っているんですね。いろんな粘土を練り合わせて、ぐっと形にする面白い方法はないかなと考えているんです。だから藝大に突出する人たちがいれば、その一番いいところを借りてきて足立区の人たちとくっつけてみる。そういう遊びをしたら面白いんじゃないかと思うんです。
僕は千住の川の向こうの地域で教育格差が起きている状況も知っていました。僕のアシスタントだった女の子がその地域で教員になって、毎日家まで迎えに行っても子供が来ないんだと言っていましたから。だから、川の向こうに行くということもずっと考えていました。最初に熊倉先生と森さんと3人でメモリバの構想について話したとき、これが練り上がったら、いろんな地域に貸し合って、お互い人間もレンタルし合って混ざり合っていくことをよしとしたいと言ったんです。自分と他者が共存して、「自分とは違う」と突き放すのではなく、なにかを借り合っていくような世界になればいいと話しました。メモリバを通じて社会彫刻に近いことが行われれば、足立区には格差というよりも「固さの違い」が生まれてくる。それが足立区の特質になれば、口だけでダイバーシティを掲げている社会とは違って、本質的に動かしていける社会になるんじゃないかと思ったんです。
アーティストと地域の人が一緒になって混ざり合うのが、藝大が関わっているこのプロジェクトの面白さでもあります。「盆踊りを入れた方がいい」といった僕の提案はそこからつながっていますね。「シャボンのボンに掛けあわせて盆踊りだ!」って言っちゃうし、「歌詞をつくった方がいいよね」「千住のシャンソン歌手とくるくるチャーミーを混ぜてみよう」「子供たちも呼んで合唱団をつくろう」「音楽の授業に入れたらいいんじゃないか」と、どんどん広げていきました。そうして広げていくことで、足立区をみんながアートや美術について当たり前のように話せる場所にしたかったんです。そういうことが普通に話される場って、日本

東京藝術大学千住キャンパス・メモリバクリスマス会の開催風景

にはなかなかないんですね。地域のお祭りのように、アートが「知らないの?」「私これやってるんだ」と語られる場にしたかったんです。メモリバを通して社会の可塑性を活性化させることで、足立区がそういう場になることを望んでいます。

森｜それはいま聞くとわかるけど、最初からそう思ってたんですか?

大巻｜最初から思ってましたよ。でもこういう考えを最初から言葉にしても、伝わらなくて批判の嵐です。だからプレゼンテーションどうこうよりも、まず爆弾を落としてみるしかない。一度やってみて「おいしいかまずいか決めてください」という話しかできないんです。
メモリバの最初の爆弾はなにかというと、雨天開催したことです。みなさんにはあらかじめ「雨の日は中止にします」と伝えていたんですよ。なので、当日雨が降り出して「あ、今日はやめだな」ってみなさん気を緩めて、終わろうかという空気になったときに、僕が「やります」と言った。それで「こんな雨でやるの?」「シャボン玉飛びますか?」とみんなびっくりしたんです。そういう反応も含めて、常識をどう変えるかというところがアートだと僕は思っているんです。シャボン玉が飛んでいて綺麗だというのはビジュアルの美しさであって、写真で撮ったら充分なんです。僕は、そこに生まれる時間と私たちが混ざり合っている空間こそがアートなんじゃないかと思うんです。だから、吉川さんや髙橋さんもそうした経験を通じて「アートを感じる」と言い始めたんじゃないかと僕は思います。

森司　アーツカウンシル東京・東京アートポイント計画ディレクター

森｜まさに吉川さんがいろは通りの雨のメモリバがアートだったことに気づいたのは、何年かメモリバを経験した後に振り返ったときでしたよね。

吉川｜そう。足立市場のパフォーマンスを見て「もしかしてアートなのかな」と感じた後に、いろは通りの写真と映像を振り返ってみて「これがアートなんだ」と気づいたんですね。当時は雨だし寒いしで全体を見られていなかったんですが、後から映像や写真を見ると、もう本当に煌びやかで。赤や青の傘とシャボン玉が雨と重なってすごく綺麗な作品になっていることが、アートがわかり始めてからわかったんですね。自分でもびっくりしました。だから、最初の年のメモリバが僕は一番好きです。ほかの年もすばらしいけど、自分にとってアートではなかったものを「アートだ」と感じることのできた、あの雨のメモリバが僕はすごく好きですね。

森｜「これはアートだ」と思う体験をしたら、過去に全く意味がつかめなかったものをアートとみなすことができた。4年ぐらい前の経験をいま引き取るという、まさに場と記憶にまつわる話が全部そこにあると思うんです。してやったりですよね(笑)。

大巻｜メモリバにプロのパフォーマーやアーティストが参加しているのは、最初に接するアートのレベルが高ければ、それがその人たちの教育水準になるからです。最初に、見えるけど手の届かないぐらいの高さに線を引いておく。それ(プロのパフォーマンス)を基準にして、いつかその次のステップで「この作品はあのときのよりよくないな。なんでわかるんだろう?」と感じられるようになってほしい。だから、足立区のみなさんは知らないうちにプロの基準を感じているし、味がわかる人間になっちゃってるんです。さきほど髙橋さんも言われてたけど、子供たちがそういう基準を知って、自分たちで超えていくという目標を持てたらいいですね。着地点は基準の向こう側にあるんです。

森｜髙橋さんは、子供の環境に格差があったときに、メモリバのような経験をするかしないかが将来を左右するというお話をされていました。市民参加のプログラムって意外と口当たりがよくて、柔らかくて毒気のないものが多いじゃないですか。いっぽうで大巻さんの話を聞くと、毒だらけな気がしませんか。

髙橋｜私もだんだんその毒に染まっているのかもしれないです。例えば私なんか、電機の学校出てるわけでもないのに電大マシンを作ることができるんですね。それはもう、何回も教えていただいたので。電大の学生さんたちがマシンを制作するようになったり、子供たちがもっと小さい電大マシンを作るようになっ

「メモリバ学校」ワークショップ(理科)の風景

たり、みんながワークショップなどをやっていくなかで、だんだんいろんな部分にはまっていくんです。電大マシンなら、こういうふうにマシンが回ってるのか、ああいうふうにシャボン玉が出ていくのかとか、最初は目で見るところから入ってきて、少しずつ参加するようになるんですね。

新しい「気づき」が生まれる場所をつくる

吉川｜例えば「シャボン玉をあげる」「歌を歌う」「商店街のスピーカーから変な音を出す」……。やっていることのひとつひとつは「なんなんだろう」と思うんです、本当に。ですけど、それがひとつになったときに「ああ、すごいな」と鳥肌が立つほど感じられるんですよね。ひとつひとつを大巻さんが最後に組み立てて、完成すると「すばらしいな」って。そう感じられるようになった自分がすごいなと思います（笑）。自分の成長が楽しいですね。だから2020年に開催予定だった舎人のメモリバも、どういう作品になるのか、自分たちも準備のためのワークショップをやりながらわくわくしていたし、とても期待していました。

髙橋｜ずっとメモリバをやってきた吉川さんは、以前は絶対に千住からメモリバを出したくないと思っていましたよね（笑）。それは、自分の娘を嫁に出したくないって気持ちに近いんじゃないかと思います。

吉川｜「千住のメモリバ」に誇りがあったので、千住で完結したいなと思っていたんです。でも髙橋さんは西新井の子供たちに見せたいし、お年寄りとかいろんな人に見せたいからと。髙橋さんも僕と同じ元PTA会長だったので信頼もできるし、本当に子供に対して熱心だったので、熱意に打たれて「わかりました、一緒にやりましょう」って。僕が決めるわけじゃないんですけどね（笑）。やっぱり西新井のメモリバもすばらしくて、やってよかったと思いましたね。

髙橋｜よく嫁に出してくれたなと思っています。

森｜やっぱり千住から西新井に持っていくとき、抵抗したい気持ちはあったんですか。

吉川｜メモリバは千住のものだという気持ちがありました。僕はやっぱり千住の人間だから、メモリバに愛を感じちゃって、他には出したくないという気持ちになります。千住で育てたから千住で完結したかったんです。でも、いまでは色んなところで見せたいという気持ちがありますね。

大巻｜僕としては、やっぱりメモリバへの愛や思いみたいなものがしっかり作られないうちは千住の外には出せないと考えていたし、メモリバが自立することがすごく大事だと思っていたんです。大巻電機K.K.とか電大生とか、大勢の人たちが連携することで外に出せるものになったし、「千住のメモリバ」を客観的に見られるようになったと思います。「自分たちのものだけど、自分たちのものではないもの」として見られるようになった。
作品ってそういうところがあるんですよね。自分でつくって、すごく愛を込めて、いろんなことが起きてぐちゃぐちゃになりながらつくるんだけど、実際に展覧会にぽんと置いたときに、客観的に作品を見るっていうのは、僕らが作家としてやるときにすごく大事なことです。
だから、みなさんとメモリバとの距離が近くなったり遠くなったりする、自分のものでありながら自分のものではないという感覚を持つことがすごく大事なんです。メモリバが自立することで、メモリバ自体が場のなかで新しく行くべき方向を見つけてくれる可能性がある。そういう可能性をつくり上げていくのが、僕の思うメモリバのキャッチボールでした。
吉川さんがさっき言われたこと、僕はすごく好きなんです。「まんまとはまってるな」と嬉しく思います。僕自身も作家としてはやっぱり不安だらけなんですよ。やった瞬間はよかったなっていつも思うんだけど、すぐに次はどうするんだとか、この後どうなっていくんだろうと考えるので。だから「メモリバ学校」というものを学生さんたちがつくってくれて「やっとそういうことができた」と思いました。自発的に学校をつくろうって言ってくれたのが本当に嬉しかったです。「メモリバ学校つくりました」って言われて、「やったー！」って。
僕、足立区自体が学ぶ場になればいいなって思うんですよ。山出さんの本（山出淳也『BEPPU PROJECT 2005–2018』NPO法人 BEPPU PROJECT、2018年）には、アートはものの見方や考え方に「気づき」を与えてくれるものだと書いてあるんですが、そういった「気づき」を起こせる場をつくっていくことがすごく大事なんじゃないかなって最近は思っています。

「メモリバ学校」ワークショップ（音楽・体育）の風景

森｜大巻さんのお話を聞いても、メモリバが何年も千住をぐるぐるしていたのは、迷走じゃなくて、必然な時間だったと思うんです。メモリバが千住で育まれてみんなにとって大事で愛おしいものになったときに、西新井に「欲しい」と声をかけられたという流れなんですね。メモリバの育てのお母さんである熊倉さんとしては「してやったり」でしたか?

熊倉｜いえいえ、とんでもない。千住の方々から、足立区内どこへ行っても「Memorial Rebirth 千住」と呼んでくれと言われているので、いまは一応「千住のメモリアルリバースが西新井に行きます、舎人に行きます」という言い方をしています。
さっき吉川さんが「僕が決めるんじゃないけど」とおっしゃっていましたよね。メモリバはいろんな人が当事者意識を持って、いろんなことを言ってくださるので、私はプロデューサーとして交通整理をするだけなんです。だけど、もちろん私が決めるのでも区が決めるのでも大巻さんが決めるのでもなくて、みんなのいろいろな思いがモザイクみたいにぴたっとはまったときに、誰が言うともなく「こうだ」っていう合意がつくられるようになってきています。

熊倉純子　東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授、「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」プロデューサー

それと、なにせ大巻さんはいま、世界的な売れっ子なので、最初といまでは状況も変わってきています。初期は千住を歩いていると街を巡っている大巻さんや初代学生担当のエレナとばったり会うこともよくあったんですが、いまはあまりありません。大巻さんもちょっとずつ大巻電機K.K.や電大生たちにメモリバを委ねてくださっています。例えば西新井のためにつくったしゃボンおどりの歌詞も、もしかしたら大巻さんに事前に見せなかったかもしれないなんて焦っちゃうぐらい、市民のみなさんや学生に任せてくれているんです。「メモリバ学校」をやりたいと言い出したのも当時2年生だった藝大の学生で、「見ているだけじゃ、もったいない。」というキャッチコピーも別の学生が考えたんですね。私は一言も言っていないんです。
今日の大巻さんのお話で、可塑性という言葉がメモリバのキーワードだとわかりました。彫刻の用語で塑像になりうる、つまり形づくられることが可能であるということです。人や社会は粘土であって、いろいろな形になりうる。教育というのは、普通はひとつの型で抜いていくようなものだけど、メモリバの場合は型では抜いてくれないから、参加する人たちは自分でどんな形になりたいか考えて、さなぎが蝶になるように一生懸命自分で自分を形づくっていくんです。そういう力を、ひとりひとり、あるいは地域社会のなかにもう一度取り戻すのが、メモリバのやってきたことなのだと思います。

大巻｜粘土って彫刻のなかでは一番簡単につくれる素材なんです。どこでも手に入るし、みなさん触ったことがあると思います。だけど、ビジョンを持たないとつくれない素材でもあるんです。つくる人の意思がないと形がとどまらなくて、絶えず動いちゃう。みんなの想いが立ってこないと、形にならないんです。
だから、見える見えないっていう問題はすごく大きいと思うんですけど、最初にメモリバについて、イメージが持てないからわからないと言っていた市民の皆さんがいました。イメージがビジュアルでも見えないし、経験したこともないから、わからなくて怖いものになってしまっていたと思うんです。だけどメモリバを続けていくことで、みなさんのなかでなにかしら「あれと近いな」「こうなんだな」って思えるようになった。イメージを変換できるスイッチがついたんだと思うんですよ。そういうスイッチは社会のシステムのなかに元々あったんだけど、それが失われてしまっていたなかで、いかにもう一度再生するかが大事なんです。もう一度イメージして、スイッチがあることを知る。それがアートのもたらす「気づき」だと思うんですね。アートの「気づき」というのは、教えてもらって初めて知る物事じゃなくて、自分の経験のなかにもともとあるはずのものを知る、コネクトし直すということなんです。
社会というものは、人間の精神と身体の次元をばらばらにして、違うものだと捉えさせてしまうんです。そこにメモリバのような負荷をかけることで、人間本来の乗り越えようとする力が生まれ、「気づき」のプロセスにつながっていく。それがアートになるかならないかの境目でもあると思います。

地元小学校の卒業式に出向き、シャボン玉を飛ばしている様子

市民が主導するコ・クリエイティブ

森｜今日のトークは「アートなんてわかんねぇ」という言葉から

始まりましたが、「大巻さんにとって作品とはなんですか」という、もう一度原点に立ち戻るような質問がありました。

大巻｜難しい質問ですね。作品って挑戦し続けるもので、答えがないんですよ。自分の考えていること、自分に見えているものを具現化する行為だと思うんです。だから誰も見たことないし、つくり上げるのに5年も10年もかかるんです。果てしなく雲をつかむような行為で、精神的につらいこともあるけど、自分が見たいものを形にして、自分が最初に体験したいっていう、これに尽きるんじゃないかな。人にどうのという前に、自分が本当にそれを見たい、知りたい、ここに置きたいみたいな。
僕は生まれ故郷が再開発されることになって、どうにかしたいと思うなかで、失われていく過去や時間をどうやったら取り戻すことができるかという問いをすごく大事にしてきたんですね。だから、いつもみんなになにかしてあげたいというよりも、自分のなかの埋まらない問題をどうするかを考えているんです。僕は足立区を第二の故郷だと思ってるんですけど、千住のメモリバも自分を助けるものが欲しいという原点から始まっていて、それが社会やいろんなことにつながっていったんです。喪失してしまったもの、過去、時間、記憶、場といったものをどうやって取り戻すことができるのかという問いを大事にしています。また、継続していきながら、なにかしら発見していく行為を続けたいと思っています。やめるとしたら本当にいますぐでもやめられるし、一瞬で終わってしまうものなんですよ。作品を含めあらゆる物事というのは、みんなが意識を持って終わらないようにつなげていくものです。ドローイングのように自分の身体を通して、みなさんと一緒になって考えたいと思うんです。

熊倉｜大巻さんはメモリバのプロジェクトについて、大巻電機K.K.や関わっている人たちによって勝手に形づくられていく部分には、ほとんど口を出さないんです。でも見もしないでOKを出すことは絶対になくて、毎年の参加バッジやTシャツまで、必ず最後のブラッシュアップにはいつも真剣に取り組んでいます。本番も夜の部が終わるまですごく真剣で、妥協を許さないんです。2015年に足立市場で開催することになって、大巻さんから「人を集めるためにプレをやってください」と言われて、マシンを貸していただいて、好きなようにプレを開催してほしいと言っていただいたんですね。プレの開催が功を奏したのか、その年は合計5000人以上が集まりました。大巻さんは本番前の1週間、最後に形にするところでは全く妥協しないし、OKをくれないんです。多分それを足立の人たちに対する責任だと思ってらっしゃるんですね。
これほどまでにコ·クリエイティブな、共に創るプロジェクトになりつつあるメモリアルリバースですが、やっぱり「大巻伸嗣のMemorial Rebirth 千住」と謳うことで、いろんな人たち、自分を違うものに形づくられてみたいと思う人たちがメモリバを見つけてやってくるんです。けれどいっぽうでは、このあいだ吉川さんから、開催予定の舎人公園のメモリバについて「大巻さん、見たこともない芸術作品をください」っていうメッセージがあったんですね。「必ず見たこともない形にしてよ」というキャッチボールがなされていたんです。その意味で「大巻伸嗣のMemorial Rebirth 千住」と銘打っているからといって、我々も含めて市民が大巻伸嗣の《Memorial Rebirth》という作品に搾取されているとは全く思っていません。むしろ髙橋さん、吉川さんがプレッシャーをかけていて、そのために大巻さんは本番の朝まで寝ずに取り組んでいるんです。

森｜アーティストが作品をつくるときの妥協のなさって、わがままのように見えるんですが、実は本人もわがままを言いたいわけじゃなく、自分の作品に言わされていることがあるんです。作品に言わされているから必死なんです。だから、私たちがそこについていく度量をどう持つのかが重要ですね。千住の皆さんがメモリバに感化されているのも、そうした作品をめぐる魔力に気づき始めたからじゃないかなとお話を聞きながら思いました。

髙橋｜私はメモリバに関わって、自分のなかで楽しいことがたくさん増えています。最初は芸術は美術館で見るものだという認識だったんですけど、メモリバに携わって目の前でアートを見ることができて、アートの見方が変わりました。どんどん足立区の方と一緒にやりたいので、大巻電機K.K.に加わっていただける方が増えたらいいなと思います。

吉川｜僕は10年かかってやっとアートがわかったという感じです。ひとつひとつ作ったものが組み立てられてひとつの大巻作品となったときに、それがアートだとわかるようになった自分は成長したなと思います。「アートなんてわかんねぇよ」って言っていた僕みたいな人間がわかるようになったんだから、皆さんも僕以上にきっと「わかる」と思います。ぜひメモリバに参加して感動してもらいたいです。

大巻｜メモリバは本当に自分にも絶えず負荷をかけているプロジェクトなので、これから先どこまで深められるか、どこまで広がっていくんだろうと想像すると、怖いぶん楽しみもあるなと思っています。やはりこういうプロジェクトが1、2年で終わるんじゃなくて、10年迎えられたのもすごく良かったし、最初に目標にしていた30年、50年続けることが次の成功だと思っています。教育というのは、親が子に教えて、子がまた親になったときにもう一度教わった記憶といろんなものを結んでいくものです。足立区がメモリバを通じてそういう時間をかけた実践をしていける

場になればいいと思います。メモリバは、たとえ場所がなくなったとしても記憶をつむいでいくメタファーになって、世界中いろんなところで起こし得るものになるんじゃないかと思っているんです。これからも皆さんと一緒に考えて、また新しい動きができたらいいなと思います。

森｜ 足立区という場所が作家にとっても実験の場になっていることは大きいと思いますね。世界中引っ張りだこの大巻さんなら、単に作品を発表するだけならどこでもできる。でも、足立区という場所なら新しい実験が、しかも継続的にできる。メモリバというプロジェクトは時間をかけた実践によって、地域のお祭りのような、世代を超えた継承を形を変えて実現しているんです。そのことを、今日お話を聞いてあらためて感じることができました。

2018年度·西新井第二小学校の本番にて　撮影｜富田了平

熊倉｜ 大巻さんとは別に「メモリアルリバース千住くん」という人格があるというお話が、今日の大きな収穫だったんですが、そんな彼の10歳の誕生日を祝うはずだった「Memorial Rebirth 千住 舎人公園」は、残念ながらとても開催できない状況でした。2021、22年になるかもしれませんが、必ず10歳のバースデーはやろうと思っています。プロデューサーとしての公式発言ではなく、いち藝大教員の単なる強い願望ですが、出演をご快諾いただいている田中泯さん、大友良英さん、野村誠さん、待っていてね。足立の皆さんもぜひ一緒に参加してください。

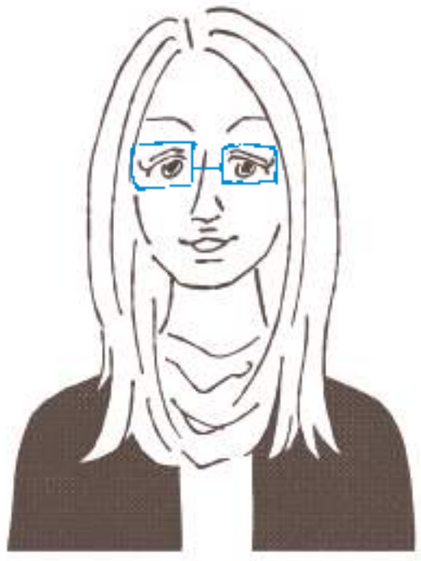
本座談会は2020年10月18日にオンラインで開催されたトークイベント「大巻伸嗣×地域アート?『アートなんてわかんねぇ!』」より再構成されました。
ゲストの山出淳也さん、石松リエさんのトークを含む全編のアーカイブ動画は以下でご視聴いただけます。

音まち千住の縁　YouTubeチャンネル
「大巻伸嗣×地域アート?『アートなんてわかんねぇ!』」
アーティスト·クロストーク #02（音まち10年目特別企画）

メモリバをめぐる ビフォー・アフター・ボイス

メモリバに集まった人々はなにを経験し、どのように変化していったのでしょうか。市民、学生、企業、行政といった様々な立場からメモリバに関わってきたひとりひとりの声を「ビフォー・アフター」の形で聞いてみました。

イラスト｜mutsumi



「メモリバは全部が『人』なんです」

東京藝術大学大学院修了

エレナ・ブジョラさん

エレナさんは東京藝術大学大学院の出身で、初代のメモリバ学生担当です。ウクライナで日本文化を伝える仕事をしていたエレナさんは、日本でもっとアートや文化を学びたいという思いから熊倉研究室の門を叩きました。そこで任せられたのが、準備中だったメモリバのプロジェクトでした。

Before

2011年、千住という新天地で、初めて現代アートに携わることになったエレナさんの挑戦が始まりました。たくさんの出会いを通じて日本特有の地域活動のあり方を学びながら、地元の人たちとゼロから関係を築いていきました。下町のコミュニケーションは楽しかった一方で、「外国人だから話が伝わらない」と言われて泣いた日もありました。

「関係づくりのために、時間を割いてあちこちに行きました。ウクライナには地元のお祭りやまちの活動がないから、なにもかも新鮮でした。地元の方々が地区の境目を気にしすぎることには驚きました。線路を挟んで管轄が変わるし、交流もあまりないし。同じ千住なので、気にしなくていいんじゃないかなと思っていました」

「大変なこともあったけど、千住で人気者になったのは嬉しかったことのひとつ。どこに行っても『エレナだ!』って。下町の雰囲気も好きだし、楽しかったです」

After

2011年から2015年までメモリバの運営に携わり、千住が地区を越えて元気になったという実感を得たエレナさん。大学院修了とともにメモリバを離れ、卒業後は一般企業で地方創生事業のリーダーとして働いています。現在でもメモリバ担当の学生があちこちで「エレナさんはどうしてる?」と声をかけられるほど、メモリバにとってなくてはならない存在です。

「メモリバは全部が『人』だからね。私がいなかったら、もっと違う形になっていたかもしれないし、ひとりひとりが関わったおかげでいまの方向に成長したんだと思います」

「メモリバに期待するのは、地域に新しいエネルギーをもたらして、元気を取り戻すこと。平凡な日常のなかに新しい活動があると、まちでの暮らしが楽しくなるんじゃないかな。足立区全部を周って、いつかまた千住に戻ってくるといいですね」

「『うちの地域に来てほしい』という
思いを持ったキーパーソンを探したいです」

市民・「大巻電機K. K.」リーダー

寺澤昌記さん

寺澤さんは2012年からメモリバに参加し始めた50代の男性です。千住の小学校6校の父親たちが参加するソフトボール「千寿リーグ」や、見回りパトロールを行うガーディアンシップ北千住にも参加しています。2016年度の千寿青葉中学校での開催の際は、同校の元PTA役員という立場から開催に尽力しました。2015年以降はメモリバの市民グループ、大巻電機K.K.のリーダーを務めています。

Before

当初は大巻さんのことを知らないながらも、興味津々でメモリバに参加し始めたという寺澤さん。市民チームは大巻スタジオのスタッフにシャボン玉マシンの講習を受け、テクニカルチームとして管理を任されるようになりました。責任も大きくなってきた2015年にテクニカルチームが「大巻電機K. K.」と名付けられ、同時に寺澤さんは市民の吉川和宏さんからリーダーに指名されることになりました。

「3年目くらいから、ある程度私たちにマシンの管理を任せようという流れがありました。大巻スタジオの人が講習をしてくれて、電大生が体育館にマシンを並べてチェックしていましたね」

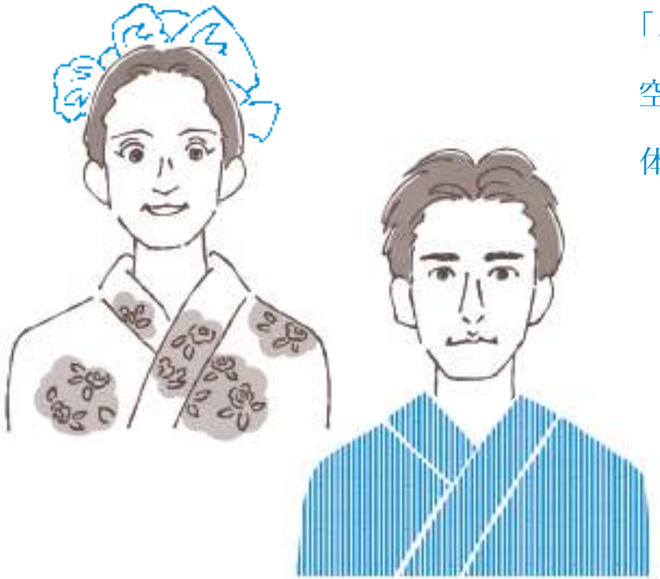
「大巻電機K. K.のTシャツができた年、大巻さんが打ち上げで私のTシャツに絵を描いてくれたんですよ。バケツ（シャボン玉マシン）を持った私と、その後ろにいろんな動物がバケツを持っている絵をさっと描いてくれて、とても印象に残っています」

After

2016年にはお子さんの通っていた千寿青葉中学校でメモリバを実現した寺澤さん。コロナ禍の舎人公園での開催中止では悔しい思いをしましたが、その思いをつなげてメモリバの輪を広げていこうと考えています。特にしゃボンおどりの新しい歌詞制作のために舎人地域の人と触れ合った経験から、たとえ小規模でも足立区の様々な地域でメモリバが実現してほしいと願っています。

「舎人の人との交流を通じて、同じ足立区でもまだまだ知らないところがいっぱいあるとわかりました。西新井の髙橋純子さんのように『うちの地域に来てほしい』という思いを持ったキーパーソンを探したいです。たとえすぐには実現できなくても、チャンスがあれば気持ちは伝わると思うんです」

「次の10年を見据えながら試行錯誤してやっていければと思います。過去に関わったお父さんたちも、いまはいなくなっているように見えても、声をかければまた来てくれる人もいると思う。メモリバが地域のお祭りのように成長して、文化として根づけば最高ですよね」



「踊りの輪に溶け込んで、
空間に身を浸す
体験をしてほしいです」

アーティストユニット くるくるチャーミー

富塚絵美さん（左）、大西健太郎さん（右）

くるくるチャーミーは、藝大出身の若手アーティストユニットです。作詞、作曲、振付を得意としていて、2012年度に盆踊り「しゃボンおどり」の制作を手がけて以来、ダンス、演奏、ワークショップなどに携わり、毎年様々な形でメモリバを担ってきました。

Before

メモリバ2年目に、市民を巻き込んでいく「盆踊り」の制作を依頼されたというくるくるチャーミー。富塚絵美さん、大西健太郎さんが振付を、松岡美弥子さんが作曲を手がけ、完成させました。大巻さんや運営側とのやりとりも手探りで、何度も話し合いを重ねていきました。初回は歌詞も違い、生演奏でもありませんでした。

富塚「しゃボンおどりの振付には昔ながらの盆踊りの動きや日本舞踊の空間感覚など、いろんなものを盛り込んでいます。踊りに馴染みのない人でも踊れるし、踊りの技術がある人にはより深めていける振付にしていきました」

大西「最初のビジョンに『上手な人の踊りを見るのではなく、みんなが輪の中に入って、踊っている人たちが溶け込んでいくような盆踊りにしたい』というお話がありました。見ている人たちをどうやって巻き込んでいくかを考えて、地元の日舞の先生たちとも、ダンサーたちは声をかけやすい距離で踊っているようにしようとか、掛け声はこうしようと話し合っていきました」

After

2013年には千住ゆかりの歌詞が完成し、生演奏で踊る形式になったしゃボンおどり。少しずつ大巻さんともチームになっていったくるくるチャーミーは、市民と大巻さんの間で通訳のような役割も兼ねながら、毎年新たな取り組みを行います。2015年の夜の部では即興で生演奏とコンテンポラリーダンスを披露。以降も「装いワークショップ」や「ティーンズ楽団」、西新井での合唱制作といった市民主体の活動を広げてきました。

大西「『無駄で過剰なエネルギーも存在していいんだ』という感覚を感じてもらいたくて、たくさんの装飾素材を使った装いワークショップをひらきました。シャボン玉がキラキラして、顔についたりする空間には、自分と他人の境目が分からなくなるような感覚があって、気がつくとみんなが踊りの輪に入っているんです。正しい踊りを意識せずに、輪に溶け込んで、空間に全身から身を浸す贅沢な体験をしてほしいです」

富塚「メモリバで若手の表現者たちが経験を積んでいるのは大事なことで、くるくるチャーミーのメンバーも活動の幅を広げています。表現者だけでなく、様々な立場の協力者が、義務感を超えていつの間にかワクワクするようなことに挑戦できる場になるよう、ワークショップなどを通じてサポートしていきたいです」

「ずっと『なんだかなぁ』と思っていました」

市民・元「大巻チーム」

Aさん

Aさんは2011〜12年、市民によって構成された「大巻チーム」としてメモリバに参加していました。「音まち」を離れた後、自身で地域にネットワークをつくる試みを立ち上げたり、新たな地域のアートプロジェクトに参加するなど、活躍の場を広げていきました。

Before

当時、地域と関わる仕事をしていたAさん。地域での活動を経験して仕事に活かしたいという気持ちもあって「音まち」に参加しましたが、「大巻チーム」としてメモリバの打ち合わせに参加するたびに違和感を覚える部分が増えていきました。

「書籍で読むだけでは限界があって、地域の活動は参加しないとわからないことの方が多いなと思ったんです。『音まち』は新しい動きでもあったし、NPOと大学の連携というテーマも当時の自分に合っていて、何かきっかけになればいいなと思って説明会に行きました」

「大巻チームの役割がずっとはっきりしなかった部分がありました。募集の段階では、一緒に企画したり、一緒につくっていくという話だったけれど、実際に打ち合わせでアイディアを出せと言われて出しても、それが叶うことがあまりなかったんです。『当日の人手がほしいんだったら、最初からそう言ってくれ!』と思いました。当時の大巻チームは、毎回愚痴を言い合いながら帰っていましたね」

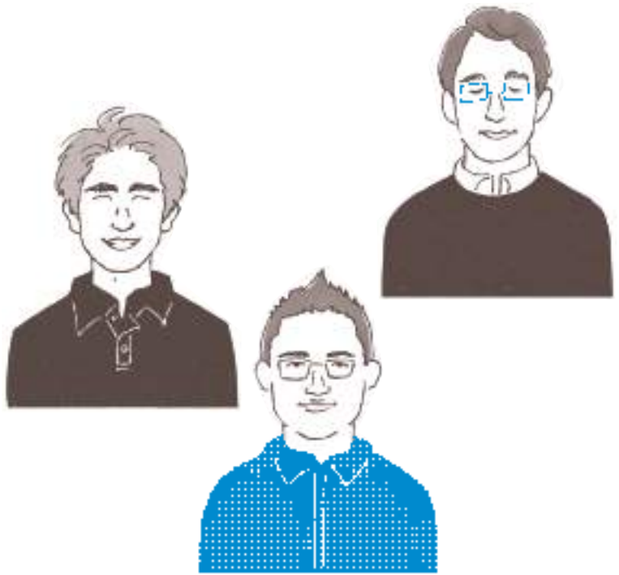
After

約2年の参加を経て、メモリバから気持ちが離れてしまったAさん。ですが、当時「音まち」で関わった人に声をかけられて、現在ではほかの地域でアートプロジェクトにも関わっています。メモリバ以後の活動には、メモリバの運営に感じた「なんだかなぁ」の経験も生きているといいます。

「市民がアートプロジェクトに関わるって結構難しいことだけれども、それは当時の事務局もわかってなかったし、自分たちもわかってなかったんです。特に初年度はみんな探りながらやっていたので、うまくいかなかったのも仕方がないといまは思います」

「音まちで地域活動に関わることはできたから、今度は自分で団体をつくって活動したくなったところもありました。大巻チームでいろんな経験をして、結果的に自分がボランティアをコーディネートするときにも、反面教師的に役に立ったかな。メモリバは『これをやることでどうなるの?』という総括もちゃんとされるべきだと思います。レポートってどうしても出ると美しくなるけど、それはどうなのかな?って」

「地域発展の領域で、技術畑の人間がこんなに集まるって、まずありえないことです」



東京電機大学未来科学部
ロボット・メカトロニクス学科卒業

小野寺慧知さん(左)、清宮悠生さん(中)、荻原健さん(右)

2013年から現在まで、東京電機大学未来科学部ロボット・メカトロニクス学科のみなさん(電大生)は、メモリバに欠かせない存在です。かつて電大で教鞭をとり、現在は大巻電機K. K.メンバーでもある井筒正義先生のもと、音まちの活動に関わってきました。なかでもメモリバでは本番のプロジェクションマッピングによる演出、シャボン玉を出すミニマシン「電大マシン」の制作に携わってきました。

Before

所属する研究室の活動の一環として、メモリバに参加した電大生たち。先輩に誘われたから、研究の息抜きとして、就活のアピールポイントとして、「藝大生と合コンができる」という言葉につられて……。それぞれの理由で集まり、なにもわからないまま手伝い始めました。

荻原「芸術を全く知らなかったので、声をかけられて、見に行って、こういう世界もあるんだと感じました。最初は連れてこられただけだったけど、やっていくなかで面白さも感じるようになりました。研究室とは全然違う環境なのが新鮮だったし、地域の人たちがまちが活気づくためにどうすればいいか本当に真剣に議論していて、いい経験になりました」

小野寺「大学で学校主導で地域連携の活動をすることはあまりないので、メモリバは新鮮でした。地域の人から『もっと電大生が地元や千住に関わってほしい』『もっと大学をオープンにしてほしい』と言われたこともあります」

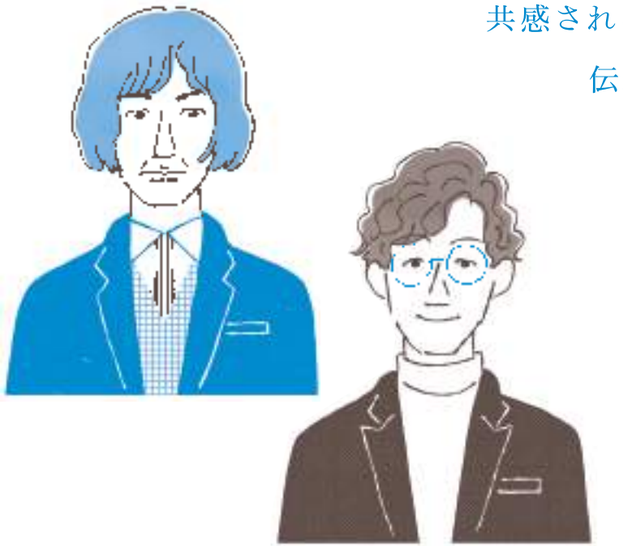
After

本番前に遅くまでシャボン玉マシンの整備をしたり、千住のまちを自転車で走り回って映像を撮影したり。誘われなかったら地域に携わることもなかった電大生たちが、地域と芸術とのつながりのなかで、それぞれに面白さややり甲斐を見つけていきました。社会人になってからも活動に残ったり、一度やめた後に復帰したりと、電大生とメモリバの緩やかなつながりは続いています。

小野寺「社会人になってもメモリバに参加しているのは活動が楽しいと思えるようになったからかな。純粋に人と会ってなにかするのが楽しいです。いずれ関わらなくなったとしても、いつかふらっとまちに出たとき、自分の子供にメモリバを見せられたらと夢物語を描いています」

清宮「地域発展みたいな領域で、技術畑にどっぷり浸かった第一線の人間がこんなに集まるって、まずありえないことなんです。芸術と技術って、アウトプットで自分のアイディアを表現することでは同じはずなんだよね。なので、藝大生にもぜひ技術にもっと触れてもらって、もっといろいろ一緒にやっていけたらと思っています」

「きれいなだけじゃなくて、
共感されるストーリーがないと
伝わらない時代だと思うんです」



株式会社丸井　営業企画部　カスタマーコミュニケーション課

江﨑俊幸さん（左）

株式会社マルイホームサービス トクラス事業部　事業企画課

渡邉裕太さん（右）

北千住マルイで開催された「千住フェスタ」でメモリバとのコラボイベントを企画したふたりは20代で、当時は入社2年目でした。「若い力で千住を盛り上げる」をテーマとした「カラージュ」（カラー+コラージュ+カレッジの造語）というコンセプトで、様々な文化イベントを企画しました。

Before

渡邉さん、江﨑さんは社内では若手同士で、売り場の仕事だけではないプロジェクトがやってみたかったといいます。「地域の人が喜ぶ企画を」と店長に助言されて、シティプロモーションについて調べるうちにメモリバと出会うことになりました。

渡邉「足立区のシティプロモーション課に相談させていただいたとき、『音まち千住の縁』には藝大の学生さんもたくさん参加していて、大学とも連携できるのではないかとご提案がありました」

江﨑「表で目立ってお子さんたちも楽しんでもらえるような企画がないかなって探したときに、メモリバはすごくきれいだし、考え方にも共感できたので、いいんじゃないかと思ったんです」

After

日々、販売促進を中心とした業務のなかで、純粋にお客さんに笑顔になってもらい、また店舗に来たいと思ってもらえるようなファンづくりにフォーカスした企画ができたのが大きな成果でした。地域との関係性づくりができ、社内の若手としてもプロジェクトへの達成感を得られました。

江﨑「地域に思いを持って表現している人たちがいることを地元の人たちに知ってもらいたいと思いましたし、そこにマルイとして関わりを持つことで、どちらも好きになってもらえる。地域一体となってウィンウィンの関係性でやっていけたメモリバは理想的だったと思います」

渡邉「純粋にきれいだと思う気持ちって、多くの人を振り向かせるものなんだと感じました。思いがあっても、それを言葉で伝えて振り返ってくれる人はあまり多くなくて、メモリバを目の当たりにして共感の輪が生まれていくのを、身をもって体験させていただきましたね」

「まちの人の熱意に直に触れる経験は、メモリバが初めてでした」

足立区シティプロモーション課

加美山拓也さん（左）、栗木希さん、舟橋左斗子さん（右）、細谷宏さん

足立区のシティプロモーション課（シティプロ課）は、東京23区初となる区のイメージアップを目的とした課として、2010年に創設されました。「Memorial Rebirth 千住」の基盤である「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」は同課の主催事業です。ほかにも区の広報物の改善や大学連携といった多様な業務を通じて、区民の交流の活性化とまちのイメージの向上に取り組み続けています。

Before

「音まち」の出発点は、区の職員が日ノ出町にあった大巻さんのアトリエを訪ねたことでした。課内にアートプロジェクトの経験者がいないなか、アートを通じて足立区に「縁」を生み出す挑戦が始まります。2011年度、「音まち」の端緒を開いたメモリバの準備では、連日まちを駆け回ったそうです。庁内で話を通し、地元の町会を周り、警察署と調整を試み……。無我夢中で迎えた当日、雨のいろは通りに子どもたちの歓声があがりました。

細谷「いま、文化行政を担当している組織は、主に区内で活動している文化団体の支援や連携が中心なので、ゼロから事業をつくっていった『音まち』は特殊なケースです。ビエンナーレのような定点的な催しではなく、まちに関わるプロジェクトにしたいと話し合い『音まち』にたどり着きました。当初から『10年はやりたい』と思っていましたね」

舟橋「さびれていたいろは通り商店街に人の賑わいが戻ってきて、昔から住んでいる人は感動していました。その光景が、まちの人がメモリバに関わる原動力になったのだと思います」

After

メモリバは開催を重ねるたびに、シティプロ課の予想以上に多くの人を巻き込んでいきました。そこには、まちの人がもともと持っていた地域のつながりが生きています。いまでは千住地域で「アートプロジェクトといえばシャボン玉」というイメージができつつあり、メモリバを機に「音まち」の新たな展開も生まれました。シティプロ課はいまも「音まち」と並走しながら、アートが地域のハブとなり、区民の輪が広がることを期待しています。

加美山「大巻電機K.K.と一緒に汗水流して本気で仕事すると、悩みや課題をぶつけてもらえるんです。『ティーンズ楽団』の現場で子供たちが前向きに変わっていく様子も印象的でした。まちの人の熱意に直に触れる経験はメモリバが初めてでした」

栗木「藝大生がまちとつながったことは彼らにとっても、まちにとっても財産だと思います。まちの人としっかり関わって、ときには怒られたり褒められたりして、彼らの学生生活が豊かになったと思います」

舟橋「『音まち』という核のまわりでいろいろなことが起こって、千住のまちは変わってきたと思います。いつまでも普通の人が考えつかない面白いことが起こり続けてほしいですね」

「ハードなアートワークで、
毎年が失敗のできない
一発勝負です」

大巻伸嗣スタジオ

保良雄さん（左）、**宮川修平さん**（中）、
田中裕佳子さん（元スタッフ／右）

大巻伸嗣スタジオ（大巻スタジオ）**は、大巻さんのアーティスト・スタジオです。大巻さんの作品制作を支えてきたスタジオのみなさんは、2008年の横浜トリエンナーレでの発表以来、国内外で披露されてきた作品としての《Memorial Rebirth》に一貫して携わっています。保良さん、宮川さん、田中さんは、千住のメモリバが開始から現在まで進化していく様子を間近で見てきました。**

Before

千住でメモリバがスタートした当時、大巻スタジオのみなさんは、作品が地域と継続して関わることでどう変化するのか、緊張しながら見守っていました。大巻さんがつくり込むだけでなく、あえて手を離す部分を設けて、地域と協働していく新しいメモリバ。シャボン玉マシンの取り扱いを市民と分担するなど、通常の作品とは異なる部分も多く、アートの共通言語がない場所でつくり上げる方法を模索していきました。

保良「大巻さんは作品に協働を持たせる仕掛けが上手なので、千住でも続けていけば人は増えるという確信はありました。工程に必ず簡単な作業を用意したり、踊りで巻き込んだり、子供から大人まで知らず知らず内包されていくんです」

宮川「シャボン玉マシンはデリケートな機材ですが、それ以上に、マシンを作品の一部として受け継いでいくこと自体が《Memorial Rebirth》のコンセプトでもあるんです。持ち方ひとつとっても儀式のように気をつける必要があって、市民の方に伝える難しさもありました」

After

毎年の開催を通じて、大巻スタジオには市民と協働しながら連携をとるノウハウが蓄積されていきました。大巻電機K.K.とも会議を重ね、マシンの扱いも個々人に合わせた伝え方を工夫しています。大規模な開催も増えた現在、参加者の安全に注意しながら全体を指揮していくのは非常に高度でプレッシャーのかかる仕事でもあります。

宮川「市民の方の思いを感じとり、やる気やフラストレーションを察しながらやることを割り振っています。大巻さんと同様に場の空気にアンテナを張り、次のきっかけになる声掛けを心がけています」

保良「メモリバはハードなアートワークで、毎年が失敗のできない一発勝負です。年々まちの期待に応えようとするほど内容も尖っていき、少しでも触ったら折れそうな状況になっていきます。関わる人が変わるたびに、そうした面が理解されない難しさも感じています」

田中「当時からメモリバを続けていこうというまちの方の意志に驚いていましたが、いまではたくさんの人、音楽、踊りが加わり、千住のメモリバ独自の進化を感じます。作品のテーマは『記憶の再生』ですが、いまみなさんがつくっているものもまた未来のメモリバの記憶になると思います」

コロナ禍をしなやかに生きる　「音まち」事務局と大巻電機K.K.の活動の記録

藤枝怜（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科博士後期課程／メモリバ学生スタッフ）

2020年、新型コロナウイルス感染症の未曾有の拡大により日本中に自粛の帳が下りました。ここ足立区でもそれは同じで、例年多くの観光客で賑わう足立区恒例の「足立の花火」は早々に中止が決定され、千住神社と千住本氷川神社が5年に1度開催する「大祭」も見送りを余儀なくされたのです。

状況は私たち「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（音まち）の活動をも飲み込みました。顔を突き合わせて侃々諤々（かんかんがくがく）とやってきた様々なミーティングは軒並みビデオ会議へとその場を移し、さらには本番と呼ぶ各事業の集大成となる催しも実施形態の変更等の判断が迫られました。もちろん「Memorial Rebirth 千住」（メモリバ）とて例外ではなく、2020年4月に向けて準備をしていた、活動10年目の節目となる祝祭的な本番も中止となってしまいました。楽しみにしてきたたくさんの関係者の皆さんの心情は想像するに難くありません。大きな目標がふわりとどこか遠くへ飛んでいってしまい、「これからいったいどうしよう?」という状況から、私たちは再出発することとなったのです。

しかし、結論から言うと、必ずしも悪いばかりではありませんでした。むしろ平時だったらきっと起きなかったであろういくつかの面白いことが現れ始めたのです。ここでは私たち事務局にとって欠かすことのできない仲間である市民チーム·大巻電機K.K.とともに様々な模索を試みた2020年、そしてそれらが徐々に結実していった2021年の2年間について、印象的な2つの出来事を通してご紹介したいと思います。

「大巻電機K.K.ってこんなにいろんな人がいたんだ！」
いつもの仲間たちとの対話から、「メモリバ学校の昼やすみ」へ

まず1点目の面白いことは、コロナ禍によりプレ企画から本番へという既定路線を失ったために、文字通りゼロからメモリバを捉え直す必要に迫られたことで、かえってじっくりと市民メンバーひとりひとりの語りに耳を傾ける時間が生まれたことです。

話は前後しますが、コロナ前夜の2019年の暮れ、私たちは舎人公園の本番に向けた雰囲気作りの一環として、「メモリバ学校」という連続企画を打っていました。これまでメモリバを一緒につくってきた大巻電機K.K.メンバーをはじめとする市民を先生役、新しく公募で募った方々を生徒役として、「国語」「音楽·体育」「家庭科」といった学校の科目になぞらえて「しゃボンおどりの歌」の新たな歌詞作りや振付の練習、衣装づくりなどを楽しみながら学ぶプログラムです。しかし、残念ながら感染症の拡大により、最後の授業を行うことはできませんでした。

その消化不良の感じを少し引きずりつつ、自粛の状況下の2020年春、とにかくなにか動き出そうと、事務局と大巻電機K.K.とでビデオ会議ツール（zoom）を使っておしゃべりをする機会をつくりました。通常だったら、次の本番会場を探して足立区内を方々歩きまわっていた時期です。でも、いまいったいなにを話し合ったらいいのか。かといって、このままメモリバを下火にしてなるものか。そのようなことを思いながらの集まりだったように思います。

ところで、大巻電機K.K.はバラエティに富むメンバー構成が特徴で、区内の学校に通う（もしくは通っていた）お子さんのいるお父さん·お母さんであったり、近隣の東京電機大学の卒業生や企業の研究員の方などもいます。なので、お互いの近況もいろいろでした。幼稚園の預かり保育ができなくなったこと、子ども食堂が閉まったこと、都道府県をまたぐ出張が取りやめになったこと……。

zoomで開催された大巻電機K.K.のおしゃべり会

そこで、ふと私たちは気がつきました。これまでのメモリバには、このようにひとりひとりの話をじっくりと聞く時間がなかったのです。

ひとつの事業を10年も続けていくと、良くも悪くも、年間を通じた活動のルーティーンが見えてきます。メモリバの場合には、私たち事務局と大巻電機K.K.が協力して本番の開催場所とその担い手を探し、それに向けた広報活動としてプレ企画という小規模なシャボン玉イベントを3〜4回実施しつつ、開催場所の周辺にお住まいの地域の方々との関係を深めながら本番を迎える。ただ、それらを着実にこなしていくだけで私たちは精一杯で、大巻電機K.K.の個々人の思いに考えを巡らせられないことがありました。

こうして、何年も一緒にやってきたはずの大巻電機K.K.とあらためて出会い直すとでもいうような、不思議と新鮮な気持ちのする会話をしているうちに、次第に活動のヒントになりそうないくつかのキーワードらしきもの――おうち時間、気晴らし、学びなど――が浮かび上がってきました。いまのメモリバが、そうした状況と関わっていくことはできないか。まずはできることから始めてみよう。

そして立ち上がった活動が、「メモリバ学校」の活動の場をYouTubeに移した「メモリバ学校の昼やすみ」です。「昼やす

み」とは、学校が担っているコミュニティとしての役割に着目したネーミングで、大巻電機K.K.のメンバーが今度は先生役ではなくクラスメイト役として遊びを提案するという意味を込めました。メンバーがシャボン玉にまつわるめいめいの遊びの様子を動画に収め、7月を皮切りに計10本の配信をしました。その内容も、家庭にある材料で簡単につくれる割れづらいシャボン玉レシピの紹介や、レジンを使いシャボン玉をかたどったアクセサリーづくりを紹介するもの、消しゴムはんこでつくるシャボン玉スタンプの説明など、メンバーそれぞれの興味や得意分野を生かした、種類豊富なものでした。

大巻伸嗣さんの“All for one”と「メモリバのホームステイ」

2点目の面白い点は、個人の語りを聞くという活動が、「メモリバのホームステイ」という事業に具体的に結実した点です。

「メモリバ学校の昼やすみ」もある程度の本数を出し、さて次は何をしようかという2020年10月、メモリバの生みの親である大巻伸嗣さんとともに、これまでのメモリバを振り返るトークイベント「アーティスト·クロストーク《オンライン》#2 大巻伸嗣×地域アート?『アートなんてわかんねぇ!』」(pp.34–50)を開催しました。加えて後日大巻さんを招いて、大巻電機K.K.のミーティングも開かれました。私たちは、大巻さんの言葉のシャワーを浴びているうちに、なんだかむずむずとこのコロナ禍を乗りこなしてみたいという気持ちが湧いてきました。

ここで大巻さんがくれたキーワード“All for one”を紹介しましょう。いままでのメモリバがたった1日のお祭りのためにみんなの力を結集させる“One for all”だとするならば、たくさんの人が集まれないいまこそ、ひとりひとりがこれまでの/これからの記憶を「語る」機会をみんなでつくることに意味があるのではないかということです。これに音まちプロデューサー·熊倉純子先生の助言も加わって、たった1台のシャボン玉マシンをひとつのホームに預け、シャボン玉とともにささやかな非日常の対話の場を立ち上げる「メモリバのホームステイ」なるアイディアが生まれました。

さっそく大巻電機K.K.の中から、ホストファミリーの一般公募に先駆けて試行実験するためのホームを募りました。そこで手を挙げてくださったのが、大巻電機K.K.のリーダーで足立区内でお菓子の製造·販売業を営む寺澤昌記さん(pp.54–55)です。寺澤さんのご実家の家屋は、1階が仕事場、2階が住居というつくりで、若き日の寺澤少年にとって、ご兄弟とともに遊ぶ格好の場所でもあったそうです。そんな建物も年月とともに老朽化が進んでいよいよ取り壊すことが決まり、シャボン玉を出したいと言ってくださったのは、その解体工事の数日前の本当に最後の時に合わせてのことでした。2021年1月、私たち事務局が現地に伺ってみると、柱には背丈を記録した鉛筆の跡、壁のあちこちにはたくさんの落書きと数えきれないキャラクターシール。かつての生活の匂いがそこかしこに充満していました。それらをひとつひとつ慈しむように眺める寺澤さん。やがて寺澤さんのお兄さんも合流し、いよいよシャボン玉を出し始めると、家の中でまどろんでいたたくさんの記憶がゆっくりと目を覚ますようにおふたりの口から語られます。「天井裏に秘密基地をつくって、そこで火遊びをして、こっぴどく怒られたなぁ」。「親父も出張が多かったし、家中どこに落書きをしても怒られなかったから。そんな家なかなかないよね」。「垂直跳びでどれくらい飛び上がれるか兄弟で競って。ほらそこに手形が残ってる」……。

この日、試行実験というにはあまりに素敵なひと時に立ち会うことのできた私たち。面白そうという予感は確信へと変わりました。こうして2021年7月、「メモリバのホームステイ」はコロナ禍におけるメモリバの事業として公募を開始し、これまでに試行実験も含めて10件のご家庭や施設にささやかなシャボン玉をお届けしています。

2022年2月のいま、オミクロン株が大流行しています。東京都内だけで連日1万人をゆうに超す新規感染者が報告され、音まちに限らず、文化芸術関連のイベントも中止や縮小など逆風の只中にあります。しかしメモリバは、大巻電機K.K.との対話をきっかけに、確かな手応えを得ることができました。

次に本番がいつできるかは、私たちもまだ分かりません。その日まで、「メモリバのホームステイ」を丁寧に続け、これまでにない“One for all”の大舞台を、大巻電機K.K.そしてこれから知り合うことのできるであろうまちの方々とともにつくり上げていく日々がいまから楽しみでなりません。

メモリバ学校の昼やすみ

寺澤さん宅に残されていた落書き

その他の「メモリバのホームステイ」の実施記録はMemorial Rebirth 千住の特設WEBサイトからご覧いただけます。

「メモリバ学校の昼やすみ」の動画はこちらからご覧いただけます。

寺澤さん宅で実施された「メモリバのホームステイ」の風景

大巻伸嗣とMemorial Rebirthの未来

大巻伸嗣

「アートではない」足立のメモリバ

かつて千住にアトリエを構えていましたが、本当は足立で活動するつもりはなかったんです。まちに入り込まないほうが、空間や人間を客観的に見ることができるからです。漂いながらまちになじんで、いろんな人と日常の会話をしながら、ひっそりと制作していたかったんです。

そんな僕のもとを足立区役所の方が訪れたのは「音まち千住の縁」が始まる前の2008年でした。ちょうど横浜トリエンナーレで《Memorial Rebirth》を発表した年で、本当に忙しかったのですが、10分だけの予定が気づけば2時間話しこんでいたのを覚えています。

「足立区でアートプロジェクトをやりたい」と言われて、まず予算はあるのか、人はいるのかと投げかけました。アートプロジェクトを本当にやるなら、覚悟がないと難しいからです。なのに、まだなんの目処も立っていないという話でした。だから、千住でアートプロジェクトの研究をしている東京藝術大学の熊倉先生や、東京都歴史文化財団に相談してみてはどうかと助言をしたんです。

そして2011年、「音まち」の立ち上げの年に熊倉先生から声がかかりました。「大巻さんの言葉で『音まち』は始まったんですよ」。そう言われて「わかりました、責任を取ります」と返事をして――。そんなふうに、僕と足立の関わりはスタートしました。

足立区でプロジェクトをやることになって、ただ作品を放り込むだけでは、一過性のわからないものとして終わってしまうと考えました。それよりも、例えば子供の教育と同じように、繰り返すことで理解を深めて発展させる、そんな実験ができたら面白いと思いました。「繰り返しても同じではないもの」をやろうと考えて、《Memorial Rebirth》なら、まちの空間に面白いことを生み出していけるんじゃないかと感じたんです。

「足立区のメモリバ」が決まって以来、区内のあちこちへ出向いてたくさん話をしました。そこでたびたび言っていたのが「アートという言葉を使うのをやめます」ということでした。

もちろん《Memorial Rebirth》はアート作品として、2008年以来いろいろな場所でパフォーマンスを続けています。でも足立区でのメモリバは、アーティストの誰かがやっているアート作品という枠組みを超えたものにしたかったんです。

メモリバを、人が集まって、お互いの顔を認識しながら協働していく場にしたいと思いました。そのためには、メモリバが誰のものでもないことが重要だったんです。例えば祭りの神様ってみんなのもので、誰のものでもないじゃないですか。誰のものでもないなにかに対して、人が集まって、話して、つくり上げていく。シャボン玉をつくる行為を通して、祭りのようにまちや人が動いていくプロジェクトにしたかったんです。

2015年度·足立市場の開催風景　撮影｜松尾宇人

初年度は、学生のエレナさんやディレクターがまちのなかに入っていって、人とつながっていきました。ウクライナ人のエレナさんがいきなり日本語で話しかけてきて、祭りだとかシャボン玉だとか言われて、まちの人はなんだかわからなかったと思います。彼らがまちに異物として投入され、関係を結んでいくこと自体が、メモリバのミッションでした。

メモリバには目標がたくさんあります。まちの人に認めてもらうという目標が最初にあり、それを達成したら、今度は協力者を見つけることが目標になり、その次はシャボン玉を飛ばすことが目標です。その向こうには近い未来にどんな目標を立てるかという課題があります。シャボン玉はあくまでも過程の

ひとつで、共通の目標において動いていく関係性や、まちに対する発見が大切なんです。

まちから表現者が生まれる

これだけまちのなかで継続しているアートプロジェクトは、なかなかないと思います。だからこそ、まちの問題を考えることは大事です。最近は薄れてきているけど、足立区には昔から地域的・社会的な問題があったし、核家族化、孤独死の問題、外国人の家庭が地域とのコネクションを持てないという問題もありました。メモリバは、こうした問題を抱え込んで関わっていくための挑戦でもありました。

初年度のいろは通り商店街でも、いろんなことが見えてきました。地域が変容していった結果、人に意識されなくなる空間が存在していたんです。商店街で古いお店がどれだけやっていても、興味のない人には見えないわけです。みんなが便利なスーパーに集まって、どうしても人が離れていってしまう。だからいろは通りでは、商店街のお店をあえて開いてもらい、そのなかでシャボン玉を飛ばしました。

1回目が終わった後には、学生のリサーチで、地域の踊りの教室におばちゃんやおばあちゃんがたくさんいることを知りました。そこで、地域の人たちと盆踊りをつくりたいと提案したんです。飲み屋に元シャンソン歌手のおばちゃんがいるから歌ってもらおう、児童館で迎えを待っている子供たちに盆踊りを教えられたらいいねという話もしました。地域の人たちのスキルをつなげてものをつくっていけたら、足立区がもっと面白くなると思ったんです。

2回、3回とメモリバを続けていくなかで、なにかイベントをすることよりも、まちの人が考える力を持つことが重要だと気がつきました。受け手ではなく、仕組む側としてまちを想像する意識のことです。実際に毎年ワークショップをしたり、「しゃボンおどり」をつくったり、音楽隊に協力してもらったり、夜の部で映像や音を使ったパフォーマンスを仕掛けたりしていくうちに、少しずつ自分もやりたいという人たちが出てきたんですね。

そこで2015年の足立市場の夜の部では、プロフェッショナルの表現を見せることにしました。まちの人たちに、表現のクオリティや豊かさを意識する機会をつくりたいと考えたんです。くるくるチャーミーのチョリさん（富塚絵美さん）たちや、プロの演奏者も呼んで、表現者としてのクオリティをしっかりと見せてパフォーマンスしてほしいと伝えました。いまは届かない目標でも、いつか彼らに代わって、まちの皆さんが表現者になってほしいという思いを伝えたかったんです。

このころ、市民グループの大巻電機K.K.が発足しました。彼らは自分たちでメモリバのフォーメーションを組み、パフォーマンスする意識で取り組んでいます。いつか足立から芸術家ないしは表現者が生まれて、彼らが船頭となって導いていくサイクルを目指しています。

未来を信じられる社会をつくる

コロナ禍で、10年目の舎人公園のプロジェクトは中止になりました。たくさん話し合いを続けて、超一流の人たちを呼んだパフォーマンスも企画していたので、本当に残念だったし、このままメモリバの灯が消えてしまうのではという危機感もありました。そんなとき、僕からなにかできないかと話す前に、事務局から「音まち」のみんなが動いていると連絡が来たんです。

そこで提案したのが「All for one」でした。いままでのメモリバはみんなでつくり上げて、個に帰していった。今度はひとりのためにつくり上げて、それがみんなをつないでいく。自分たちが大事にする「個」を凝縮させてみたら、より集団が強くなるんじゃないかという逆転の発想です。そこで、新たに5台のシャボン玉マシンをつくり、まちの皆さんにやりたいことを実行してもらっています。

彼らがいまメモリバを動かしているのは、いままでの活動を振り返りながら、ひとつ違う次元に

行こうという意識が生まれたからではないでしょうか。2019年に藝大生の発案でスタートした「メモリバ学校」から、こうした流れが起こったように思います。みんながメモリバの捉えかたを拡張して、自分たちで発信し、場をつくっていく。メモリバは新たなステージに入ったのだと実感しました。

コロナ禍以後のメモリバがなんなのか、僕にはわかりません。それは、まちの人たちが考えることだからです。いまコロナ禍を乗り越えようとしている彼らが考える次なる目標ができたときに、コロナ禍以後の「足立のメモリバ」が生まれてくると思います。

見たことのないものを信じる大切さってありますよね。未来を信じていない人たち、自分がなにかを生み出せることを信じられない人たちに、未来をつくることはできないじゃないですか。でも、メモリバで「できない」と思っていたものが実現できたら？ それを信じる親がいて、その姿を子供が見ていたら？ そういう未来を信じられる社会構造を実現することが大事だと思います。教育格差や収入格差も激しい地域だからこそ、分断を超えて思いを共有できるようになれば、足立区は世界で唯一の場所になると信じています。

2017年度·関屋公園の開催風景　撮影｜冨田了平

僕にとって足立はもうひとつの故郷です。でも、コロナ禍でお店がなくなり、まちの顔ぶれも変わってしまいました。まちってどんどん記憶をなくしてしまうんです。足立に人情がなくなって、ビル風が吹く寒いまちになったらいやじゃないですか。人の小さなつながりを大事にできる、無駄なことを楽しめるまちであり続けてほしいと思います。

コロナ禍を超えたら、みんなの記憶に残る大きなメモリバをやりたいですね。言葉で表せないぐらいの光と人に満ちた場をつくりたい。それはアートと呼ばれなくてもいいんです。わけのわからないほどのエネルギーに満たされた、忘れられない空間を、皆さんに体験してほしいです。

「Memorial Rebirth 千住いろは通り」(2012年3月)　撮影｜大塚歩

「Memorial Rebirth 千住いろは通り」(2012年3月)　撮影｜大塚歩

「Memorial Rebirth 2012 千住本町」(2012年11月)　撮影｜雨宮透貴

「Memorial Rebirth 千住 2013 常東」(2013年10月)　撮影｜雨宮透貴

「Memorial Rebirth 2012 千住本町」(2012年11月)　撮影｜雨宮透貴

「Memorial Rebirth 2012 千住本町」(2012年11月)　撮影｜雨宮透貴

「Memorial Rebirth 千住 2013 常東」(2013年10月)　撮影｜森孝介

「Memorial Rebirth 千住 2014 太郎山」(2014年11月)　撮影｜加藤甫

「Memorial Rebirth 千住 2015 足立市場」(2015年10月)　撮影｜松尾宇人

「Memorial Rebirth 千住 2015 足立市場」（2015年10月）　撮影｜松尾宇人

3 評価を学ぶ

アートプロジェクトの評価とは、どのように決まるのでしょうか。
専門家のみなさんにメモリバという事例を分析してもらい、
客観的な評価としてまとめるとともに、
ふだんは目に見えにくい、まちにとっての価値、
人にとっての価値をひもときました。

アートプロジェクトの評価について

佐野直哉（上野学園大学音楽学部音楽学科　准教授）／**槇原彩**（成蹊大学文学部芸術文化行政コース　客員講師）

はじめに

「評価」というと何か上から目線の成績表を思い出す人が多いかもしれません。評価の目的としてすぐに考えつくのは**アカウンタビリティ**、つまり公的資金などを得た場合、その効果などを示し、いかにその資金投入が価値あるものだったかを説明する**説明責任**でしょう。そのために一般的には事業の外の人である評価の専門家やコンサルタントに入ってもらって、その効果などを測定することがしばしばおこなわれます。

そもそも評価とは本来、その事業の**価値の芽**を見出し、測定し、事業の関係者や出資者（つまり公的資金であれば市民）に提示することです。さらに評価には、今この事業が道のりのどの位置にいるのだろうか、と把握するもの、事業の価値の芽を育てるためのプロセスの改善点を明らかにするためのものもあります。そしてその芽が花開き、新たな種が飛び散って他の場所に波及することなどもきちんと評価で捉えてあげなければなりません。事業が進んで何らかの価値らしきものが生まれた際に、適宜**振り返り**し、**言語化**することでその姿を捉え、それらに根拠を与える**エビデンス**（証拠）を集める、そしてそれらの情報を基に次の一手を戦略的に考える、さらにその事業を深く知らない人たちとも共有できるようにするために役に立つのが評価なのです。つまり評価は客観的に現在の事業の状態を露わにする**健康診断**であり、事業の外の人と共有する**共通言語**なのです。こう考えると評価は**説明責任**以外の目的にも有益であることがわかるでしょう。

文化芸術事業の評価

アートプロジェクトなど社会に向き合う文化芸術事業は、効果・成果の発現が一概に予期できない、と言われます。これらの性質をもつ事業を「いかに実用的に評価するか」という問いは、事業に関わる人たちが必ずぶつかる壁です。評価でよく使用されるロジックモデル[1]は「プロジェクトが目指すものをまず明らかにし、そのためには自分たちはどのような活動を効果的に展開できるのか、その手段と目的の因果性を可視化する道具である」[2]と定義されています。この「『計画段階であらかじめ目標を明確に設定する』という部分に、多くのアート関係者が違和感を感じてしまう」[3]のは、その計画通りの変化を約束しなければならないことに、居心地の悪さを感じるからかもしれません。しかし、もし設定したロジックモデルから外れた、予期できなかったイノベーションが出現した場合でも、事業の目指すものと照らし合わせて柔軟に考えればよいのです。出現したイノベーションを**振り返り**、生まれた価値を**言語化**し**エビデンス**を分析した結果、新たな道すじになりえます。そして評価は、今手元にある、限りのある資本や資源をその道すじにどれだけ注入するかを判断する有効な道具として使うことができます。

評価の事例

現在、様々なアプローチで文化芸術の事業の価値を捉えることが試みられていますのでいくつかここで紹介します。

例えば2000年以降、地域型芸術祭が盛んに開催されていますが、代表的な存在のひとつ「瀬戸内国際芸術祭」の2019年報告書ではどんな指標が使用されているでしょうか。**地域への波及・連携**では、住民主体の活動内容、**地域住民の評価**では実際の意見を吸い上げ、集約して紹介するなど、テキストベースでの記録を見ることができます。**来場者アンケート**では主に満足度や次回来訪意向などの結果データを記録しています。**広報**ではウェブサイトのアクセス数、SNSフォロワー数などが指標となっています。また報告書内の他の多くの項目で来場者数、参加者数が用いられ、**芸術祭開催による効果**としては経済波及効果が計測されています。このように住民などの実際の意見の紹介に加えて「来場者数」「アクセス数」「経済波及効果」など主に定量的なデータによる分析結果を報告しています。

六本木アートナイト（RAN）では六本木アートナイト事業評価報告書2018[4]で、10年の事業の蓄積を**事業の受け手**（来場者）と**事業の作り手**（関係者：主催者やアーティストなど）に分け、社会的インパクト評価の手法を援用して、社会にもたらした変化を明らかにしています。**事業の受け手**の調査では**RANでの行動**について、回遊度を滞在時間と鑑賞プログラム数から分析、**RANに対する評価**を満足度と次回以降の来場意向から、そして**美術に関する関心や行動**をRANへの訪問頻度、美術館への訪問頻度という観点から分析することで、来場者の動向や傾向、課題を導き出しています。結果、経年での動向にばらつきがあり、各年のディ

レクションやキュレーションによって、人々の行動や評価が変わることを示しました。またRANの基本理念がRANでの体験によって届けられていたかどうか、という視点からの評価分析もされています。**事業の作り手**の調査から、事業を継続的に実施するための改善点の抽出も図っています。

評価においては客観性を担保することが必要です。その客観性を、アートプロジェクトの事業者同士、つまり同業者に求め検証する「ピアレビュー」という方法があります。静岡県文化プログラム推進委員会（現アーツカウンシルしずおか）の「地域密着プログラム」[5]においては、従来の外部評価者が評価対象の事業者から独立して実施する評価、いわゆる外部評価と、同業者や仲間、専門家だからこそわかり合えるピアレビューの良さを兼ね備えたハイブリッド的なアプローチを取っています。普段は事業に伴走支援しているアートプロジェクトの専門家であるプログラムコーディネーターが、評価の各工程において事業者の意思形成や意思決定をサポートし、ファシリテーターとしての役割を担う「伴走評価」の形を取っています。地域密着プログラムとして大切にしている価値観や地域で起こしたい変化等について議論を重ね、事業の効果を測定するものさしづくり（評価基準づくり）に充分時間を割き、実践で使っては修正するという反復プロセスを通じてその精度を上げています。伴走評価では、事業者が自ら改善点を明確に意識し、次の事業計画に活かすだけでなく、プログラムコーディネーターの評価能力のキャパシティビルディングにもなっています。ものさしとして、**地域資源・社会課題への対応度合い**、**事業の波及効果**、**包摂的な仕組み**、**事業に関わる人の多様性**、**自立発展性**、**事業をめぐる新陳代謝**などの項目で定量·定性両方のエビデンスを集めながら事業者と議論し、評価を決めています。

このように評価はその目的に合わせて、評価指標自体を事業の基本理念に従って落とし込むだけでなく、ステークホルダー参加型·協働型で対話しながら決めてゆく柔軟さを持ちながらも、エビデンスにおいては量的データを用いて厳格に運用します。しかしもっとも大切なのはそれら量的·質的データが事業目的にとってどのような価値を示しているのかを丁寧に説明することでしょう。

1｜社会的インパクト·マネジメント·イニシアチブによる定義では、事業が成果を上げるために必要な要素を体系的に図示化したものとしている。https://simi.or.jp/tool/logic_model（2021年11月23日閲覧）
2｜熊倉純子（2020）. アートプロジェクトのピアレビュー. 水曜社 p.109
3｜前掲書 p.117
4｜https://www.roppongiartnight.com/2018/wp-content/uploads/2019/03/ran_evaluation_report_2018.pdf（2021年12月1日閲覧）
5｜静岡県内の地域で各種団体等によって実施されるアートプロジェクトを支援したプログラム。静岡県内の文化資源の掘り起こしや、担い手を育成し、将来自立した多様な創造的活動を促すことを目的に、「社会の様々な分野との連携」、「プログラム·コーディネーターによる支援」を特徴とした。

Memorial Rebirth 千住が生み出した価値とは？

佐野直哉

1. 来場者に注目する

Memorial Rebirth 千住（以後メモリバと記す）において「来場者の受容」に絞って評価分析を試みたい。来場者がメモリバを経験して何を捉えたのか、そしてそれらが地域の変化にどのようにつながっていったのか、という点を明らかにする。来場者に着目した理由は、彼らが本事業の直接的な受益者であり、彼らがメモリバをどのように認知したのかを示すことで、本事業の価値の一端を描き出せると考えたからである。来場者に関する評価の指標は「アートプロジェクトの評価について」で挙げた瀬戸内国際芸術祭の報告書でもわかる通り、来場者数、満足度、次回来訪意向、アクセス数やフォロワー数など数字等で表されることが多い。瀬戸内国際芸術祭の伝えたいテーマ[1]、つまり事業の基本理念とこれら来場者に関する評価指標がどう関わり、結びつくのかは一見定かでない。事業の目的や基本理念が来場者に伝わったかどうか、つまり受容と浸透に着目して分析することで、これらの数字の意味がより伝わるのではないか。本稿ではこのような定量データと事業の目的の達成との間をつなげる、来場者の「事業目的の受容と浸透」度合いを捉えることを試みる。

2. 評価方法

評価の手法はおおよそ2種類に大別することができる。事業全体の目的が達成されたかどうかを

1｜2019年の瀬戸内国際芸術祭のテーマは「海の復権」であり、そのテーマのもとに「アート·建築―地域の特徴の発見」「民俗―地域と時間」「生活―住民（島のお年寄りたち）の元気」「交流－日本全国·世界各国の人々が関わる」「世界の叡智－この地を掘り下げ、世界とつながる場所に」「未来－次代を担う若者や子どもたちへ」「縁を作る－通年活動」の7つのコンセプト がある。

測り、アカウンタビリティの確保や科学的エビデンスの算出を目的とした「アウトカム評価（総括評価）」と事業のマネジメントの改善を目的とした「プロセス評価（形成的評価）」がある[2]。アートプロジェクトをマーケティングの視点から研究する専門家の立場から、本稿はメモリバの来場者が受容した本事業の価値を、アンケート調査の自由記述回答をデータ化し、文化芸術事業のアウトカム評価とプロセス評価のそれぞれの枠組みを援用して描く。筆者が外部評価者としてこれらの分析をおこなう「独立型評価」である。

3. 手法

来場者が本事業の価値をどのように受け取ったかは、アンケートの自由記述欄（自由回答方式·純粋想起）で書かれたコメントをひとつひとつ丁寧に読み込み、これまでの事業の活動の履歴と照らし合わせながら分析し、分類·比較することである程度の傾向を見出すことができる。しかしその数が膨大になると、手作業でおこなうのは難しくなる。そこで今回はテキストをデータとして扱い、定量的に分析する「テキストマイニング分析」を使用しその傾向を読み解く。テキストマイニング分析は文章を定量的に扱うための分析手法であり、アンケートの自由記述や、コールセンターへの問い合わせ内容、TwitterなどSNSでのクチコミ分析といった分野で活用されている。テキストマイニングが得意とするのは、大きくは以下の2点である。

1. **全体像を把握する**:
大量の文章があったとき、どのような話題が多いのか「ざっくり」と把握する
2. **特徴を抽出する**:
（現在はまだ件数は少ないが）増加している不満や、年代別の観点の違い等について「ヒント」を探す[3]

2｜熊倉純子（2020）. アートプロジェクトのピアレビュー. 水曜社　p.104

3｜株式会社日経リサーチ公式ウェブサイトhttps://www.nikkei-r.co.jp/glossary/id=1602（2021年8月20日閲覧）

4. 文化芸術事業のアウトカム評価

文化芸術事業のアウトカム評価では図1のような枠組みが提唱されている[4]。個人から事業に関わったステークホルダー、さらに地域コミュニティや社会へと、事業の関わりの単位や範囲が広がっていくとともに、変化に対する時間的な単位も短期から長期と測定の範囲が長くなっていく。

図1. 文化芸術事業のアウトカム評価の枠組み

	即時的 既に変化があったこと	中期的 変化が現れ始めたこと	長期的 論理的に今後見込まれる変化
参加者個々人 行動、意識、態度、理解、関心、スキル、生活状況など	1	1／2	
事業に関わったステークホルダー 組織のあり方、運営の仕方、関係性など		2	2／3
地域コミュニティや社会全体 意識、関心、社会のしくみ、社会状況など			3

今回は以下のデータをそれぞれの枠内に位置づけて分析に使用する。

1. 一般来場者を対象とした2012年度から2017年度の間、毎年実施されたアンケート調査[5]
2. スタッフ·サポーターを対象とした2017年度および2018年度に実施されたアンケート調査[6]
3. 市民、市民組織·企業、アーティスト、事務局·学生スタッフ14件の個別インタビューデータ（2020年12月〜2021年2月実施）

一般来場者を対象としたアンケート調査は6年度分あり、分析に使用するのは「本日のイベントの感想をお聞かせください」の自由記述回答データである。ここで分析可能なのは来場者個々人の「意識」「理解」「関心」が主なものとなる。またメモリバは年々プログラムが変化·発展し、

4｜文化庁×九州大学共同研究チーム（2021）. 文化事業の評価ハンドブック. 水曜社 p.79

5｜2012年度90名、2013年度94名、2014年度110名、2015年度138名、2016年度100名、2017年度147名

6｜2017年度スタッフ総数:189名 ·アンケート回収数:117名（回収率:62%）、2018年度スタッフ総数:187名 ·アンケート回収数:109名（回収率:58%）

様々な新しい要素が加わってきたため、6年度分のデータにおいても新たな参加型のプログラムが登場してから、それに関連した回答が見られることが想定される。しかしテキストマイニング分析の強みは「全体像を把握する」「特徴を抽出する」ことにあるので、今回は各年毎の特徴を抽出しながら統合化していく方法ではなく、6年積み重ねた全回答データをひとつのデータ群として、一般来場者の回答の全体像と特徴や傾向を抽出する。

2017-18年度のスタッフ対象アンケート調査の結果は「事業に関わったステークホルダーの変化」の中期·長期の変化部分として使用する。本事業の場合、スタッフやサポーターの多くは最初に来場者として参加しながらも、様々な理由で段々と事業との関わりを深めてスタッフ·サポーターとして活動し始めることが多い。いわば事業に関わるステークホルダーでありながら一来場者でもあることから、来場者全体の中期的な変化を測るデータとしても扱う。よって分析に使用する設問も、図1で示しているようなマネジメントの指標（組織のあり方、運営の仕方、関係性など）を測るのではなく、「あなたにとってのメモリバとは」という、来場者の延長線上でメモリバの経験と個々人の関係性を振り返りながら自由記述回答する設問に絞る。また14件の地域に密着した存在であり、かつ事業にも深く関わった2020年度のステークホルダーの個別インタビュー調査では、ステークホルダーのメモリバの今後の期待に対するコメントを中心に分析することで、今後、地域で見込まれる長期的な変化を探る。つまり来場者の「事業目的の受容と浸透」度合いを評価するに当たって、**一般来場者、スタッフ·サポーターおよびステークホルダーは全て「来場者」の延長線上に位置し、経験年数や関わり方によって事業の目的の受容と浸透度に違いがある**と仮定し、その傾向を明らかにする。

5. 文化芸術事業におけるプロセス評価

文化芸術事業で目指す地域や社会の長期的な変化とは何だろうか。もちろん事業によって千差万別ではあるが、社会包摂の文脈における文化芸術事業のプロセス評価で提唱されているのは「価値創造によって活性化される、エンパワメントされる[7]」地域·社会コミュニティである。図2の通り、価値創造が起きやすい鍵となるのは

「**あそび**（スキマや余白をつくる、遊戯的な要素を組み込んでおく）」

「**対等**（アーティストもそうでない人も）」

「**対話**（非言語コミュニケーションも含む）」

であり、エンパワメントには

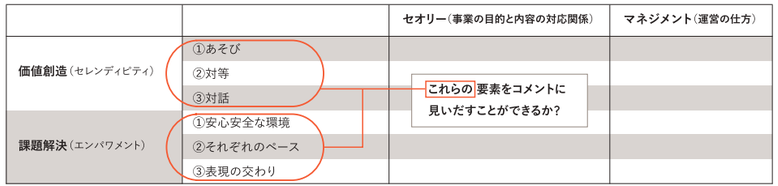
「**安心安全な環境の確保**」

「**参加者がそれぞれのペースで表現することが許される状況**」

「**自分と他人の表現が交わって新しいものが生み出されること**」

が必要である[8]とされている。

図2. 文化芸術事業におけるプロセス評価の枠組み



この枠組みにおいては、事業をセオリーとマネジメントに分けてそれぞれの要素が見出せるかどうかを判断する。本評価はセオリーに絞り、アンケート調査結果の回答にこれらの要素を見出せるかどうかで、事業で生まれた価値およびその創造の環境を観客に提供できたかどうかを確認する。

7｜価値創造とは価値のあるものを新しく作り出す、もしくは新しく発見する、という意味である。新しい作品ができることで、お互いの価値の違いを尊重しながらその作品を「いい」と思う、それを評価する「新しい価値観」が生まれる、ということである。文化庁×九州大学共同研究チーム（2021）. 文化事業の評価ハンドブック.水曜社p.26

8｜つまり人は、自分が自発的にやったことが何かに貢献できていると感じると「生きていてよかった」「自分には居場所がある」と感じることができる。これらを経て社会包摂における価値創造がおこなわれる。その波及効果として地域·社会コミュニティに属する人たちがエンパワメントされ、価値創造が彼らの意識、関心に浸透し、長期的な変化に定義された状態に近づくのである。前掲書p.26-7

6. テキストマイニング分析

これより一般来場者のアンケート調査自由記述回答のテキストマイニング分析[9]をおこなっていく。

6.1. 一般来場者対象アンケート調査（2012-17）分析

「本日のイベントの感想をお聞かせください」の設問に対する自由記述の回答を分析の対象とした（図3）。

図3. 一般来場者のコメントのワードクラウド（スコア重要度[10]）

まず目にとまるのは「シャボン玉」「たのしい」「幻想的」などのイベントの描写や感想に関連した表現が並ぶが、「足立区」「千住」「大巻」なども比較的大きく出現する。次に単語出現頻度をスコア重要度で並べたものを確認すると、名詞では「シャボン玉」「きれい」「幻想的」に続いて「千住」や「子供」「大巻」が出現する。動詞では「踊る」「楽しめる」に続いて「つつみこむ」「喜ぶ」「まきこむ」「ひろがる」など出現数は少ないが特徴的と判断された語が続いている（図4）。

9｜ユーザーローカルが無償提供しているテキストマイニングツールを使用する。株式会社ユーザーローカルは早稲田大学の研究をもとに生まれた、人工知能·ビッグデータ分析に特化した技術ベンチャー企業である。https://textmining.userlocal.jp/

10｜ユーザーローカルからの説明によると、単語出現頻度は回数、一方で、スコアについては重要度を表す評価値であり、数値が大きくなるほど重要であることを意味している。最大値や最小単位はない。スコアは、その単語の「重要度」を表す値である。一般的な文書では、単語の出現回数だけでいえば「今日」や「思う」「ある」などといった、『ごく一般的な単語』が何度も出現する。ただ、このような単語は、どういった文書にも出現する単語であるため、

図4. 単語出現頻度

名詞	スコア	出現頻度
シャボン玉	[illegible]	65
きれい	[illegible]	45
幻想的	[illegible]	14
千住	[illegible]	7
子供	[illegible]	55
大巻	7.69	3
プログラム	6.87	12
盆踊り	6.46	6
すてき	6.14	6
足立区	7.84	9
北千住	5.08	3
参加	4.72	23
イベント	4.44	20
キレイ	3.73	7
祭	3.36	21

動詞	スコア	出現頻度
踊る	15.88	35
楽しめる	8.33	18
つつみこむ	4.54	1
喜ぶ	1.82	4
まきこむ	1.72	1
ひろがる	1.25	1
つれる	1.19	2
吹き荒れる	1.14	1
ふやす	1.08	1
輪付く	1.01	1
ちがう	0.94	4
はじける	0.84	1
加わる	0.80	2
舞う	0.74	2
照とれる	0.74	1

形容詞	スコア	出現頻度
たのしい	[illegible]	58
よい	8.34	46
すばらしい	3.77	8
覚えやすい	2.38	3
あっけない	1.21	1
にがい	1.19	1
うれしい	0.74	6
くろい	0.53	3
暑い	0.41	6
美しい	0.40	4
広い	0.33	3
あたたかい	0.29	1
おもしろい	0.28	3
すごい	0.27	11
幅広い	0.26	1

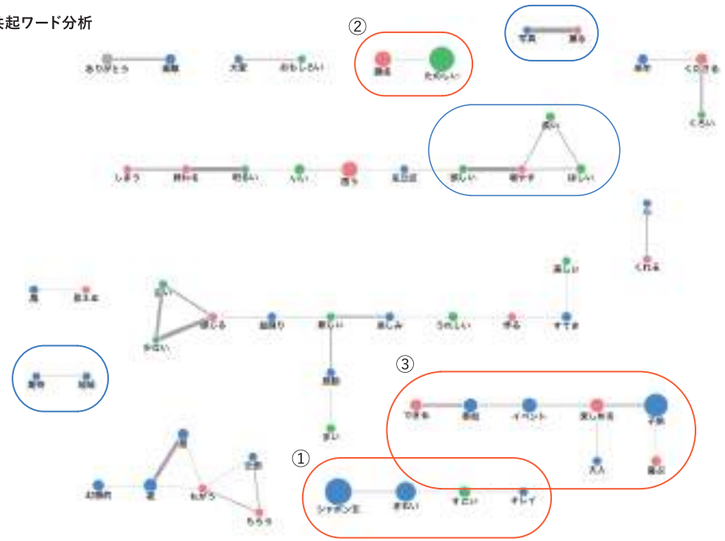
感動詞	スコア	出現頻度
ありがとう	0.30	15
すみません	0.01	1
お疲れ様	0.01	1
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---

たとえ出現回数が多いとしても意味が薄い、あまり重要ではない単語といえる。単純に回数だけをランキング化しても、一般的な語が混じってしまいその文章の特徴をつかむことができない。この問題を解決するため、テキストマイニングではインターネット上から取得したニュースなどの様々な一般的な文書を調査し、「一般的な文書でよく出る単語は、重要ではないため、重み付けを軽くする」、いっぽう「一般的な文書ではあまり出現しないが、調査対象の文書だけによく出現する単語は重視する」仕組みを取り入れている。このような特徴語を抽出するためのロジックとして、一般的にTF-IDF法という統計処理をしている。この手法によって、出現回数だけでなく、重要度を加味した値が「スコア」である。スコアが高い単語は、そのテキストを特徴づける単語であるといえる。

形容詞では「たのしい」「よい」「すばらしい」が頻出するが、これはこの種類のイベントのコメントとして想定範囲内であろう。また「覚えやすい」のスコアが頻度に比べて高いのは特徴的かもしれない。感動詞では「ありがとう」という感謝の言葉が特徴的である。

続いて共起分析をおこなうと、主に3つの言葉を中心にその他の言葉が連結していることがわかる（面積が大きく表示されている言葉を中心に連結されているグループを赤線で囲い表記）。青線で囲ったグループについては連結線が太いグループおよびその他の特徴として後述する。

図5. 共起ワード分析



これら3つのグループを整理すると以下となるだろう。

①「シャボン玉」を関連として主に見えたものを描写

これはさらに図6-1の「名詞~形容詞」および図6-2の「名詞~動詞」の係り受け分析を併せると具体的でわかりやすい。

②「踊る」「たのしい」という体験

③「子供」も「大人」も「参加」し「楽しめる」というイベントの仕立て

同様に図5および図6-2「名詞~動詞」の係り受け分析から整理することができる。

図6-1. 係り受け分析

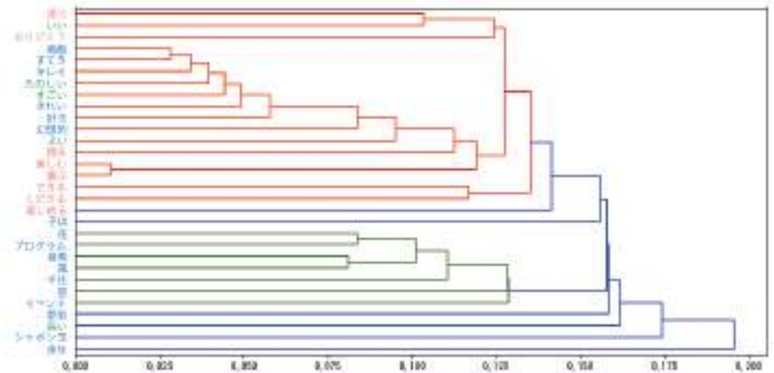
図6-2. 係り受け分析

名詞 - 動詞	スコア	出現頻度
子供 - 遊ぶ	5.00	7
子供 - 楽しめる	4.74	9
子供 - 楽しむ	3.00	6
子供 - 遊べる	2.00	2
シャボン玉 - でる	1.94	2
写真 - 撮る	1.33	2
写真 - 見れる	1.00	2
シャボン玉 - 消える	1.00	1
シャボン玉 - 回む	1.00	1
シャボン玉 - 吹き荒れる	1.00	1
シャボン玉 - 飛ぶ	1.00	1
シャボン玉 - 触れる	1.00	1
シャボン玉 - 待つ	1.00	1
シャボン玉 - 飛ばす	1.00	1
シャボン玉 - ふやす	1.00	1

青線で囲ったグループはいくつか特徴を示している。まず「写真」「撮る」間の連結線（共起）が太いのは、「写真映え」、ひいては「インスタ映え」つまりInstagramに代表されるSNSで注目される写真が撮れることに対する着目を読み取ることができる。また「欲しい」「増やす」間の共起が太いのは、（メモリバのようなイベントを）もっと増やして欲しい、という願望を読み取ることができよう。共起も太くなく、出現回数も多くはないが、全体のコメントの中で指摘しておきたいのは「地域」「期待」のグループである。非常にかすかではあるが、「地域」への意識は存在している。

同様に今度は階層クラスター分析（文章中での出現傾向が似た単語をまとまりとしてとらえられるよう樹形図で表したもの。グループは色分けした線で表示している）を使って分類を試みると、別の3つのキーワード群に分類することができる（図7）（右側ほど大分類となる）。全てのキーワード群は最上位階層である「来年・シャボン玉・長い」で括られている。より下位の階層の分類に着目する。

図7. 階層クラスター分析



*左側の赤色は動詞、緑色は形容詞、青色は名詞を示す

赤色クラスター：**視覚描写**（例:きれい、幻想的）、**体験**（踊る）**など直接的な感覚の表現**

青色クラスター：**子供が参加できる・楽しめるイベント**

緑色クラスター：**千住の昼夜の音楽プログラム**

図5の共起分析結果と図7の階層クラスター分析のそれぞれのキーワードを照らし合わせてみると、図8で示したようにマッチングする。

図8. 階層クラスター分析および共起分析結果キーワード群の比較

階層クラスター分析	共起分析
緑色クラスター：**千住の昼夜の音楽プログラム**	「地域」「期待」
赤色クラスター：**視覚描写や体験など直接的な感覚の表現**	①「シャボン玉」を中心として見たものを表現 ②「踊る」ことが「たのしい」という体験
青色クラスター：**子供が参加できる・楽しめるイベント**	③「子供」も「大人」も「参加」し「楽しめる」というイベントの仕立て

整理すると、2012−2017年度の一般来場者のアンケート調査自由記述回答の分析結果は大きくふたつのグループに分類でき、これらが来場者の直接的な評価となる。

分類1:「シャボン玉」「踊る」という**視覚と体験に関する評価**
分類2:「子供」も「大人」も**参加することに関する評価**

数も多くなく、定量的に見れば埋もれがちであるが、最初のワードクラウドに「千住」や「足立区」が比較的重要度が高く出現したことから、「地域」への興味や、地域を拠点としたメモリバのようなイベントが増えてほしいという願望も共起分析結果から見え隠れすることがわかった。興味深いのは分類1の「シャボン玉」「踊る」という視覚と体験に関する評価と、分類2の「子供」も「大人」も参加することに関する評価によって、メモリバの一般来場者には図2で示したプロセス評価の価値創造部分の①あそび（視覚と体験に関する評価）、②対等、③対話（協働参加型に関する評価）が表出しているのではないか、と期待できる部分である。

6.2. スタッフ対象アンケート調査（2017–18）分析結果

次にメモリバに一般来場者よりも長く、深く関わっているスタッフ・サポーター（以後スタッフと記す）のアンケート回答コメント分析結果を、一般来場者の分析結果と比較をしながら、メモリバの「価値」をひもといてみる。分析するのは2017年度と2018年度の2年分のスタッフの「あなたにとってのメモリバとは」という質問に対する自由記述回答である（図9）。イベントの描写や感想に関連した表現が多く並ぶ一般来場者の回答と違い、かつ特徴的と考えられる言葉のいくつかを例として赤線で囲っている。

この質問を選んだ理由は、他の質問「メモリバに期待することは」などとは異なり、過去や未来ではなく、今現在のメモリバが回答者にとってどんな存在なのかを探ることで、アウトカム評価の「事業に関わるステークホルダー」の即時的と中期的な変化をみることができる、と考えたからである。「メモリバに期待することは」という質問の回答は「長期的な論理的に今後見込まれる変化」につながると考え、事業のステークホルダーの個別インタビュー調査回答を使用してのちに分析する。

図9. スタッフアンケート調査のワードクラウド（スコア重要度）

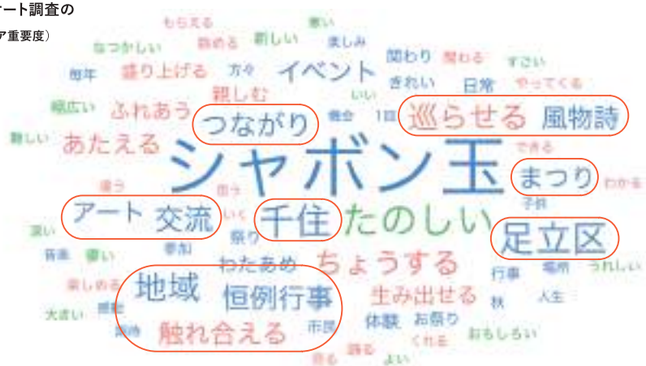
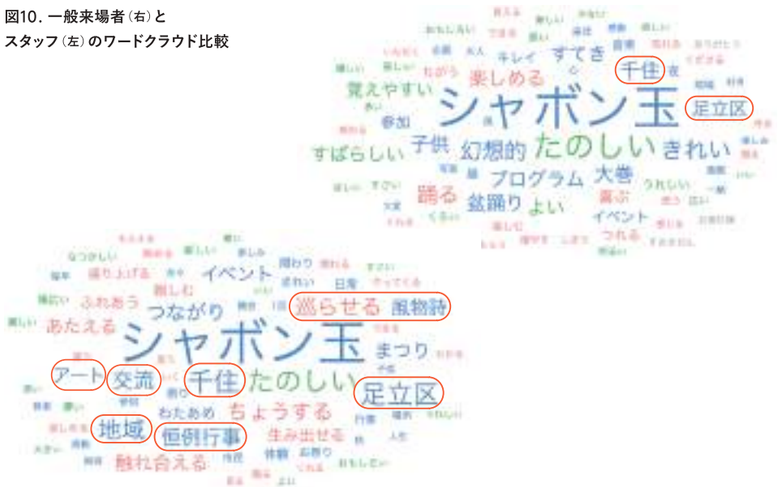


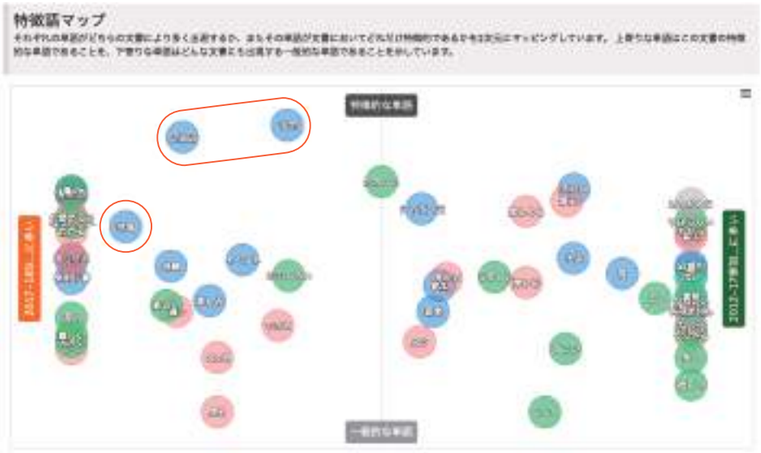
図10. 一般来場者（右）と
スタッフ（左）のワードクラウド比較



一般来場者のワードクラウド（右）と比較すると、両方に「千住」「足立区」などの「**地域**」に関する言葉が出現しているが、スタッフの方が全体的に重要度が高く示されている。また「恒例行事」「風物詩」という語は**定期的で、なくてはならないイベント**であることを示しており、「交流」「触れ合える」の言葉が表す**人々の交わり**も、スタッフのワードクラウドでは重要度が高い。また「アート」は一般来場者のワードクラウドには出てこないワードである。

続いて特徴語マップで比較すると、スタッフの場合は明らかに「地域」に対する意識が高いことがわかる（図11）。

図11. 一般来場者（右）とスタッフ（左）の特徴語マップ比較



今度は二次元マップ（文章中での出現傾向が似た単語ほど近く、似ていない単語ほど遠く配置されている。距離が近い単語はグループにまとめ、色分けしている）で分析すると4つのグループに分類される（図12）。また階層クラスター分析では2つのグループに分類することができた（図13）。

図12. スタッフアンケート調査の二次元マップ

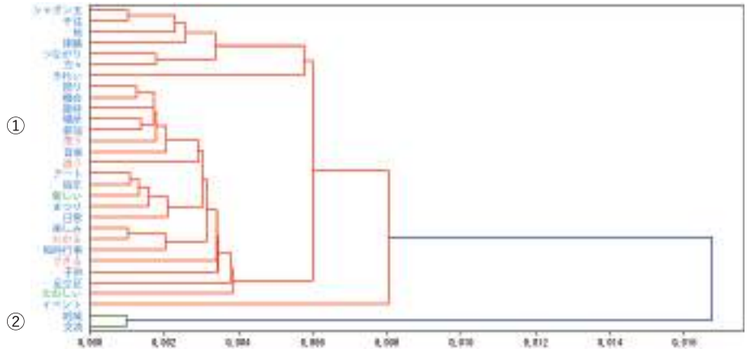
青グループ：**新しい期待・秋のまつり**

紫グループ：**日常・恒例行事となったたのしいアートイベント・つながり**

緑グループ：**毎年シャボン玉と体験で地域の方々が交流する機会**

赤グループ：**足立区千住の子供が参加する音楽の祭り**

図13. スタッフアンケート調査の階層クラスター分析



①秋の千住のシャボン玉体験でつながる・参加する機会のある音楽、
**　アートの新しいまつり・子供が楽しみ、わかる足立区の恒例行事、たのしいイベント**
②地域の交流

以上から、最初に指摘したワードクラウドの3つのキーワード（地域、イベントの定期性、交わり）と併せて、これら特徴語マップ、二次元マップ、階層クラスター分析の結果を整理すると「**地域**」「**日常化**」「**交わる場**」の3つのキーワードにまとめることができよう。

一般来場者アンケート調査コメントとスタッフアンケート調査コメントの単語分類による比較を見ると、両方に共通して見られるのは「シャボン玉」「たのしい」「参加」「音楽」などであり、「あそ

び」的な感覚で「参加」し、楽しく感じることが即時的な変化といえる。一般来場者アンケート調査コメントに比較的多く出現するのは「踊る」や「子供」などに加えて、形容詞（緑色で示されている）が多いことから、参加体験を直感的な感覚で捉えている。スタッフはもう少し俯瞰的に本イベントを見ており、それはスタッフアンケート調査コメントに比較的多くみられる言葉「地域」「アート」「日常」「祭り」などから読み取れる。また能動的に関わっている様子を、スタッフアンケート調査コメントにだけ出現する言葉として、赤字で示している動詞（アクションワード）の多さが示している。例えば、「盛り上げる」「関わる」「つながる」「出会う」「会う」「住む」などである。

図14. 一般来場者とスタッフアンケート調査コメントの単語分類比較

スタッフにだけ出現	スタッフによく出る	両方によく出る	一般来場者によく出る	一般来場者にだけ出現
わかる 交流 いく もらえる やってくる 巡らせる 眺める 関わる つながり まつり 恒例行事 方々 あえる あたえる かたまる かんじる きえる ちょうする つくる つながる つなぐ はじめる ふれあう ゆく わる われる 任す 会う 住む 出会える	できる イベント 地域 くれる 違う 楽しみ 新しい 足立区 見る 千住 盛り上げる 体験 場所 アート 日常 祭り 機会 寒い 幅広い	たのしい シャボン玉 思う 参加 見れる 音楽 すてき 感動 期待 おもしろい	踊る 子供 よい 楽しめる きれい 楽しむ 夜 すごい プログラム いい 来年 うれしい	ありがとう くださる 喜ぶ 幻想的 昼 素敵 ちがう もらう 作る 撮る ほしい 長い 好き すばらしい 大人 盆踊り 美しい お疲れ様 すみません 広い 欲しい かわいい くろい 可愛い 嬉しい 少ない 明るい 覚えやすい あたたかい

6.1.で一般来場者の分類1の「シャボン玉」「踊る」という視覚と体験に関する評価と、分類2の「子供」も「大人」も参加することに関する評価は、プロセス評価の価値創造部分の①あそび（視覚と体験に関する評価）、②対等、③対話（協働参加型に関する評価）が表出していると期待できる、と指摘したが、中でも「対等」「対話」において、スタッフは**地元である足立区千住で、メモリバが子供から大人までつながり、交流し、それが日常化**する場になっている可能性を見出している。

ここまでをまとめると、一般来場者はメモリバに「あそび」的な感覚で「参加」し、楽しく感じていること、そして子供から大人までつながって共に参加できることを価値として評価している。スタッフのアンケート調査分析結果からは、スタッフはメモリバが「地域」で人々が「交わる場」として日常化していることを価値として捉えており、アクションワードの多さから、より能動的な関わりへの発展を確認することができる。

6.3. ステークホルダー個別インタビュー調査（2020）分析結果

最後に14件のステークホルダーの個別インタビューデータを用いて、中·長期的変化の検証をおこなう。これまでの分析は一般来場者には「イベントの感想」、スタッフは「あなたにとってのメモリバ」の自由記述を分析に使用したが、ここでは「メモリバに期待することは」の質問に対する回答を使用する。これは「長期的な論理的に今後見込まれる変化」に関連づけることのできる質問だと考えたからである。本分析は藤枝怜氏[11]が整理した該当回答テキストデータを使用した。

ユーザーローカル社の自動要約ツール[12]でより重要度の高いテキストデータを抽出したところ以下の10文に整理することができた。

- だからね、黒子でもいいから俺は、ってなっていったら面白いなって。
- メモリバを見て育った子供が大きくなって、メモリバに関わってくれたり。
- 私は、その花畑（はなはた）の団地の近くでやりたいなってずっと思っている。
- それぞれがほんとに心の底から美しいと思える光景をもっと作り出せればいいなって思う。
- そういうところでもっと色々興味持ってると一緒にやっていけたらなって思う。
- 白山さんが先生になってやるっていうところからコロナ始まっちゃったんですもんね。
- その思いを来年以降にぜひつなげて、この輪を広げていけたら良いなと。

11｜東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科博士後期課程在学（2021年12月現在）

12｜重要文抽出にはLexRankという技術を利用している。重要単語を多く含み、他の文に類似度が高い文を抽出するアルゴリズムである。要約アルゴリズムには整数線形計画法という手法を利用し、より多くの情報をカバーした重要な部分を選出している。（ユーザーローカル社プレスリリース「ユーザーローカル、無料で利用できる文章自動要約ツールを公開〜文章構造を分析して重要箇所を自動抽出〜」2018年7月24日付）

●素直に感動する機会みたいのがもっと広がればいいなって感じはしている。
●そしたら自分で勝手に出ていく時が来たら出てけばいいし。
●全く見ず知らずの土地に、シャボン踊りとか、メモリアルリバースの空間そのものを着地させる感じ。

前後の文章の意味と文脈を確認した上で、社会的インパクト·マネジメント·イニシアチブが開発した文化芸術のロジックモデル（ソフト型コミュニティ事業）の中間アウトカム[13]および最終アウトカムの定義を参照しながら中·長期的な変化の分類を試みた。具体的な行動例として詳細アウトカムを示したのちにカッコ内にアウトカムカテゴリーを示した。いくつかのコメントには当てはまる詳細アウトカムがないので、無理に当てはめることはせず、アウトカムカテゴリーのみ示した。

2020-21年個別インタビュー	中·長期的な変化
（市民たちがつながってくれれば）黒子でもいいから俺は	（中期）他者に配慮した行動が増える （「**他者に対する想像力がある人が増える**」） （長期）サードプレイス·居場所が増える （「**地域の包摂力が高まる**」）
見て育った子供が大きくなって、メモリバに関わってくれる	（中期）地域や社会に関わろうとする人が増える （「**創造活動を自ら生み出す人が増える**」） および、創造活動に関わる人が増える （「**文化的に豊かな生活を送る人が増える**」） （長期）文化芸術の大切さを理解する市民が増える（「**地域の文化度が上がる**」）
花畑の団地の近くでやりたい	（中期）市民主体の新たな活動や拠点が増える （「**創造活動を自ら生み出す人が増える**」） および他者に配慮した行動が増える （「**他者に対する想像力のある人が増える**」） （長期）社会的弱者やマイノリティに対する寛容性が高まる （「**地域の包摂力が高まる**」）

13｜社会的インパクト·マネジメント·イニシアチブによる定義では、アウトカムとは事業や組織が生み出すことを目的としている変化·効果を指す。
https://simi.or.jp/tool/logic_model
（2021年11月23日閲覧）

2020-21年個別インタビュー	中·長期的な変化
心の底から美しいと思える光景をもっと作り出せれば	（中期）創造活動に関わる人が増える （「**文化的に豊かな生活を送る人が増える**」） （長期）文化芸術の大切さを理解する市民が増える（「**地域の文化度が上がる**」）
（電大の技術畑も藝大の芸術畑も）一緒にやっていけたらなって思う	（中期）物事を様々な角度から考える人が増える（「**他者に対する想像力のある人が増える**」） （長期）クリエイティブクラスが増える （「**地域の文化度が上がる**」）
コロナ始まっちゃった	該当なし
思いを来年以降にぜひつなげて、この輪を広げていけたら	（中期）市民主体の新たな活動や拠点が増える （「**創造活動を自ら生み出す人が増える**」） （長期）創造活動を支える仕組みが整う （「**地域の文化度が上がる**」）
素直に感動する機会が広がれば	（中期）他者に配慮した行動が増える （「**他者に対する想像力のある人が増える**」） （長期）文化芸術の大切さを理解する市民が増える（「**地域の文化度が上がる**」）
（いいものを見て自分で抜け出す力ができたら）勝手に出ていく時が来たら出ていけばいいし	（長期）「**地域の包摂力が高まる**」 （長期）「**文化芸術による社会の課題解決が進む**」
見ず知らずの土地にシャボン踊りとか、メモリアルリバースの空間そのものを着地させる	（中期）地域や社会に関わろうとする人が増える （「**創造活動を自ら生み出す人が増える**」） （長期）文化的な地域としてのイメージが生まれる （「**地域の文化度が上がる**」）

以上、個別のインタビューのテキストから重要度が高いと判断された文章を抜粋すると、ロジックモデルの中期·最終アウトカムの定義に適合するケースが多くみられた[14]。その結果、最終アウトカムのカテゴリーである「地域の包摂力が高まる」「地域の文化度が上がる」などの変化の一端を確

14｜これは一般来場者およびスタッフ対象アンケート調査に中·長期の変化を測ることを目的とした設問設定がされていなかったことと、個別インタビュー調査という非構造的に、自由に語ってもらいながら探索してゆく方法が、中·長期の変化をより的確に掘り起こしやすかったことが理由として考えられる。

認することができた。またスタッフのアンケート調査分析結果から導いた3つのキーワード、「**地域**」「**日常化**」「**交わる場**」が濃淡の差こそあれ、各コメントに内包されていることも指摘できる。

7. 結論

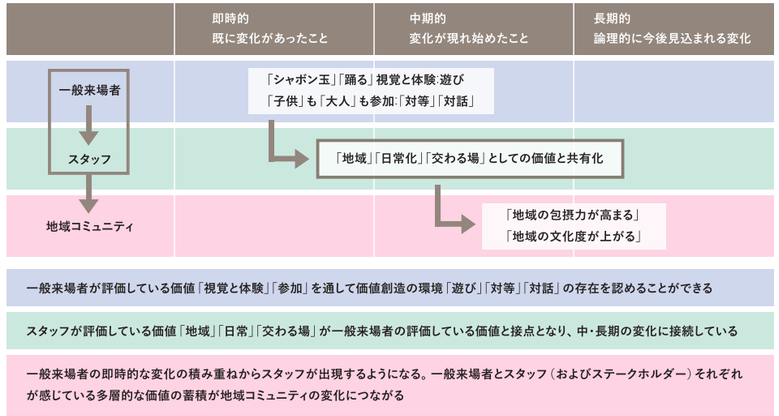
本稿では来場者およびスタッフのアンケート回答コメントおよび14名の事業のステークホルダーの個別インタビューのコメントを、テキストマイニング分析と自動要約ツールを使用し、アウトカム評価およびプロセス評価の枠組みを参照して評価を試みた。

結果として、一般来場者は、「シャボン玉」「踊る」という**視覚と体験**、「**子供**」も「**大人**」も**参加**を価値として評価していた。さらにプロセス評価の枠組みにおける地域や社会コミュニティ活性化に向けた「価値創造」を生み出す環境に必要な3つの要素である「**あそび**」「**対等**」「**対話**」に関して一般来場者のテキストマイニング分析結果にその要素を見いだすことができた。

スタッフにおいては「**地域**」「**日常化**」「**交わる場**」の3つのキーワードに整理でき、これらをメモリバの価値として捉える、より能動的な関わりをテキストマイニング分析から伺うことができた。またステークホルダーの個別インタビュー調査からは、地域の長期的な変化であるアウトカムカテゴリーの「地域の包摂力が高まる」「地域の文化度が上がる」につながる実感をコメントとして抽出したが、そのコメント群には「地域」「日常化」「交わる場」の3つのキーワードが少なからず含まれていることを指摘した。

一般来場者がメモリバに参加したことでまず変化が起こり、その中からスタッフとして参加する人たちが出現し始める。彼らは「地域」「交わる場」「日常化」の意識を持って活動に参加している。その積み重ねが地域や地域コミュニティの変化につながっていく。これがある種のエコシステムとしてメモリバでは機能していることがテキストマイニング分析から見えてきたことだろう。つまりアウトカム評価の枠組み（図1）を援用してメモリバの10年間のあゆみを整理すると、メモリバの価値の受容と浸透において、一般来場者の感じている価値とスタッフの感じている価値が地域の長期的な変化に接続されつつある様子と一般来場者から地域の変化につながるエコシステムを図15の通り示すことができる。つまりこれらが価値そのものだというよりは「地域」「日常」「交わる場」が接点となって、一般来場者とスタッフ、ステークホルダーそれぞれで多層的に価値が創出されていることそのものが、メモリバの受容と浸透の姿であり、生み出している内実であるといえよう。

図15. メモリバの価値の受容と浸透の構図



Memorial Rebirth 千住のステークホルダー

篠原美奈（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士1年／メモリバ学生スタッフ）

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」の一環として実施しているMemorial Rebirth 千住（メモリバ）は、2022年2月現在、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区による五者共催形式で運営されている。事業の基盤を支える事業費は、足立区とアーツカウンシル東京を通した東京都の負担金で捻出される[1]。また、事業の実務を実質的に担うのは、特定非営利活動法人音まち計画と東京藝術大学熊倉純子研究室である。

メモリバの生みの親である大巻伸嗣は、アーティスト／ディレクターとして、企画運営を担う主催者へ、作品のコンセプトやプロジェクトの方針を提示する。アーティストでは他にも、くるくるチャーミーをはじめとする多くの担い手が、「しゃボンおどり」のようなパフォーマンスやコンテンツを制作・提供しており、表現活動の場となっている。

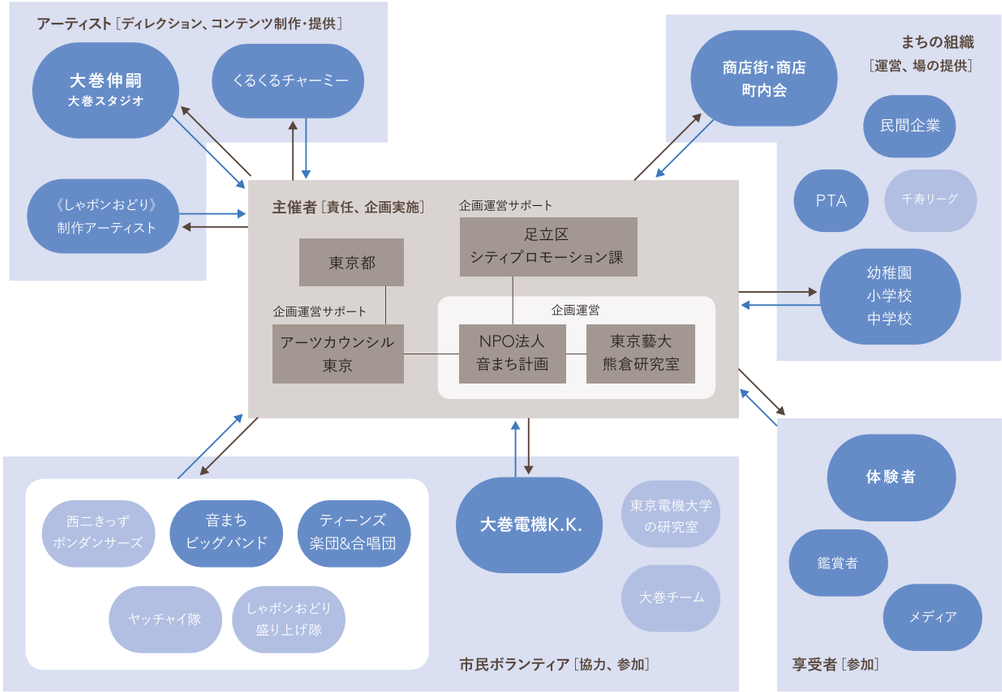
現在、アーティストと共に、メモリバの企画・運営に大きく貢献しているのが、市民ボランティアの「大巻電機K.K.」である。初年度から2013年度は、公募で集まった市民による「大巻チーム」が企画運営を担っていたが、2014年度には、マシンの扱いを市民メンバー自身で担う「テクニカルチーム」が結成される。主な構成員は「千寿リーグ」と東京電機大学の学生である。現在も東京電機大学のOBメンバーが「大巻電機K.K.」に参加するなど、重層的につながりが続いている。また、「音まちビッグバンド」や「ティーンズ楽団&合唱団」といった本番（開催当日）を音楽で彩るチームがあり、「西二きっずボンダンサーズ」「ヤッチャイ隊」「しゃボンおどり盛り上げ隊」などが本番やワークショップへ参加した年もある。市民ボランティアは、メモリバにおいて、自己実現の場や表現・交流の場を獲得している。

本番を実施するにあたり欠かせないのが、まちの組織の協力である。商店街や町内会、民間企業は、メモリバが地域振興やプロモーションにつながることを期待し、会場の提供や運営に協力する。幼稚園・小学校・中学校といった教育機関や、PTA、「千寿リーグ」といった組織は、地域の子供がアートに触れる機会や表現・交流の場を得ることに期待し、会場の提供や運営に協力する。

それらのつながりと協力があって初めてメモリバが実現する。本番は、シャボン玉と多くの人が集う景色を鑑賞するもよし、歌や踊りで輪に加わるもよし。体験者が、また新たな参加者へと変わり、そのつながりは年々広がっている。

1｜年によっては、文化庁や文化財団の外部資金で事業費を補填した時期もある。

Memorial Rebirth 千住のステークホルダー関係図



参考｜韓河羅（2020）. アートプロジェクトに関与する自治体の役割とジレンマ―東京都足立区シティプロモーション課と〈アートアクセスあだち 音まち千住の縁〉を事例に―. 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科提出修士論文

「メモリーバックアップ」としてのロジックモデル　Memorial Rebirth 千住の10年間を事例として

槇原彩（成蹊大学文学部芸術文化行政コース 客員講師）

本書には「Memorial Rebirth 千住 ロジックモデル」が付録されている。しかしながら、ここでおことわりしなければならないのは、その「ロジックモデル」は、一般的に用いられているロジックモデルとは異なるということである。以下、本書付録の「Memorial Rebirth 千住 ロジックモデル」の性質の差異、そして本ロジックモデルの活用方法について解説させていただく。

まず、付録「Memorial Rebirth 千住 ロジックモデル」の解説を始めるにあたり、そもそも「ロジックモデル」とはどのようなものかについて簡単にまとめたい。「ロジックモデル」とは、「事業やプロジェクトの成果を評価するための理論的フレーム」（吉澤、2019：p.17）であり、主に、行政評価や国際協力評価など、幅広い分野で使用される「結果までの道筋を示すフレームワーク」（若林、2019:p.33）である。基本的には、プロジェクト開始前またはプロジェクトの初期段階に、「もし〜なら、こうなるだろう」といった、プロジェクト目標を達成するための仮の道のりを示すものとして作成される。なお、その仮の道のりは、**インプット**（事業やプロジェクトを実施するために投入される資源）→**アクティヴィティ**（事業やプロジェクトで実際におこなう活動）→**アウトプット**（事業やプロジェクトを実施することで生み出されたもの）→**アウトカム**（アウトプットによりもたらされる成果）→**インパクト**（事業やプロジェクトを実施することでもたらされる影響）で示され、それをもとに、「想定していた結果と実際を比べてズレの原因を考えたり、アウトカムや社会的インパクトを実測することで、初めて評価として機能する」（若林、2019:p.33）ものである。

本書付録の「Memorial Rebirth 千住 ロジックモデル」が一般的なロジックモデルの性質と大きく異なる点は、この「いつ作成されたか?」の部分にある。すなわち、本来ならばプロジェクトの初期段階で作成されるべきものを、「Memorial Rebirth 千住」というアートプロジェクトが、足立区で10年継続された今、作成しているのである。「それでは『ロジックモデル』ではないではないか」といったご指摘もあるだろうが、そこはいったんご容赦いただきたい。なぜならば、2011年度に「Memorial Rebirth 千住」のプロジェクトが足立区で始動した際、そのプロジェクトの実施主体には「アートプロジェクト」の知識や経験を持つスタッフがほぼ存在しなかった。さらには、「アートプロジェクト」も現在のように全国的に流行しておらず、それがもたらす効果についても検証·評価は未発達であり、その言葉自体もまだまだ定着していなかった。「Memorial Rebirth 千住」が地域にそして社会に何をもたらすのかは言わずもがな、そもそもどこに向かうのか。その雲を掴むような道のりは、誰にも想像できなかったのである。

ではなぜ今回、ロジックモデルという形式をとったのか。それはひとえに、「Memorial Rebirth 千住」10年間の「振り返り」を整理するにあたり、その「道のりを示して振り返る」というロジックモデルの「型」が適していたからである。本書にも掲載されている通り、「Memorial Rebirth 千住」の10年間には、多くの人々がさまざまなかたちで携わり、色とりどりのエピソードを紡いでいる。しかしながら、そのエピソードが千差万別、多種多様であるからこそ、「Memorial Rebirth 千住」の10年間の成果を、一言で、そして一目でわかるよう表すことは難しかった。そこで今回、集まったエピソードをもとに、「Memorial Rebirth 千住」の10年間の成果をシンプル化して、俯瞰できるよう、ロジックモデルの型に落とし込むことを試みた。

まず、現在の「Memorial Rebirth 千住」をとりまく状況を、**アウトカム**や**インパクト**として捉え、それに至った道のりを振り返った。すると、『千住の関係人口が増える』『地域への愛着がうまれる』の他に、『さまざまなかたちのメモリバがうまれる』といった、「Memorial Rebirth 千住」ならではの**インパクト**（**最終アウトカム**）が浮かび上がってきた。次に、プロジェクト全体の振り返りだけでなく、「Memorial Rebirth 千住」に携わった「学生スタッフ」や「まちの人々」等、ステークホルダー毎の振り返りもおこない、ロジックモデルの型に当てはめてみた。そうすることによって、「まちの人々」のロジックモデルでは、すごろくのように『MR本番を鑑賞するお客さん』から**インプット**が始まり、『主催から自律し、地域主体でMRをおこなう際のディレクターになる』といった**インパクト**（**最終アウトカム**）に至る場合もあるが、最初から『地域とMRをつなぐキーマン』として**インプット**される場合もあることがわかった。さらには、『MRの運営に準備段階から深く関わる人材』だった「まちの人」が、次の年には『MR本番を手伝う人材』として**インプット**されてもいた。この関わりしろの多層性は、個別で語られたエピソードでは把握できていたが、「まちの人々」として全体像を見渡し、一般化するには至っていなかった。つまり、「まちの人々」が「Memorial Rebirth 千住」に関わりをもつ際、言い換えるならば、「Memorial Rebirth 千住」に

インプットされる際の入口が多層的であることが、ロジックモデルの型に落とし込んで初めて俯瞰的に可視化されたのである。

最後に、今回、ロジックモデルの型に落とし込みながら「Memorial Rebirth 千住」の10年間を振り返ったことにより、結果として、今まで「Memorial Rebirth 千住」が五里霧中の状況に度々陥りながらも、確かに一歩一歩、着実に歩んできた道のりを辿ることができた。さらに、現在はまだ実現できていない『アーティストから自律し、「千住のメモリバ」になる』といった未来のビジョンを描き出すことにもつながった[1]。その一方で、その10年間を通して継続的に関わり、プロジェクト全体を俯瞰して振り返ることができる関係者がほぼいないことも改めて判明した。この関係者の移り変わりは、長期間続くプロジェクトにおいては往々にして起こりうる。そして、その移り変わりは、道のりを振り返り、検証する必要があるロジックモデルを使用した評価への大きなハードルであるだけでなく、プロジェクトの記憶をバトンとして、次の10年、次の世代、次の実施主体へ手渡す際にも大きな問題となる。その記憶の風化を防ぎ、記憶（Memorial）を想起、再生（Rebirth）するためにも、ある一定期間プロジェクトが継続した時点、さらにはプロジェクトが終わりを迎えた時に、ロジックモデルの型を援用しつつ、今までの道のりを可視化し振り返る作業には、「メモリーバックアップ」としても大きな意味があるのではないだろうか。

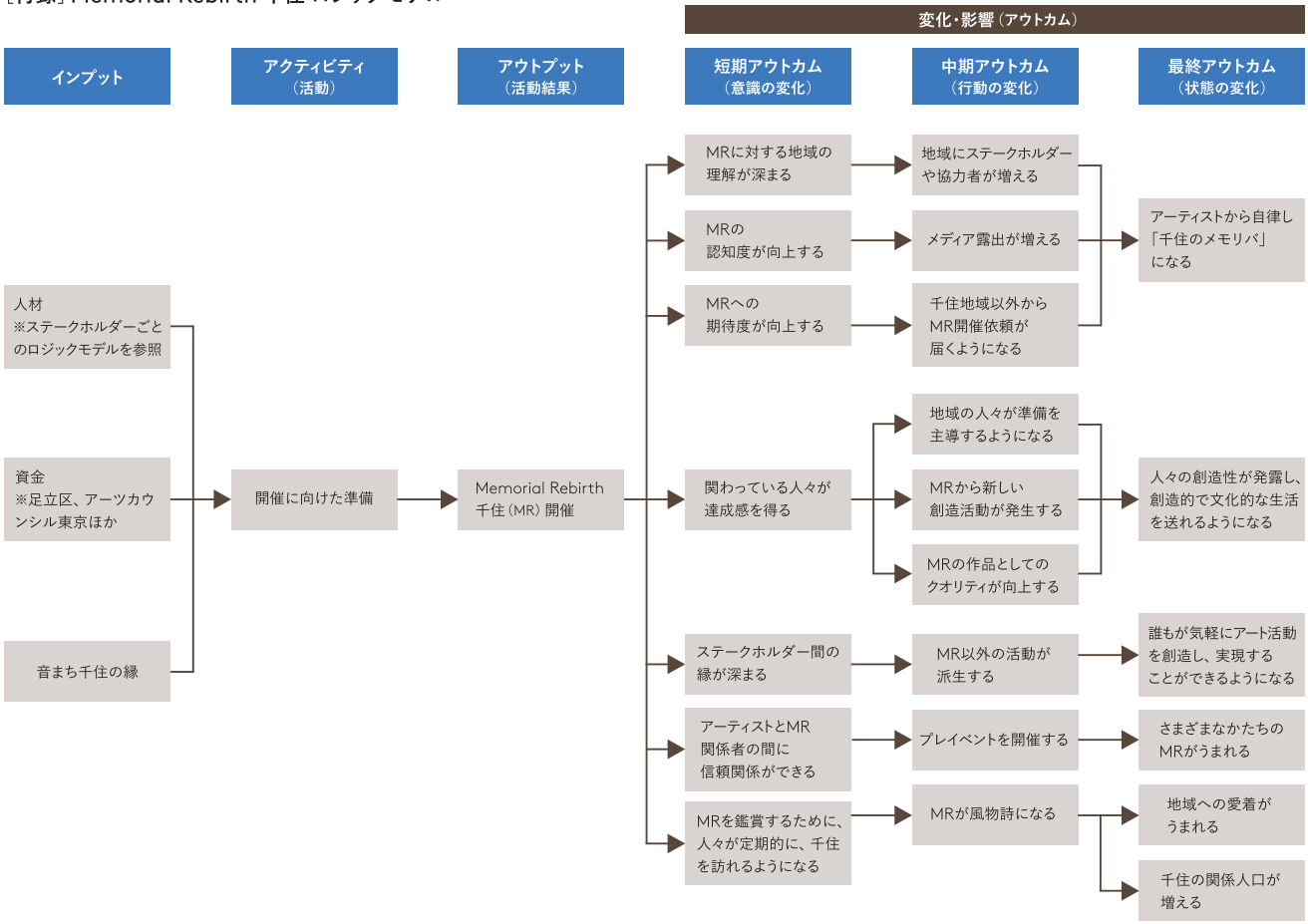
自分たちのプロジェクトの長い長い道のりを振り返りたいと考える人々にとっては、その振り返りの一手法として、そして、次に「Memorial Rebirth」を受けとる／受けとりたい地域、新たにアートプロジェクトを始めたい／始めようとしている人々にとっては、そのプロジェクトを始める際に作成する「ロジックモデル」の一例として、本付録が参考になれば幸いである。

なお、本ロジックモデルはあくまで「シンプル化」したものであることを改めて明記しておく。つまり、このロジックモデルに描ききれなかった**アウトカム**や**インパクト**が数多く存在し、一方向の矢印では表現しきれない、行ったり来たり、一歩進んでは二歩以上退がり、時に迂回し、時に瞬間移動するといった出来事がアートプロジェクトでは常に起こっているのである。

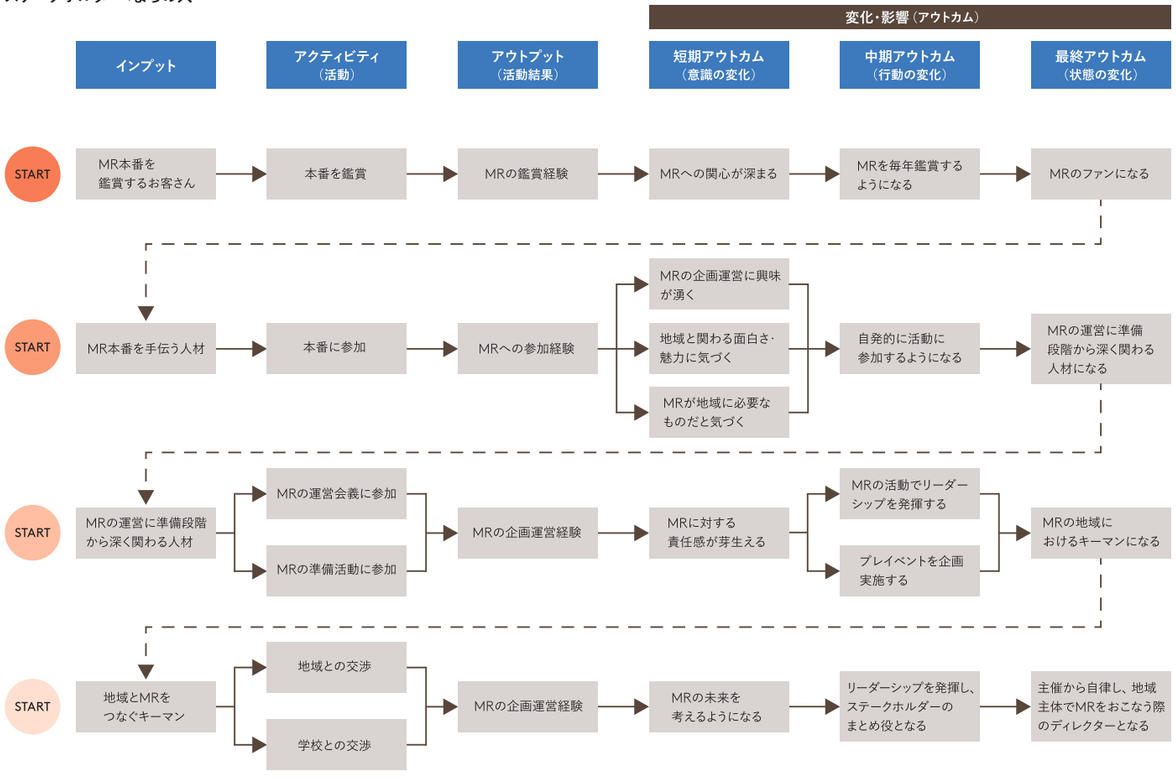
1｜詳細は、本書のクロストーク『アートなんてわかんねぇ!』（pp.34–50）や、『大巻伸嗣とMemorial Rebirthの未来』（pp.72–76）を参照されたい。

参考文献｜NPO法人アートNPOリンク（2019）. ARTS NPO DATABANK 2018–19
「実践編！アートの現場からうまれた評価」. NPO法人アートNPOリンク
吉澤弥生「『評価』の用語集」（同上）
若林朋子「再考:芸術·文化領域における評価」（同上）

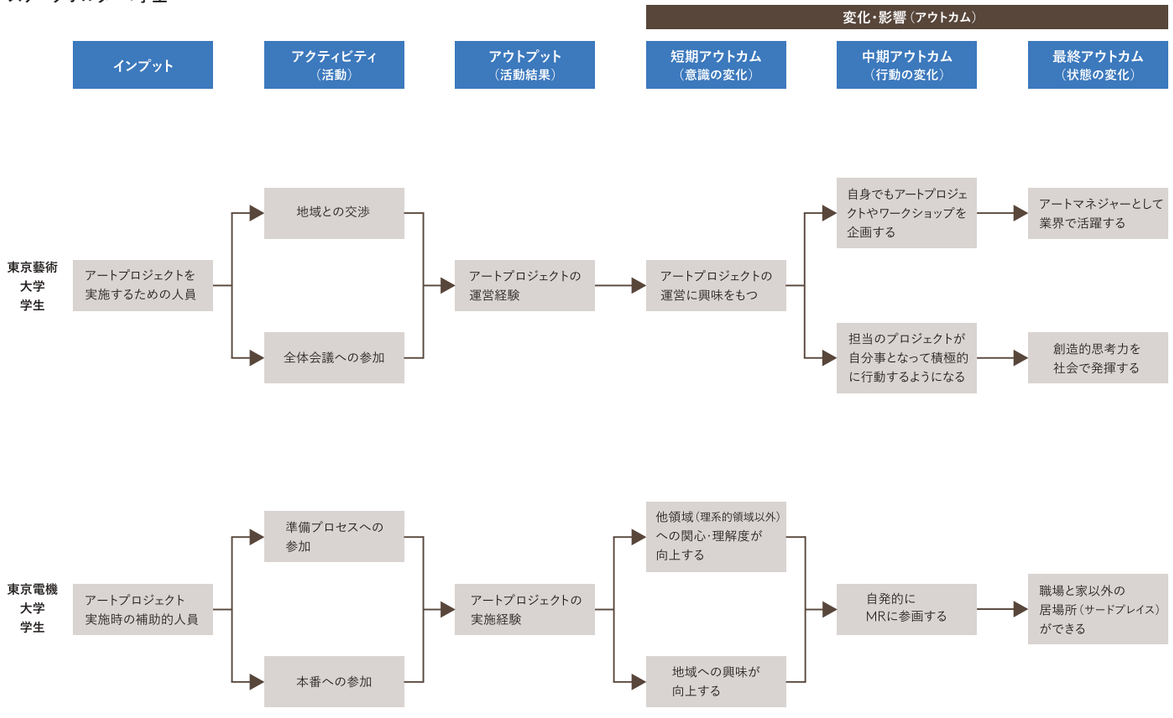
［付録］Memorial Rebirth 千住 ロジックモデル



ステークホルダー：まちの人



ステークホルダー：学生



本図は、槇原彩（成蹊大学文学部芸術文化行政コース客員講師）、
アートアクセスあだち 音まち千住の縁「Memorial Rebirth 千住」担当スタッフが作成した。

「Memorial Rebirth 千住 2016 青葉」(2016年10月)　撮影｜高田洋三

「Memorial Rebirth 千住 2017 関屋」(2017年11月)　撮影｜冨田了平

「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」(2018年11月)　撮影｜冨田了平

「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」(2018年11月)　撮影｜冨田了平

「Memorial Rebirth 千住 2017 関屋」(2017年11月)　撮影｜富田了平

「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」(2018年11月)　撮影｜富田了平

小型のシャボン玉マシン「電大マシン」制作風景（2018年11月）

大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @北千住マルイ」（2018年10月）

大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @かりん祭」(2019年11月)

「メモリバ工房」自転車の制作風景(2021年3月)

「メモリバのホームステイ」Hさん宅(2021年10月)

「Memorial Rebirth 千住」仲町の家での展示風景(2020年9月)

大巻電機K.K. from Memorial Rebirth 千住「メモリバ・プチ in 1DAYパフォーマンス表現街」(2021年10月)　撮影｜富田了平

「Memorial Rebirth 千住」年表 2011–2022

［企画名の色分け］

- 本番
- ホームステイ
- 市民メンバーの会議
- ワークショップ
- プレ

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
2011年度	2011	12月18日(日)	プロジェクト説明会／第1回ミーティング	東京藝術大学	32名	
		12月23日(金)	第2回ミーティング	東京藝術大学	7名	
		1月9日(月・祝)	千寿七福神めぐり	いろは通り	3名	
	2012	1月15日(日)	勉強会&親睦会	千住4丁目町会集会所	15名	
		1月18日(水)	音企画ミーティング	東京藝術大学	4名	
		1月25日(水)	広報ミーティング	東京藝術大学	2名	
		1月27日(金)	企画ミーティング	東京藝術大学	5名	
		2月1日(水)	大巻企画全体ミーティング	東京藝術大学	10名	
		2月5日(土)	広報ミーティング／音ミーティング	東京藝術大学	9名	
		2月12日(日)	音探しワークショップ	地元商店街	14名	
		2月19日(日)	リアカー装飾／広報ミーティング	東京藝術大学	8名	
		2月20日(月)	企画ミーティング	東京藝術大学	5名	
		2月26日(土)	全体ミーティング	東京藝術大学	9名	
		3月4日(日)	事前広報:練り歩き&パフォーマンス	千住旭公園	5名	
		3月7日(水)	企画ミーティング／うちわ制作	東京藝術大学	3名	
		3月8日(木)	音企画ミーティング	東京藝術大学	4名	
		3月10日(土)	ボランティア説明会(Memorial Rebirth 取扱説明会)	東京藝術大学	9名	
		3月11日(日)	ボランティア説明会(Memorial Rebirth 取扱説明会)	東京藝術大学	16名	
			練り歩きパフォーマンス	千住本町公園	5名	
		3月12日(月)	音企画ミーティング	東京藝術大学	4名	
		3月17日(土)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住いろは通り」**	いろは通り	90名	750名
		3月18日(日)	機械清掃／片付け	東京藝術大学	15名	

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
2012年度	2012	6月13日(水)	会場候補下見			
		7月19日(木)	地元PTAと交流会			
		7月22日(日)	MR シンポジウム・引き渡し式	寿町北寿町会・町会会館		23名
		7月23日(月)	5町会の町会会長会議で MR 企画のプレゼン			
			「Memorial Rebirth 千住いろは通り」写真展(〜8月5日)	千寿双葉小学校体育館ガラス張りギャラリー、千住いろは通り商店街の店舗、天空劇場		400名
		8月19日(日)	地域勉強会			
		11月5日(月)	しゃぼんおどりワークショップ			
		11月9日(金)	しゃぼんおどりワークショップ			
		11月12日(月)	しゃぼんおどりワークショップ			
		11月19日(月)	しゃぼんおどりワークショップ			
		11月21日(水)	しゃぼんおどりワークショップ			
		11月24日(土)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 2012 千住本町」**	足立区立千寿本町小学校 校庭	156名	2270名
		11月25日(日)	片付け			
2013年度	2013	8月28日(水)	千寿常東小学校説明会	足立区立千寿常東小学校		
		9月28日(土) 9月29日(日)	「Memorial Rebirth 千住 2013 常東」映像作りワークショップ	東京電機大学東京千住キャンパス	23名	
		10月19日(土)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2013 常東」**	足立区立千寿常東小学校 校庭		1800名
2014年度	2014	6月12日(木)	メモリバ写真展	足立区立千寿常東小学校		
		9月24日(水)	大巻企画会議	音う風屋	11名	
		11月2日(日)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2014 太郎山」**	千住旭公園(太郎山公園)	93名	2350名
2015年度	2015	4月18日(土)	マシン講習会	東京藝術大学		
		4月30日(木)	メモリバ定例ミーティング	音う風屋	12名	
		5月17日(日)	音まち親睦会	汐入公園		
		5月19日(木)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋	12名	
		6月6日(土)	プレ企画vol.1 ふわり◎シャボン玉	千寿双葉小学校		216名
		6月9日(木)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋	13名	
		6月23日(木)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋		
		7月19日(土)	マシン講習会	東京藝術大学		

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
2015年度	2015	8月1日(土)	プレ企画vol.2 ふわり◎シャボン玉	千住緑町商店街		477名
		8月6日(木)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋		
		8月18日(火)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋		
		8月22日(土)	衣装ワークショップ	たこテラス	4回合計21名	
		8月30日(日)	衣装ワークショップ	たこテラス	4回合計21名	
		9月3日(木)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋		
		9月13日(土)	プレ企画vol.3 ふわり◎シャボン玉	千寿第八小学校		203名
		9月19日(金)	衣装ワークショップ	たこテラス	4回合計21名	
		9月26日(金)	衣装ワークショップ	たこテラス	4回合計21名	
		9月29日(月)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋		
		10月1日(木)	テクニカルチーム定例ミーティング	音う風屋		
		10月11日(日)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2015 足立市場」**	足立市場		5050名
		11月5日(木)	メモリバ座談会	東京藝術大学		
2016年度	2016	6月11日(土)	メモリバ関係者キックオフ会	東京藝術大学		
		6月25日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		7名
		7月10日(日)	マシン講習会	東京藝術大学		28名
		7月30日(土)	プレ企画 vol.1 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @千住公園」	大川町公園		1000名
		8月5日(金)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		8月20日(土)	千寿青葉中学校見学	千寿青葉中学校		
		8月27日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		9月9日(金)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		9月23日(土)	プレ企画 vol.2 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @チェリーフェスタ」	千寿桜堤中学校	48名	123名
		10月9日(日)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2016 青葉」**	千寿青葉中学校	106名	1288名
		11月11日(金)	メモリバお疲れ様会	仲町の家		
		11月30日(水)	次年度開催地決定会議&忘年会	仲町の家		
2017年度	2017	6月17日(土)	メモリバ関係者キックオフ会	東京藝術大学		
		7月14日(金)	大巻電機K.K.定例ミーティング	仲町の家		
		8月9日(水)	大巻電機K.K.定例ミーティング	仲町の家		
		8月22日(火)	マシン講習会	東京藝術大学		

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
2017年度	2017	8月27日(日)	プレ企画 vol.1 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @西二祭り」	西新井第二小学校	13名	220名
		9月20日(水)	大巻電機K.K.定例ミーティング	仲町の家		
		9月23日(土)	ティーンズ楽団説明会	東京藝術大学	17名	
		9月24日(日)	決起バーベキュー	汐入公園		
		9月30日(土)	プレ企画 vol.2 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @西新井第二小学校 宿泊防災訓練」	西新井第二小学校	25名	339名
		10月7日(日)	ティーンズ楽団WS①	東京藝術大学	10名	
		10月8日(月)	Aフェスタ			160名
		11月2日(木)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		11月4日(土)	ティーンズ楽団WS②	東京藝術大学	6名	
			紙モノフェス			450名
		11月11日(土)	ティーンズ楽団WS③	東京藝術大学	12名	
		11月26日(日)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2017 関屋」**	関屋公園	103名	3211名
		12月26日(火)	メモリバお疲れ様会	仲町の家		
2018年度	2018	2月23日(金)	「Memorial Rebirth 千住」検証･ふりかえりの勉強会	東京藝術大学		
		5月1日(火)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		6月5日(火)	大巻電機K.K.定例ミーティング	仲町の家		
		7月14日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング			
		7月21日(土)	プレ企画 vol.1 大巻電機 K.K. presents「ふわり◎シャボン玉@白うめ幼稚園」	足立白うめ幼稚園 園庭	10名	583名
		9月8日(土)	マシン講習会	西新井第二小学校		
			西二きっずボンダンサーズ　ワークショップ①	西新井第二小学校	12名	
		9月15日(土)	プレ企画 vol.2 大巻電機 K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @つばめ幼稚園」	足立つばめ幼稚園 園庭	12名	547名
		9月22日(土)	1日だけのティーンズ楽団&合唱団説明会、ワークショップ①	ギャラクシティ 足立区こども未来創造館	13名	
		10月6日(土)	1日だけのティーンズ楽団&合唱団説明会、ワークショップ②	ギャラクシティ 足立区こども未来創造館	15名	
		10月13日(土)	西二きっずボンダンサーズ　ワークショップ②	西新井第二小学校	12名	
		10月24日(水)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		10月27日(土)	プレ企画 vol.3 大巻電機 K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @北千住マルイ」	北千住マルイ	20名	680名
		10月28日(日)	決起バーベキュー	舎人公園		
		11月2日(金)	電大マシン制作@電大	東京電機大学		
		11月10日(土)	1日だけのティーンズ楽団&合唱団ワークショップ	竹の塚地域学習センター	48名	

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
		11月13日(火)	全体ミーティング	東京藝術大学		
		11月18日(日)	**大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」**	西新井第二小学校	116名	3400名
2019年度	2019	3月12日(火)	「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」検証･ふりかえりの勉強会	東京藝術大学		
		4月20日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学	8名	
		5月6日(月)	千寿小学校PTAと顔合わせ	仲町の家	10名	
		5月11日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	しょうぶ沼公園	12名	
		6月1日(土)	大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉」@しょうぶまつり	しょうぶ沼公園		1880名
		6月2日(日)				
		6月28日(金)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学	12名	
		7月6日(土)	しゃぼんおどり普及大作戦　@東京五輪音頭講習会	足立区庁舎ホール		60名
			しゃぼんおどり普及大作戦　@Meet up!	エンブレムホステル西新井		84名
		7月16日(火)	しゃぼんおどりPRビデオ撮影	荒川河川敷、仲町の家、いろは通り商店街		
		7月31日(水)	しゃぼんおどり録音	東京藝術大学	5名	
		8月8日(木)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学		
		9月14日(土)	しゃぼんおどり普及大作戦　@輪踊り	千寿双葉小学校		300名
		9月28日(土)	大巻電機K.K.公募説明会、マシン講習会	東京藝術大学	10名	
		10月5日(土)	プレ企画 vol.1 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @行燈まつり」	西新井大師　境内		650名
		10月19日(土)	メモリバ学校　理科　材料準備会	東京藝術大学	7名	
		10月20日(日)	大巻電機K.K.公募説明会、マシン講習会	東京藝術大学	6名	
		10月26日(土)	プレ企画 vol.2 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @1010フェスタ」	北千住マルイ		930名
		11月3日(日)	プレ企画 vol.3 大巻電機K.K. presents「ふわり◎シャボン玉 @かりん祭」	西新井大師北参道		300名
		11月10日(日)	メモリバ学校　理科　スタッフ講習会	東京藝術大学	11名	
		11月19日(火)	しゃぼんおどり普及大作戦　@西新井地域ふれあいサロン交流会	OUCHIカフェ(西新井)	3名	80名
		11月23日(土)	しゃぼんおどり普及大作戦　@あだちメディフェス	北千住BUoY		160名
		11月30日(土)	しゃぼんおどり普及大作戦　@ケアフェスin谷中	谷中公園(北綾瀬)		145名
		12月3日(火)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学	15名	
		12月7日(土)	メモリバ学校　理科	ギャラクシティ 足立区こども未来創造館	17名	28名
		12月17日(火)	メモリバ学校　家庭科　準備会①	Uさんご自宅	8名	
		12月18日(水)	メモリバ学校　家庭科　見学	あだち再生館	1名	

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
2019年度		1月18日(土)	メモリバ学校　国語①	舎人地域学習センター	12名	
		1月22日(水)	メモリバ学校　家庭科　準備会②	Uさんご自宅	6名	
		1月26日(日)	メモリバ学校　家庭科	伊興小学校	29名	
		2月1日(土)	メモリバ学校　国語②	舎人地域学習センター	11名	
		2月9日(日)	メモリバ学校　国語③	舎人地域学習センター	9名	
		2月11日(火)	しゃボンおどり普及大作戦　@すきだっちゃ南三陸	全學寺	4名	60名
		2月15日(土)	メモリバ写真展示	仲町の家		
		2月22日(土)	メモリバ学校　音楽·体育①	足立つばめ幼稚園	37名	
		2月29日(土)	【中止】〈メモリバ学校〉技術	東京藝術大学		
		3月8日(日)	【中止】プレ企画	伊興小学校		
		3月28日(土)	【中止】〈メモリバ学校〉音楽·体育②	伊興小学校		
2020年度	2020	4月5日(日)	大巻電機K.K.雑談会、ミーティング	zoom	16名	
		4月16日(木)	大巻電機K.K.オンライン飲み会			
		4月19日(日)	**【中止】大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2020 舎人公園」**	舎人公園		
			#メモリバ0419	各所		
		4月25日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	zoom	17名	
		5月中	メモリバ学校の昼やすみ　動画配信開始	YouTube		
		6月6日(土)	大巻電機K.K.オンライン飲み会	zoom		
		7月19日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	zoom	13名	
		8月20日(木)	しゃボンおどり普及大作戦　オンライン盆踊り	zoom		
		8月23日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	仲町の家·zoom	17名	
		8月24日(月)	ゲリラ企画	仲町の家		
		9月6日(日)	メモリバ展示設営	仲町の家		
		10月3日(土)	ゲリラ企画　千住まち巡り	千住地域		
		10月18日(日)	アーティスト·クロストーク《オンライン》#02 「大巻伸嗣×地域アート?『アートなんてわかんねぇ!』」	東京藝術大学		
		11月8日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	17名	
		11月20日(金)	大巻電機K.K.定例ミーティング	zoom	12名	
		11月29日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	15名	

		日付	企画	場所	参加者・スタッフ数	来場者数
2020年度	2020	12月3日(木)	メモリバ工房　技術会議	東京藝術大学		
		12月19日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティングwith大巻さん	東京藝術大学	21名	
			キックオフ企画　クリスマス企画	東京藝術大学		
	2021	1月中	10年本ヒアリング調査	各所·zoom		
		1月16日(土)	メモリバのホームステイ　寺澤さん	寺澤さんご自宅	5名	
		1月31日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	zoom	23名	
		2月18日(木)	大巻電機K.K. 卒業式·卒園式企画会議	仲町の家·zoom	8名	
		2月28日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	zoom	21名	
		3月14日(日)	キックオフ企画「春風」(メモリバ工房、メモリバのホームステイ)	東京藝術大学·zoom		
		3月16日(火)	メモリバのホームステイ　千住寿幼稚園卒園式	千住寿幼稚園		
		3月25日(木)	メモリバのホームステイ　西新井第二小学校卒業式	西新井第二小学校		
			メモリバのホームステイ　千寿小学校卒業式	千寿小学校		
		3月30日(火)	メモリバ倉庫移送	千住緑町·三浦		
2021年度		4月7日(水)	メモリバ工房　自転車制作会議		4名	
		4月24日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	18名	
		6月13日(日)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	17名	
		7月3日(土)	メモリバのホームステイ　準備日	東京藝術大学	4名	
		7月16日(金)	大巻電機K.K.定例ミーティングwith大巻さん	東京藝術大学·zoom	18名	
		8月14日(土)	メモリバ工房　自転車進捗確認	仲町の家	3名	
		9月19日(日)	メモリバのホームステイ　①児童養護施設	児童養護施設	60名	
		9月20日(月)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	13名	
		10月3日(日)	メモリバのホームステイ　②Hさん	OHAKO	12名	
		10月16日(土)	メモリバのホームステイ　③Yさん	Yさんご自宅	5名	
		11月7日(日)	メモリバのホームステイ　④Nさん	Nさんご自宅	12名	
		11月13日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	15名	
		12月25日(土)	Memorial Rebirth 千住 広報事業 in Kids Village Christmas	西綾瀬		500名
	2022	1月15日(土)	大巻電機K.K.定例ミーティング	東京藝術大学·zoom	16名	

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」これまでの主なプログラム

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（通称「音まち」）は、平成24（2012）年度の足立区制80周年記念事業をきっかけとして、足立区にアートを通じた新たなコミュニケーション（縁）を生み出すことをめざす市民参加型のアートプロジェクトです。足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、「音」をテーマとした多様なプログラムをまちなかで展開しています。江戸四宿のひとつとして栄え、現在もその名残をとどめる下町情緒溢れるまちの、地域資源と各地域の交流地としての文化の多様性を最大限に活かし、人と人、人と場所、人とアートの様々な「縁」を結んでいます。

足立智美｜「ぬぉ」／ジョン・ケージ「ミュージサーカス」

「ぬぉ」は、作曲家・足立智美による、足立市場を舞台とした市民参加型のイベント。2011年、公募で集まった演奏者とともに、足立市場で即興音楽を演奏した。2012年には生誕 100年を迎えた作曲家ジョン・ケージ考案の「ミュージサーカス」を足立市場で展開。総勢 300名以上の音楽家やパフォーマーらがクラシック・ジャズ・落語・ガムランなど、ジャンルを問わずパフォーマンスを繰り広げた。

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭

音楽家の野村誠を中心に、地域の人たちが気軽にだじゃれを言い合い、そこから音楽をつくり上げるプロジェクト。市民による音楽団体「だじゃれ音楽研究会」とともに実施している。「だじゃれ」は、別々の言葉をつなげることで生まれる予想外のパワーを楽しむものであり、「だじゃれ音楽」は、その力を活かした、新しい作曲方法の開発に向けた取り組みでもある。

大友良英｜千住フライングオーケストラ

音楽家・大友良英と、公募で集まった「チーム・アンサンブルズ」が、“空から音が降り注ぐ演奏会”を目指すプロジェクト。自然に左右されながらも、「音の出る凧」や「音の出る提灯」などを開発し、誰も見たことのない音楽空間づくりに挑戦した。プロジェクトFUKUSHIMA!（福島）、六本木アートナイト2013（六本木）、アンサンブルズ・パレード／すみだ川音楽解放区（浅草）など、千住を離れた遠征活動も展開した。

大巻伸嗣｜《イドラ》／《くろい家》

《イドラ》は、大巻伸嗣による新作インスタレーション作品。展示会場である千住地域の築70年以上の民家からインスピレーションを受け、光と影が交錯する無音の空間をつくり出した。《くろい家》は、同じく千住地域の空き家を使った作品。築50年を超える、異様な佇いを持つ《くろい家》を会場に、家の中をシャボン玉が静かに漂う空間を創り上げた。

足立区制80周年記念事業

足立区制80周年を記念して、2012年10月27日から12月2日までをメイン会期として様々なプログラムを開催した。
大友良英「千住フライングオーケストラ」／大巻伸嗣「Memorial Rebirth 2012 千住本町」「イドラ」／野村誠「千住だじゃれ音楽祭」／やくしまるえつこ「奉納朗読会」「放送・時報」／ジョン・ケージ『ミュージサーカス』（芸術監督：足立智美）／スプツニ子！「ADACHI HIPHOP PROJECT」／八木良太「(Another) Furniture Music ― （別の）家具の音楽」／未来楽器図書館／ASA-CHANG&音まち子どもパラダイスオーケストラ／音まちトーク「ねほりはほり」ほか

スプツニ子！｜ADACHI HIPHOP PROJECT

ロンドンなど国内外で活躍するスプツニ子!が、足立区内でも活発なヒップホップ文化に注目し、区内の若手ラッパーとタッグを組み、一緒につくり上げていく下町ヒップホップ・プロジェクト。ラッパーが地元をガイドするバスツアーと、ミュージシャンらによるライブの 2 本立てを開催したほか、中高生を対象としたワークショップも実施した。

未来楽器図書館

まちなか活動拠点「音う風屋（おとうふや）」で「未来の楽器」をテーマに音楽家やインスタレーション作家らによる作品を展示。来場者が実際に触って音を楽しめる体験型展示となった。

千住ミュージックホール

喫茶店やボクシングジム、銭湯など様々な場所をライブハウスに見立てたシリーズ。

イミグレーション・ミュージアム・東京

美術家の岩井成昭が監修を務める、国内に在留する海外ルーツの人々の日常生活に焦点をあてたプロジェクト。海外ルーツの人々との交流を通して、ニューカマーの生活様式や文化背景を紹介するとともに、それが日常の中で変容していく諸相を「適応」「保持」「融合」という3つのキーワードから探る。「ミュージアム」という名称でありながら施設を持たず、足立区の空き店舗や教会、古民家などを転々と移動しながら展開している。

千住・縁レジデンス

若手アーティストを招聘し、千住ならではの〈場〉や〈人〉とのコミュニケーションを深める滞在制作プログラム。2015年から実施し、久保ガエタン（2015）、友政麻理子（2015-2021）、表現（Hyogen）（2017-2018）、居間 theater（2018）が制作・発表を行った。

友政麻理子｜知らない路地の映画祭／窓映画館、カーテンの夢

「知らない路地の映画祭」は、美術家・友政麻理子と一般の参加者が、自主映画作品をともにつくり上げるプロジェクト。作品は、参加者自身がメガホンを取り、シナリオから、撮影、編集、音楽まで自分たちで制作している（2018年度からは知らない路地の映画祭制作委員会が主催）。「窓映画館、カーテンの夢」は、友政がコロナ禍で開始した、千住のまちなかで展開する野外上映プロジェクト。まちの人々から集めた「コロナ禍で見た夢」を元にした映像を千住各所の窓に投影し、参加者は回遊しながら鑑賞した。

アサダワタル｜千住タウンレーベル／声の質問19

「千住タウンレーベル」は、アーティスト・アサダワタルと一般公募で集まった「タウンレコーダー（音の記者）」が、千住の多様な「音」や「言葉」を記録、編集、制作、発信していく参加型音楽レーベルである。「声の質問19」は、アサダがコロナ禍で知人らに送った、音声による「質問」のやりとりをきっかけに開始したコミュニケーション様式。テキストではなく「声」のやりとりを通じて、自分と出会い直し、誰かとつながる試みとして展開した。

千住・人情芸術祭

「千住・人情芸術祭」は、人と人との価値観や感情のやりとりを「人情」と捉えて、多様な表現者を受け止める舞台としてのプロジェクト。初年度の2021年は、9月から10月にかけての約1ヶ月間に3つのプログラムを展開した。そのひとつである「1DAYパフォーマンス表現街」は、江戸時代から人々の交流と文化の根付く場所であった千住ほんちょう商店街（旧・日光街道）を会場に、多彩な表現を介して、人と人、人と場所、人とアートが出会う機会を創出する試みである。

仲町の家

「音まち千住の縁」が運営する千住の文化サロン「仲町の家（なかちょうのいえ）」は、千住仲町にある戦前に建てられた日本家屋。2016年からプロジェクトの展示会場や、映画上映、企画のミーティングなどに使用しているほか、2018年からは交流拠点として定期的な開室を行い、新たな活動の種が育つ芸術活動創造拠点の形成を目指している。また、地域内のパートナー団体等とのネットワーク構築に着手するための拠点としても活用を図る「パイロットプログラム」も実施している。

仲町の家

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭　撮影：森孝介

イミグレーション・ミュージアム・東京　撮影：冨田了平

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」年表 2011–2022

プログラム
イベント・活動名
日時　会場
アーティスト、ゲスト等

2011年度

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事業開始
7月

ボランティアサポーター「ヤッチャイ隊」活動開始
9月

キックオフ・フォーラム「デビュー！デビュー！デビュー！」
10/1　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
足立智美、大友良英、大巻伸嗣、野村誠

足立智美｜ぬぉ
コンサート「ぬぉ − チューバと自動車と器楽、合唱のための魚市場 ねぎま鍋付」
10/22　東京都中央卸売市場 足立市場
足立智美 ほか

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住いろは通り
3/17　いろは通り
大巻伸嗣、安野太郎 ほか

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
野村誠ふろデュース 千住だじゃれ音楽祭 − 風呂フェッショナルなコンサート
3/17　タカラ湯
野村誠 ほか

大友良英｜千住フライングオーケストラ
空飛ぶオーケストラ大実験 − 千住フライングオーケストラお披露目会
3/20　荒川河川敷 虹の広場
大友良英、遠藤一郎、堀尾寛太、梅田哲也、毛利悠子、チャンチキトルネエド選抜メンバー ほか

2012年度

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住だじゃれウォーキング
5/20　北千住駅西口周辺、4丁目氷川神社社務所、東京藝術大学千住キャンパス スタジオA

大友良英｜千住フライングオーケストラ
音の出る凧コンテスト
6/10　足立区立千寿常東小学校

まちなか拠点「音う風屋」オープン
6/30

音まちトーク ねほりはほり 第1回
7/8　音う風屋
舟橋左斗子

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth シンポジウム・引き渡し式
7/22　寿町北寿町会 町会会館

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「Memorial Rebirth 千住いろは通り」写真展
7/23〜8/5　千寿双葉小学校体育館ガラス張りギャラリー、千住いろは通り商店街の店舗、天空劇場

音まちトーク ねほりはほり 第2回
8/19　音う風屋
たこきょうこ、ヨネザワエリカ

音まちトーク ねほりはほり 第3回
9/23　音う風屋
加賀山耕一、三浦一朗

やくしまるえつこ｜放送·時報
花火放送
10/13　足立区全域
やくしまるえつこ

ASA-CHANG ｜音まち子どもパラダイスオーケストラ
ASA-CHANG &音まち子どもパラダイスオーケストラ
10/13　荒川河川敷 虹の広場
ASA-CHANG

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住だじゃれ音楽祭ワークショップ
10/14　音う風屋

足立智美｜ジョン·ケージ「ミュージサーカス」
プレイベント ジョン・ケージの思想と音楽
10/21　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
足立智美、井上郷子、ミズモトアキラ

大友良英｜千住フライングオーケストラ
千住フライングオーケストラ
10/27　荒川河川敷 虹の広場、まちなかパレード:柳原商栄会、学園通り、宿場町通り商店街、宿場通り商店街
大友良英、遠藤一郎、バッキパ!、チャンチキフライングホーンズ、チーム·アンサンブルズ ほか

大巻伸嗣｜イドラ
イドラ〈展示〉
10/27〜12/2　イドラノヤカタ
大巻伸嗣

八木良太｜(Another) Furniture Music—(別の)家具の音楽
(Another) Furniture Music—〈別の〉家具の音楽〈展示〉
10/27〜12/2　一軒家
八木良太

未来楽器図書館
未来楽器図書館〈展示〉
10/27〜12/2　音う風屋
EYヨ、足立智美、小日山拓也、八木良太、山本俊一

やくしまるえつこ｜放送·時報
時報
10/27〜12/2　北千住駅西口大型ビジョン、千住地域5商店街
やくしまるえつこ

やくしまるえつこ｜放送·時報
下校時安全放送
10/29〜11/26　千住全域
やくしまるえつこ

足立智美｜ジョン·ケージ「ミュージサーカス」
ジョン・ケージ「ミュージサーカス」芸術監督·足立智美
11/3　東京都中央卸売市場 足立市場
足立智美 ほか

音まちトーク ねほりはほり スペシャル（第4回）
11/10　北千岡
アサダワタル、大原次次郎

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
だじゃれ音楽体験ワークショップ
11/17　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
子どもだじゃれ音楽ワークショップ
11/18　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール

八木良太｜(Another) Furniture Music—(別の)家具の音楽
アーティストトーク「Bar Vinyl」
11/18　cafe わかば堂

スプツニ子！｜ADACHI HIP HOP PROJECT
ワークショップ「千住のまちをヒップホップする！」
11/23　足立区立千寿常東小学校
スプツニ子!

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 2012 千住本町
11/24　足立区立千寿本町小学校
大巻伸嗣、くるくるチャーミー(大西健太郎、富塚絵美、松岡美弥子)、山口静江、枝川みつよ ほか

やくしまるえつこ｜奉納朗読会
奉納朗読会
11/25　千住河原町稲荷神社
やくしまるえつこやっちゃばカルテット(やくしまるえつこ、大友良英、山口元輝、和田永)

スプツニ子！｜ADACHI HIP HOP PROJECT
ADACHI HIP HOP PROJECT
12/1、2　バスツアー:足立区内各所、ライブ:東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
スプツニ子!、MACKA-CHIN、AFRA ほか

音まちトーク ねほりはほり 第5回
12/22　千住河原町稲荷神社会館
清宮陵一 ほか

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
野村誠ピアノソロ·コンサート「Lettuce play the piano」
1/19　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール

音まちトーク ねほりはほり 第6回
2/16　音う風屋
遠田節、森隆一郎

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
第一回定期演奏会「音まち千住の大団縁」
3/16　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
野村誠、梅津和時、大田智美、田中悠美子、中原雅彦、松原勝也、宮田篤、三浦正宏 ほか

音まちトーク ねほりはほり 第7回
3/31　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
清宮陵一 ほか

2013年度

音まちトーク「のらづくりプロジェクト」第1回
8/24　安養院
佐々木誠、寺井元一

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
映像作りワークショップ
9/28、29　東京電機大学東京千住キャンパス

音まち千住の縁PR事業「森・海・空の音たんけん」
10/12　荒川河川敷 虹の広場

未来楽器図書館
未来楽器図書館
10/12〜12/8　音う風屋
毛利悠子、江川次彦+小日山拓也、木本圭祐

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2013 常東
10/19　足立区立千寿常東小学校
大巻伸嗣、くるくるチャーミー(大西健太郎、角舞真実、田中文久、富塚絵美、松岡美弥子)

大友良英｜千住フライングオーケストラ
千住フライングオーケストラの公開リハーサル
11/3　東京藝術大学千住キャンパス、東京都中央卸売市場 足立市場
大友良英

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
国際交流企画第1弾:インドネシア篇 レクチャー&コンサート「メメットを藝大に歓迎だい！」
11/10　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
野村誠、メメット·チャイルル·スラマット、だじゃれ音楽研究会、小川実加子、松澤佑紗、リンズィ·ドゥガン、東京藝術大学ジャワガムランクラブ Titik Suara ほか

千住ミュージックホール
第1回 Knock「純★音楽会」
11/15　ライブハウス「Knock」北千住
遠藤賢司、チャーリー·ウィリアム+川村亘平斎(影絵)、遠藤一郎GROUP

千住ミュージックホール
番外編ライブ「歌声★浴場」
11/30　タカラ湯
東京縄文ボーイズ(チャーリー高橋、岡野勇仁、小日山拓也)、EMiKO VOiCE、池田絢子、森本ミホ

音まちトーク「のらづくりプロジェクト」第2回
11/30　タカラ湯
中崎透、遠田節

未来楽器図書館
未来楽器武道館
12/14　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
小日山拓也、江川次彦、木本圭祐、Numb、佐藤公俊

千住ミュージックホール
第2回「ADACHI HIPHOP PROJECT RETURNS！」
12/15　野口ボクシングジム
ADACHI HIPHOP PROJECT(アスペスト、黄猿、Glasses formad、NES、問題児、Dub-T、Ruta、TKS、Osurek Bertop、chopper)、スプツニ子!、環ROY

千住ミュージックホール
第3回 サンローゼ「魅惑の駅前歌謡ショー」
2/2　喫茶室サンローゼ
ASA-CHANG+ハッピータブラボンゴ会社、都築響一、みどり◯みき

千住ミュージックホール
第4回「New frontiers of world_s traditional music」
2/15〜23　日の出町団地スタジオ
佐々木翔太郎、平川麦、松澤佑紗、リンズィ·ドゥガン、鄭タンイ+李インズ、Loup-garou、青木賢三、久野隆昭

イミグレーション·ミュージアム·東京
イミグレーション・ミュージアム・東京 不思議な出会い
2/15〜23　日の出町団地スタジオ
上本竜平+カタノワカテリ子、井出友実+鶴巻俊治+伴優香子、岡野勇仁+佐藤友梨+宮本一行

イミグレーション·ミュージアム·東京
ギャラリー・トーク「未来のIMMに期待すること」
2/17　日の出町団地スタジオ
大橋史恵、牧野冬生、岩井成昭

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
国際交流企画第2弾:タイ篇 レクチャー&コンサート「タイのアナンを藝大に歓迎タイ！」
3/16　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
野村誠、アナン·ナルコン、だじゃれ音楽研究会、小川実加子、松澤佑紗、上遠野文音、リンズィ·ドゥガン ほか

大友良英｜千住フライングオーケストラ
千住フライングオーケストラ　緑日
3/21　東京都中央卸売市場 足立市場
大友良英スペシャルビッグバンド(大友良英、江藤直子、近藤達郎、鈴木広志、東涼太、今弘治、木村仁哉、大口俊輔、かわいしのぶ、小林武文、上原なな江、相川瞳)、遠藤一郎、いろいろ屋台 ほか

音まちトーク「のらづくりプロジェクト」第4回
3/30　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
千住ヤッチャイ大学実行委員会

ドキュメントブック「アートアクセスあだち 音まち千住の縁 2011-2013 ドキュメント」発行
3月

2014年度

千住ミュージックホール
第5回 かっぱディスコ
8/9
いぬ、Phasma
※イベント中止

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住だじゃれ音楽祭「千住の1010人」
10/12　東京都中央卸売市場 足立市場
野村誠、アナン·ナルコン、メメット·チャイルル·スラマット、池田邦太郎、ガンサデワ、倉品淳子、コーファイ、佐久間新、TASKE、小川実加子、上遠野文音、松澤佑紗、神田外語大学タイ音楽愛好会、東京藝術大学ジャワガムランクラブ Titik Suara、だじゃれ音楽研究会 ほか

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2014 太郎山
11/2　千住旭公園

大巻伸嗣、桔梗みすず、くるくるチャーミー（大西健太郎、富塚絵美、松岡美弥子）

千住ミュージックホール
第6回「ヨゾラノプレゼント」~そらカフェ演奏会~
12/21　レストランさくら
テニスコーツ、佐立努+mangneng、梅田哲也、池間由布子、ジョルディ·イリサール、ソニー·スミス

大友良英｜千住フライングオーケストラ
千住フライングオーケストラ ファイナル
1/11　荒川河川敷 虹の広場、安養院
大友良英、山元史朗、松本祐一、遠藤一郎

イミグレーション·ミュージアム·東京
イミグレーション・ミュージアム・東京 出会いのかたちパフォーマンス&トーク
2/11　カトリック梅田教会
岩井成昭、上本竜平、小形真莉江、井出友実、郷田彩巴、海老原周子、魏婷、ラメイ·アレック·ラッセル、荒川博行

イミグレーション·ミュージアム·東京
イミグレーション・ミュージアム・東京 出会いのかたち展示
2/14、15　日の出町団地スタジオ
鶴巻俊治、橋間由紀子、宮本一行、姜賢植、中森圭二郎

千住ミュージックホール
第7回 東京外縁ソングライン—チャーリー高橋 meets 北千住—大縁会
2/21　東京会館
菜の花楽団(チャーリー高橋+さとうじゅんこ+岡野勇仁)、スクリーントーンズmini(久住昌之、フクムラサトシ、西村shake充哉、栗本健)

2015年度

イミグレーション·ミュージアム·東京
参加者募集説明会
6/6　東京藝術大学千住キャンパス 第1講義室
岩井成昭

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.1 ふわり@シャボン玉
6/6　足立区立千寿双葉小学校

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
PR企画1「足立区しょうぶまつり」

6/7　都立東綾瀬公園
小日山拓也 ほか

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.2 ふわり@シャボン玉
8/1　千住緑町商店街·緑町会館

千住·緑レジデンス
オープンコンベティション
8/8　安養院
久保ガエタン（推薦者:難波祐子）、下司尚実（推薦者:近藤良平）、友政麻理子（推薦者:白坂ゆり）、中川裕貴（推薦者:アサダワタル）、橋本知久（推薦者:野村誠）

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
衣装ワークショップ
8/22、8/30、9/19、9/26　たこテラス

イミグレーション·ミュージアム·東京
イミグレーション·ミュージアム·東京　―普段着のできごと―
9/5〜23　千住地域の空き家
岩井成昭、宮本一行＋日比野桃子、宮本一行＋北野留美＋泉祐子＋山田泰子、姜賢植、森本菜穂、林賢熙

ヤッチャイ隊募集説明会
9/6、9/23、1/10、1/17　音う風屋、東京藝術大学千住キャンパス

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
PR企画2「あだち市場の日」
9/12　東京都中央卸売市場 足立市場
だじゃれ音楽研究会

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.3 ふわり@シャボン玉
9/13　足立区立千寿第八小学校

千住ミュージックホール
第8回 ギャラクシティ「スーパータイム☆パラボックス」
9/21　ギャラクシティ
DJ KAZUHIRO ABO & MC丸省、DJ いぬ

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2015 足立市場
10/11　東京都中央卸売市場 足立市場
大巻伸嗣、くるくるチャーミー（大西健太郎、富塚絵美、松岡美弥子）、桔梗みすず、千葉広樹、西本夏生、大久保由美、水越朋、千住ちんどん、だじゃ研バンド

イミグレーション·ミュージアム·東京
トークシリーズ「多文化共生について考える」基礎編 第1回　見学イベント:フィリピンコミュニティ見学―五感で感じるフィリピン
10/18　カトリック梅田教会

イミグレーション·ミュージアム·東京
トークシリーズ「多文化共生について考える」基礎編 第2回　多文化共生を「空想」にしないために―シティズンシップの視点から
10/30　学びピア21
塩原良和

イミグレーション·ミュージアム·東京
トークシリーズ「多文化共生について考える」基礎編 第3回　在日ブラジル人の現在
11/7　第一ビル
アンジェロ·イシ

千住·緑レジデンス
友政麻理子「知らない路地の映画祭」映画制作説明会
11/23　たこテラス
友政麻理子

イミグレーション·ミュージアム·東京
トークシリーズ「多文化共生について考える」芸術編 第1回　ドキュメンタリー演劇
11/28　第一ビル
田室寿見子

イミグレーション·ミュージアム·東京
トークシリーズ「多文化共生について考える」基礎編 第4回　在日フィリピン人の現在
12/5　学びピア21
高畑幸

千住フライングオーケストラ
千住フライングオーケストラ「研究発表会」
1/16　荒川河川敷 虹の広場、安養院
山元史朗、松本祐一、和田永、遠藤一郎、武田晃男

イミグレーション·ミュージアム·東京
トークシリーズ「多文化共生について考える」芸術編 ドキュメンタリー映画「HAFU/ハーフ」上映会·トークイベント
1/23　帝京科学大学3号館
須本エドワード、矢野デイビット

千住·緑レジデンス
久保ガエタン「記憶の遠近法」
1/23〜3/13　たこテラス
久保ガエタン

千住·緑レジデンス
友政麻理子「知らない路地の映画際」リサーチ展示
1/23〜3/13　たこテラス
友政麻理子

大巻伸嗣｜くろい家
大巻伸嗣「くろい家」
1/30〜3/13　くろい家
大巻伸嗣、難波祐子（ゲストキュレーター）

千住ミュージックホール
第9回 ホワイトスタジオ「シカクトライアングル」
1/31　ホワイトスタジオ
Jimanica×HEXPIXELS（比嘉了／ezzardrix）、小暮香帆×Akiko Nakayama、Nyolfen×大橋史

千住·緑レジデンス
アーティスト·ツアー
2/1、2/13、2/28　たこテラス
久保ガエタン

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
国際交流企画第3弾:タイ調査篇 レクチャー&コンサート「熱タイ音楽隊の一週間」
2/21　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
野村誠、だじゃれ音楽研究会、小川実加子、松澤佑紗 ほか

アーティスト·トーク
2/28　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
大巻伸嗣、友政麻理子、久保ガエタン、難波祐子

千住·緑レジデンス
友政麻理子「知らない路地の映画祭」映画上映会
3/11〜13　千住庁舎（旧ミリオン座跡地）
友政麻理子 ほか

2016年度

活動拠点「仲町の家」活用開始

大巻伸嗣｜くろい家
大巻伸嗣「くろい家」
4/2〜5/8　くろい家
大巻伸嗣、難波祐子（ゲストキュレーター）

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.1 ふわり◎シャボン玉
7/30　千住公園
しゃボンおどり盛り上げ隊

千住·緑レジデンス
友政麻理子「知らない路地の映画祭」
自主映画制作プロジェクト参加者募集説明会
8/27　東京藝術大学千住キャンパス　第1講義室
友政麻理子

イミグレーション·ミュージアム·東京
リサーチプロジェクト　横丁演劇部ワークショップ
9〜12月　東京藝術大学千住キャンパス プロジェクトルーム
柏木陽、飛田勘文

イミグレーション·ミュージアム·東京
「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ―知り、会い、踊る―」映像展示:「知る」Their history, to be our story
9/10〜9/19　仲町の家
阿部初美、冨田了平、日本大学佐藤慎也研究室

イミグレーション·ミュージアム·東京
「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ ―知り、会い、踊る―」ワークショップ:「会う」なにが気になる?
9/11、9/18　仲町の家
阿部初美

イミグレーション·ミュージアム·東京
「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ ―知り、会い、踊る―」パーティー:「踊る」フィリパピボ!!
9/17　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.2 ふわり◎シャボン玉
9/24　足立区立千寿桜堤中学校
しゃボンおどり盛り上げ隊

イミグレーション·ミュージアム·東京
写真展「銭湯哀歌（エレジー）、人情屋台、消えゆく昭和〜 ケント·ダールが歩いた千住〜」
10/1〜17　仲町の家 ほか
岩井成昭、ケント·ダール、関連企画:住友文彦、舟橋左斗子、華山荊、DJ Dandy、DJ Marie Kimishima

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2016 青葉
10/9　足立区立千寿青葉中学校
大巻伸嗣、くるくるチャーミー（大西健太郎、富塚絵美、松岡美弥子）、桔梗みすず、音まちビッグバンド ほか

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
第1回 だじゃれ音楽研究大会
10/22　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA ほか
野村誠、だじゃれ音楽研究会

アサダワタル｜千住タウンレーベル
タウンレコーダー 募集説明会
11/23　東京藝術大学千住キャンパス 第1講義室
アサダワタル

アサダワタル｜千住タウンレーベル
第1回 勉強会「"編集"行為の幅を知って、言葉と音楽を使いこなそう!」
12/11　東京藝術大学千住キャンパス 第1講義室
アサダワタル、岩淵拓郎

アサダワタル｜千住タウンレーベル
第2回 勉強会「音のメディアの変遷を歴史から学ぼう!」
12/17　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
アサダワタル、渡辺裕

イミグレーション·ミュージアム·東京
リサーチプロジェクト 横丁演劇部発表·インスタレーション
12/17、18　東京藝術大学千住キャンパス　プロジェクトルーム
飛田勘文

アサダワタル｜千住タウンレーベル
第3回 ワークショップ「かんがえてみる」
1/7、8　東京藝術大学千住キャンパス 第1講義室
アサダワタル

アサダワタル｜千住タウンレーベル
第4回 ワークショップ「きいてみる」
1/21、22　仲町の家、東京藝術大学千住キャンパス 第1講義室
アサダワタル

イミグレーション·ミュージアム·東京
リサーチプロジェクト　横丁演劇部勉強会
1/28　東京藝術大学千住キャンパス プロジェクトルーム
田室寿見子

アサダワタル｜千住タウンレーベル
第5回 ワークショップ「つくってみる 発表会に向けた最終制作編」
2/4、5　仲町の家、東京藝術大学千住キャンパス 第1講義室
アサダワタル

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
国際交流企画第4弾:インドネシア調査篇 レクチャー&コンサート「ジャワで交流したんじゃわ」
2/19　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
野村誠、佐久間新、だじゃれ音楽研究会

千住·緑レジデンス
友政麻理子「知らない路地の映画祭」
2/24〜26　仲町の家
友政麻理子 ほか

アサダワタル｜千住タウンレーベル
試作品（デモ）発表会
2/26　安養院
アサダワタル、タウンレコーダー

2017年度

「仲町の家」拠点形成事業 パイロットプログラム開始

千住·緑レジデンス
友政麻理子　アーティスト·イン·レジデンス
4〜翌年3月　仲町の家 ほか
友政麻理子

イミグレーション·ミュージアム·東京
「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ ―知り、会い、踊る―」スーパビボ募集説明会
5/27　仲町の家

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
ワークショップ in しょうぶまつり
6/3　東綾瀬公園
だじゃれ音楽研究会

イミグレーション·ミュージアム·東京
「フィリピンからの、ひとりひとり　マキララ ―知り、会い、踊る―」映像展示:Their history, to be our story
7/22〜8/7　仲町の家
阿部初美、冨田了平、日本大学佐藤慎也研究室

イミグレーション·ミュージアム·東京
「フィリピンからの、ひとりひとり　マキララ ―知り、会い、踊る―」　パーティー:フィリパピボ!!
7/29　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
スーパビボ ほか

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
こども歌づくりワークショップ
8/20　ギャラクシティ
野村誠、だじゃれ音楽研究会

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
第2回 だじゃれ音楽研究大会
8/26　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA ほか
野村誠、だじゃれ音楽研究会、日本だじゃれ活用協会

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.1 ふわり◎シャボン玉
8/27　足立区立西新井第二小学校
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
1日だけのティーンズ楽団ワークショップ
9/23、10/7、11/4、11/11　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA ほか
くるくるチャーミー（田中文久、富塚絵美、松岡美弥子）

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.2 ふわり◎シャボン玉
9/30　足立区立西新井第二小学校
大巻電機 K.K.、音まちビッグバンド

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
PRイベント in あだち区民まつりA-Festa 2017
10/7、8　荒川河川敷 虹の広場

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
PRイベント in 第2回千住紙ものフェス
11/4　千住四丁目氷川神社
音まちビッグバンド

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2017 関屋
11/26　関屋公園
大巻伸嗣、くるくるチャーミー（大西健太郎、田中文久、富塚絵美、松岡美弥子）、桔梗みすず、栗原荏平、音まちビッグバンド、ティーンズ楽団 ほか
夜の部の音楽:「Teens' Voice Park」（作曲:田中文久）

イミグレーション·ミュージアム·東京
連続勉強会「多文化共生を考える」イラク文化から見るイスラム教
12/8　仲町の家
樋口美作

イミグレーション·ミュージアム·東京
連続勉強会「多文化共生を考える」イスラエル文化から見るユダヤ教とキリスト教
12/15　仲町の家
笈川博一

イミグレーション·ミュージアム·東京
連続勉強会「多文化共生を考える」チベットから見える仏教文化
1/14　仲町の家
弓削田彫子

アサダワタル｜千住タウンレーベル
「音盤千住 vol.1」レコ発企画「聴きめぐり千住!」
1/21　千住地域各所
アサダワタル、タウンレコーダー

千住·緑レジデンス
表現（Hyogen）「茶MUSICA」
1/28、2/10、2/11、2/17　仲町の家
表現（Hyogen）、神崎悠輔

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
第2回 定期演奏会「かげきな影絵オペラ」
2/4　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
野村誠、だじゃれ音楽研究会、梅津和時、神谷未穂、川村亘平斎、竹澤悦子、中原雅彦

千住·緑レジデンス
地域連携プログラム「表現（Hyogen）×松本一哉 ライブ」
2/14　安養院
表現（Hyogen）、松本一哉

千住·緑レジデンス
トーク:友政麻理子の見た千住
2/24　仲町の家
友政麻理子

2018年度

千住·緑レジデンス
友政麻理子 アーティスト·イン·レジデンス

4〜翌年3月　仲町の家
友政麻理子

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
アウトリーチプログラム　カタリバWS
4/29、11/3　アダチベース

アサダワタル｜千住タウンレーベル
タウンレコーダー募集説明会
5/12　仲町の家　ほか
アサダワタル、タウンレコーダー

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
アウトリーチプログラム　しょうぶまつりWS
6/2、3　しょうぶ沼公園

千住·緑レジデンス
居間 theater「4人姉妹の家びらき·夏」
7/7〜8/6　仲町の家
居間 theater

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.1 ふわり◎シャボン玉
7/21　足立白うめ幼稚園
大巻電機 K.K.

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
アウトリーチプログラム　「あだち市場の日」出展
9/8　東京都中央卸売市場 足立市場

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
西二きっずボンダンサーズ　ワークショップ
9/8、10/13　足立区立西新井第二小学校

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.2 ふわり◎シャボン玉
9/15　足立つばめ幼稚園
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
1日だけのティーンズ楽団&合唱団ワークショップ 募集説明会
9/22、10/6　ギャラクシティ

拠点形成事業
映像・サウンドインスタレーション 三上亮／遠藤幹大「Under Her Skin」
9/29〜3/4　仲町の家
三上亮、遠藤幹大

拠点形成事業
「仲町の家」定期開室開始
9/30

PR事業　こども創作ワークショップ（**あだち区民まつり「A-Festa」内**）
10/6　荒川河川敷 虹の広場

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
1日だけのティーンズ楽団&合唱団ワークショップ
10/16、11/10　ギャラクシティ、竹の塚地域学習センター

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.3 ふわり◎シャボン玉
10/27　北千住マルイ
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
1日だけのティーンズ楽団&合唱団リハーサル
11/17、18　東京藝術大学千住キャンパス、足立区立西新井第二小学校

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2018 西新井
11/18　足立区立西新井第二小学校
大巻伸嗣、くるくるチャーミー（井川丹、大西健太郎、富塚絵美）、香田享樹、音まちビッグバンド、ティーンズ楽団&合唱団、合唱サポーター、千住ちんどん ほか
夜の部の音楽：合唱「西新井幻想曲（追憶のさざなみ）」（作曲：井川丹）

アサダワタル｜千住タウンレーベル
千住持ち寄りレコード鑑賞会
12/16、1/20、2/17　仲町の家 ほか
タウンレコーダー

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
第3回 だじゃれ音楽研究大会
12/22　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA ほか
野村誠、だじゃれ音楽研究会、佐久間新

イミグレーション·ミュージアム·東京
リサーチ「多文化共生を考える」
1/12〜14　神戸市内
岩井成昭

アサダワタル｜千住タウンレーベル
デモ（試作品）発表会 Vol.2
1/27　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
アサダワタル、タウンレコーダー、大石始、大城真、後藤寿和、ミネシンゴ

千住·緑レジデンス
表現（Hyogen）「音の間」
2/2、2/3、2/9、2/10　仲町の家
表現（Hyogen）

イミグレーション·ミュージアム·東京
パーティー「フィリパピポ!! ザ·ファイナル」
2/16　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール

アサダワタル｜千住タウンレーベル
おとどけ!レコードfrom 千住
2/23　gift_lab GAREGE

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
アウトリーチプログラム　「だんだんたんぽに夜明かしカエル」出演
3/9、10　北千住BUoY

2019年度

アサダワタル｜千住タウンレーベル
千住持ち寄りレコード鑑賞会
4〜翌年2月　仲町の家
アサダワタル、タウンレコーダー

千住·緑レジデンス
友政麻理子　「ハナデンシャ」公開制作
5/2〜5/13　仲町の家 ほか

千住·緑レジデンス
友政麻理子　映像展示「ハナデンシャノハナシ」
5/18-6/16　仲町の家 ほか

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.1 ふわり◎シャボン玉
6/1、2　しょうぶ沼公園
大巻電機 K.K.

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
手作り楽器&楽器体験ワークショップ（**「千住の1010人 in 2020年」プレイベント**）
6/1、2　しょうぶ沼公園

千住·緑レジデンス
友政麻理子「ハナデンシャで行こう –TAKE THE HANADENSHA」（**パフォーマンス·イベント**）
6/16　仲町の家 ほか

千住·緑レジデンス
友政麻理子　映像作品上映「ハナデンシャで行こう –TAKE THE HANADENSHA」
6/22〜7/22　仲町の家 ほか

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
手作り楽器&楽器体験ワークショップ（**「千住の1010人 in 2020年」プレイベント**）
6/28　足立区役所

アサダワタル｜千住タウンレーベル
おとどけ!レコードfrom 千住
7/5、10/6、10、22、25、11/13、12/15　兵庫県宝塚市、埼玉県、足立区 ほか

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.1（**東京音頭講習会**）
7/6　足立区庁舎ホール
大巻電機 K.K.

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
アナンが千住にやってくる！「千住の1010人 in 2020年」プレイベント
7/27　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA ほか
野村誠、アナン·ナルコン、だじゃれ音楽研究会

イミグレーション·ミュージアム·東京
IMMレクチャー・シリーズ「多文化社会におけるアートのチカラ」"遅れてきた移民国家"における不可視な外国人たち（**第1回**）
7/27　東京藝術大学千住キャンパス 大会議室
望月優大、岩井成昭

イミグレーション·ミュージアム·東京
IMMレクチャー・シリーズ「多文化社会におけるアートのチカラ」表現者としての在日朝鮮人たち（**第2回**）
7/28　東京藝術大学千住キャンパス 大会議室
ハン·トンヒョン、李晶玉

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.2（**Meet up!**）
7/29　エンプレムホステル西新井
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.3（**東綾瀬公園盆踊り**）
8/1　東綾瀬公園
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.4（**千住双葉小輪踊り**）
9/10、9/14　足立区立千住双葉小学校
大巻電機 K.K.

イミグレーション·ミュージアム·東京
IMMレクチャー・シリーズ「多文化社会におけるアートのチカラ」「Journey to be continued–続きゆく旅–」（**第3回**）
9/14　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
滝朝子、山浦彬仁、岩井成昭

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
相談会（**大巻電機K.K.**）
9/20、10/17、11/14　東京藝術大学千住キャンパス
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
募集説明会&マシン講習会（**大巻電機K.K.**）
9/28、10/20　東京藝術大学千住キャンパス
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.2 ふわり◎シャボン玉
10/5　西新井大師
大巻電機 K.K.

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
手作り楽器&楽器体験ワークショップ（**「千住の1010人 in 2020年」プレイベント**）
10/12、13
※台風のため中止

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
歌×踊り×だじゃれ　そして インドネシア!?「千住の1010人 in 2020年」プレイベント
10/20　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
野村誠、メメット·チャイルル·スラマット、佐久間新、だじゃれ音楽研究会

イミグレーション·ミュージアム·東京
IMMプロジェクトメンバー（**IPM**）**募集説明会**
10/26　東京藝術大学千住キャンパス

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.3 ふわり◎シャボン玉
10/26　北千住マルイ
大巻電機 K.K. ほか

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.4 ふわり◎シャボン玉
11/3　西新井大師北参道
大巻電機 K.K.

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
手作り楽器&楽器体験ワークショップ（**「千住の1010人 in 2020年」プレイベント**）
11/9　東京都中央卸売市場 足立市場

千住·緑レジデンス
友政麻理子「知らない路地の映画祭レトロスペクティブ」（**上映**）
11/11〜1/20　仲町の家

アサダワタル｜千住タウンレーベル
「音盤千住 Vol.2」レコ発企画「聴きめぐり千住! Vol.2」
11/17　仲町の家、他千住地域各所
アサダワタル、大石始、大城真、ミネシンゴ、タウンレコーダー

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.5（**西新井サロン交流会**）
11/19　OUCHI CAFE／KITCHEN
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.6（**あだちメディフェス**）
11/23　BUoY北千住
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.7（**ケアフェスin 谷中**）
11/30　谷中公園
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「メモリバ学校」ワークショップ（**理科**）
12/7　ギャラクシティ
井筒正義

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
手作り楽器&楽器体験ワークショップ（**「千住の1010人 in 2020年」プレイベント**）
12/8　足立区立千寿本町小学校

イミグレーション·ミュージアム·東京
IMMレクチャー・シリーズ「多文化社会におけるアートのチカラ」写真家・名越啓介と保見団地に住む南米の人々（**第4回**）
12/14　東京藝術大学千住キャンパス スタジオA
名越啓介、ペドロ、長島確、熊倉純子

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「メモリバ学校」ワークショップ（**国語**）
1/18、2/1、2/9　舎人地域学習センター
阿部初美

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「メモリバ学校」ワークショップ（**家庭科**）
1/26　足立区立伊興小学校
白倉正代

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
しゃぼんおどりPR vol.8（**すきだっちゃ南三陸**）
2/11　全學寺
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「メモリバ学校」ワークショップ（**音楽·体育**）
2/22　足立つばめ幼稚園
富塚絵美（くるくるチャーミー）

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
募集説明会&マシン講習会（**大巻電機K.K.**）
2/29
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「メモリバ学校」ワークショップ（**技術、音楽、体育**）
2/29、3/28
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
プレ企画 vol.5 ふわり◎シャボン玉
3/8
大巻電機 K.K.
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

イミグレーション·ミュージアム·東京
IMMレクチャー・シリーズ「多文化社会におけるアートのチカラ」高山明と蕨（わらび）市に住むクルドの人々（**第5回**）
3/12
高山明、アリ·アイユルディズ
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

2020年度

アサダワタル｜声の質問
声の質問
4〜8月　オンライン
アサダワタル

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
Memorial Rebirth 千住 2020 舎人公園
4/19　都立舎人公園
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
特別企画「#メモリバ0419」
4/19　特設ウェブサイト
大巻電機K.K.、メモリバ音楽隊、ほか過去にメモリバに関わった市民等

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
動画コンテンツ「メモリバ学校の昼やすみ」
5〜11月　特設ウェブサイト、YouTube
大巻電機K.K.、メモリバ音楽隊、ほか過去にメモリバに関わった市民等

千住·緑レジデンス
窓映画館
5/21、6/3、6/24、7/6、7/16　仲町の家、居酒屋てん、近隣のマンション
友政麻理子

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住だじゃれ音楽祭 千住の1010人 in 2020年
5/31　千住まちなか
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
第4回 だじゃれ音楽研究大会（**オンライン**）**–"千住の1010人 in 2020年"に向けて–**
5/31　YouTube Live 配信
野村誠、佐久間新、アナン·ナルコン、メメット·チャイルル·スラマット、だじゃれ音楽研究会

イミグレーション·ミュージアム·東京
「美術館·わたしたちはみえている—日本に暮らす海外ルーツの人びと」作品公募展
6/12〜3/14　オンライン（特設ウェブサイト）

イミグレーション·ミュージアム·東京
「美術館·わたしたちはみえている—日本で暮らす海外

ルーツの人びと」
8〜9月　足立区内
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
アーティスト・クロストーク《オンライン》#01「ひょうたんから駒が出るようなはなし」
8/5　YouTube Live 配信
野村誠、Nadegata Instant Party、熊倉純子

音まち臨時企画
窓映画館（友政麻理子）・声の質問（アサダワタル）
8/7　仲町の家、千住仲町公園、周辺路地等
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
「オンライン盆踊り大会」（地域連携）
8/20　YouTube Live 配信
音まち学生スタッフ

千住·緑レジデンス
窓映画館（遠隔版）
9/24、11/20　仲町の家、ゆいぽーと（新潟市芸術創造村·国際青少年センター）、awai art center
友政麻理子

アサダワタル｜声の質問
緊急アンケート《コロナ禍における想像力調査　声の質問19》
10〜3月　仲町の家
アサダワタル

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
アーティスト・クロストーク《オンライン》#02「大巻伸嗣×地域アート?『アートなんてわかんねぇ!』」
10/18　YouTube Live 配信
大巻伸嗣、山出淳也、森司、熊倉純子、大巻電機K.K.メンバー、「水郷ひた芸術文化祭2018」市民スタッフ

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住の1010人 from 2020年 世界だじゃれ音Line音楽祭［Day1］
10/31　YouTube Live 配信
佐久間新、アナン·ナルコン（タイ）、メメット·チャイルル·スラマット（インドネシア）、尾引浩志、池田邦太郎、上田假奈代、i-dArt（香港）、大田智美、ジンタらムータ、Asia Pacific Community Music Network（香港）、だじゃれ音楽研究会

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住の1010人 from 2020年 世界だじゃれ音Line音楽祭［Day2］
11/28　YouTube Live 配信
野村誠、福島青衣子、だじゃれ音楽研究会

イミグレーション·ミュージアム·東京
オンライン美術館「わたしたちはみえている－日本に暮らす海外ルーツの人びと」
12/5〜3/14　オンライン（特設ウェブサイト）
岩井成昭、ゲストアーティスト:岩根愛、高山明、李晶玉、公募展出展者、全国で多文化社会に取り組むNPOや活動団体

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住の1010人 from 2020年 世界だじゃれ音Line音楽祭［Day3］
12/19　YouTube Live 配信
野村誠、ジョン·リチャーズ、だじゃれ音楽研究会

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住の1010人 from 2020年 世界だじゃれ音Line音楽祭［Day4］
1/24　YouTube Live 配信
野村誠、安野太郎、宮田篤、ジモン·ルンメル、奥田扇久

アサダワタル｜声の質問
アーティスト・クロストーク《オンライン》#03「会えない日々と、気配のゆくえ」
2/11　YouTube Live 配信（仲町の家）
アサダワタル、山川冬樹、ラナ·トラン、冨山紗瑛

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
メモリバのホームステイ
3/14、3/16、3/25　足立区内5箇所
大巻電機 K.K.

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
メモリバ工房
3/14　東京藝術大学千住キャンパス 書庫2 ほか
大巻電機 K.K.

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
映像音楽作品公開「千住の1010人 from 2020年「2020年を作曲する 世界だじゃれ音Line音楽祭」」/「千住の1010人 from 2020年 around SUMIDAGAWA」
3月　音まちYouTubeチャンネル
野村誠、甲斐田祐輔 ほか

2021年度

大巻伸嗣｜Memorial Rebirth 千住
メモリバのホームステイ
6月〜　足立区内各所

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
千住の1010人 from 2020年 アジアだじゃれ音Line音楽祭
9/12　YouTube Live 配信
野村誠、佐久間新、アナン·ナルコン（タイ）、メメット·チャイルル·スラマット（インドネシア）、ウン·チョー·グワワン（マレーシア）、ヨード（タイ）、ガンサデワ（インドネシア）、北澤潤、だじゃれ音楽研究会 ほか

千住·人情芸術祭
アサダワタル　コロナ禍における緊急アンケートコンサート「声の質問19/19 Vocal Questions」
9/26　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
アサダワタル、質問楽団（アサダワタル、中尾眞佐子、中川裕貴、米子匡司）、瀧川宣之、カセットテープ再生係員（稲垣佳葉、木村楓、藤枝怜）、ドラマトゥルク:長島確、舞台美術:後藤寿和（gift_lab）ほか

千住·人情芸術祭
友政麻理子「窓映画館、カーテンの夢」
10/16、17　仲町の家 ほか
友政麻理子 ほか

千住·人情芸術祭
【記録上映】アサダワタル コロナ禍における緊急アンケートコンサート「声の質問19/19 Vocal Questions」
10/23、10/24、10/30、10/31　東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール
アサダワタル、西村明也、冨田了平 ほか

千住·人情芸術祭
1DAYパフォーマンス表現街
10/31　千住ほんちょう商店街
※雨天のため　東京藝術大学千住キャンパスに変更
区内外の公募パフォーマー、どうぶつえんチーム（代表:Aokid）、ざやえんどう、新人Hソケリッサ!

イミグレーション·ミュージアム·東京
多国籍美術展・「わたしたちはみえている－日本に暮らす海外ルーツの人びと」
12/11〜12/26　北千住BUoY、仲町の家
岩井成昭、岩根愛、高山明、李晶玉、公募展出展者、全国で多文化社会に取り組むNPOや活動団体、IMM ねいばーず

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
だじゃれ音楽研究会　スーパー活動日
1/22　隅田公園

野村誠｜千住だじゃれ音楽祭
だじゃれ音楽研究会　スーパー活動日
1/23　東京藝術大学上野キャンパス

「Memorial Rebirth 千住」用語集

本番

2011–

1年に1度開催する大規模な「Memorial Rebirth」の通称。区内の商店街、学校、公園などが会場に選ばれ、当日はシャボン玉マシンを50台以上設置して風景を一変させる。2011年度から2018年度まで毎年開催し、来場者数は多いときに1日5000人を超えた。2011年度、2012年度は昼の時間のみに開催し、2013年度からは夜のプログラムも誕生。2014年度からは、「しゃぼんおどり」を開催する「昼の部」と、幻想的な風景を楽しむ「夜の部」の二部開催が定着した。

シャボン玉マシン

2011–

シャボン玉を発生させる機械のこと。「日常にありそうで実際は無い」という大巻のコンセプトのもと設計されており、その形状から「バケツ」と呼ばれる。シャボン玉マシンはオーダーメイドの貴重なものであるため、その取扱い方について基礎的な知識を身につける必要がある。大巻電機K.K.では新メンバーが入る度にメンバーによるマシン講習会を実施している。

大巻チーム

2011–2014

2011年度の立ち上げと同時に公募された、メモリバの企画運営を事務局とともに担う市民参加者たちを指す。メンバーは足立区内外から集まった。当時はまだ事務局が市民参加者を巻き込むのに不慣れでもあり、コミュニケーションが充分にとれず参加者から不満の声が上がることもあった。メンバーは数年の間に離れ、テクニカルチームに参加することもなかった。

事務局

2011–

NPOの有給スタッフを指す。メモリバの主担当には毎年1〜2名ほど割り当てられ、メモリバの現場に臨む。アーティストの大巻との連絡、各活動の現場責任者など、幅広く業務をこなす、メモリバの大黒柱と言える。2017年度から事業評価として評価活動も担当しており、時に事業の枠を超えて他のプログラムも担当する。

千舟リーグ

2011–

2003年に発足した千住地域の6つの小学校のPTAから成るソフトボールチーム連合のこと。2011年度より、本番当日には交通整理やマシンの警備にボランティアで参加。一部のメンバーは現在の大巻電機K.K.に参加している。

藝大生

2011–

東京藝術大学の音楽学部音楽環境創造科・大学院音楽研究科芸術環境創造・大学院国際芸術創造研究科で、熊倉純子研究室に所属する学生を指す。学生は授業の一環としてアートプロジェクトの現場に1年生から携わっており、音まちはその現場の1つである。2021年度現在、音まちに所属する学生から6名がメモリバ担当として参加している。歴代の担当者は、卒業生も含めて15名程度である。

しゃぼんおどり

2012–

2012年に誕生したメモリバオリジナルの盆踊り。「千住は盆踊りが盛んな地域であった」というエピソードに着想を得て大巻が発案。振付と作曲はくるくるチャーミーである。翌年の2013年には演出家の阿部初美を中心に、事務局と「大巻チーム」が地域住民に取材をして千住地域にまつわる歌詞が制作され、現在の楽曲が完成した。2018年には西新井地域での開催に合わせて西新井地域にまつわる歌詞が新たに制作された。

電大生

2012–

主に、東京電機大学未来科学部ロボット・メカトロニクス学科の学生と卒業生を指す。「研究室にこもりがちな学生たちに外との関わりを持たせたい」という助教（当時）の井筒正義の思いのもと、プロジェクションマッピングや工作ワークショップなど理系大学ならではの強みを生かしてメモリバに関わる。

踊り連

2012–2017

本番当日の「しゃぼんおどり」の核となる踊り手として連携した地域の日本舞踊のグループを指す。しゃぼんおどりはダンスの経験のない人にも親しみやすい振付でありながら、くるくるチャーミーの意向で日本舞踊の要素が盛り込まれており、地域の日舞のコミュニティにも好意的に受け止められた。踊り連とくるくるチャーミーのあいだでは、市民の参加を促すための踊り方、空間づくり、声がけの工夫について綿密な打ち合わせが行われる。

くるくるチャーミー

2012–

東京藝術大学卒業生による若手アーティストユニット。ダンス、歌、作曲、音響など幅広い専門性をもつ個性的なメンバーが集い、地域のお祭りや結婚式、パーティーでのパフォーマンスなどで活躍。メモリバでは「しゃぼんおどり」の作曲、振付を担当。本番の昼の部には必ず出演し、夜の部ではそれぞれの得意分野を生かして演出やパフォーマンスに関わる。2017年度「ティーンズ楽団」や2019年度の「メモリバ学校」の講師も務めている。

昼の部

2011–

昼の時間帯に開催される本番のこと。2012年度からはシャボン玉マシンを囲むように円になって「しゃぼんおどり」を開催する。歌や演奏、踊りなどによって賑やかなお祭りのような風景となる。くるくるチャーミーをはじめ、踊り連や踊り手、ティーンズ楽団などが出演し、地域の方々とともに創り上げる。

夜の部

2013–

日没後に開催される本番のこと。2013年度に始まり、同年度は「しゃぼんおどり」を開催した。2014年度からは、プロジェクションマッピング、コンテンポラリーダンス、合唱など毎年違ったアーティスティックな要素を取り入れ、昼の部とは全く異なる景色で観客を魅了している。

大巻電機K.K.

2015（2014）–

足立区内在住の子供を持つ親世代や電大卒業生を中心に構成される市民チーム。2014年度に「テクニカルチーム」として結成し、2015年度にいまのチーム名に改名した。シャボン玉マシンのメンテナンスやプレ企画に参加することを通じてメモリバの根幹に関わり、事務局とプログラムの方向性について議論する。大巻のイラストが入った深緑色のTシャツがユニフォーム。コロナ禍において、シャボン玉の新たな見方を模索する「メモリバ工房」の発案や、家でもモノづくりが楽しめる動画コンテンツ「メモリバ学校の昼やすみ」の制作も行った。

踊り手

2015–

本番やプレ企画において「しゃボンおどり」を先導する人たちを指す。2014年度までは踊り連が参加者を促し、「しゃボンおどり」の輪を広げていたが、2015年度の本番において、広い会場でより多くの人に踊りに参加してもらうために、台上で手本を踊る「踊り手モデル」と、踊りながら円を促す「しゃボンおどり促し隊」を募集したのが始まりである。年度によって「盛り上げ隊」、「促し隊」など名称は統一されていないものの、総称して「踊り手」と呼ばれ、本番には欠かせない存在である。

装いづくりワークショップ

2015–

2015年度に始まった、「しゃボンおどり」の際に身につけるアクセサリーをつくるワークショップ。反物や古着を素材として、くるくるチャーミーの富塚絵美が中心となってデザインを考案。参加者は自身で製作したアクセサリーで着飾り、「しゃボンおどり」を彩った。2016年度には、本番開催地である千寿青葉中学校のアート部の学生とコラボレーションし、さらにバリエーション豊富なワークショップとなった。

音まちビッグバンド

2016–

本番やプレ企画当日に「しゃボンおどりの歌」を演奏する大人たちの音楽隊で、当日のみ結成される。別名「メモリバ音楽隊」。2016年度に、音まちの他のプログラムである「千住だじゃれ音楽祭」の市民音楽団体である「だじゃれ音楽研究会（通称「だじゃ研」）」や千住発のチンドン隊である「千住ちんどん」のメンバーを中心に結成された。

プレ企画

2015–

2015年より主に本番開催予定地付近で実施する企画。「大巻電機K.K.プレゼンツ ふわり◎シャボン玉」というプログラム名で大巻電機K.K.を中心に実施している。大巻電機K.K.メンバーがマシンの扱い方に慣れる、開催予定の本番の宣伝を行う、といった目的で始まった。シャボン玉マシンを5~10台程度使い、シャボン玉によって小規模ながら日常の中に非日常的な空間が立ち上がる。2015年度、2016年度には「しゃボンおどり」の振付の練習や本番で身につける衣装をつくるワークショップなども実施した。

メモリバ学校

2019

2019年度の冬に開講された連続ワークショップ企画。2020年4月に予定していた本番に向けて、大人も子供も参加できるメモリバを実現させたいという思いから企画された。「見ているだけじゃ、もったいない。」というキャッチコピーのもと、メモリバが過去に開催してきた「電大マシン」「装いづくり」「歌詞づくり」「しゃボンおどり」「シャボン玉マシン講習」のワークショップを学校の科目（理科、家庭科、国語、音楽・体育、技術）に当てはめる形で開催した。

電大マシン

2018–

手持ちができる弁当箱サイズの手作りシャボン玉マシン。2018年度に関わっていた電大生3名を中心に製作された。当時、「電大生がアイディアを生かす機会を作りたい」と考えた大巻電機K.K.メンバーの後押しによって、電大生が一から部品を集め、自らの手で組み立てた。2018年度の本番当日は電大生自身が電大マシンを持ち、昼の部と夜の部の間の時間に子供たちの興味を惹きつけた。その後のメモリバの活動において大いに活躍している。

ティーンズ楽団

2017–

足立区の小中学生を中心とした、「しゃボンおどり」の演奏や踊りに参加する楽団のこと。2017年度に公募で結成された。2018年度は「ティーンズ合唱団」も結成。ティーンズという名称にこだわらず、園児から大学生まで幅広く参加し、歌い手・踊り手・演奏隊として、パフォーマンスを大いに盛り上げる。主に本番やプレ企画当日のみ結成される楽団だが、多くのメンバーが「しゃボンおどり」を練習するワークショップにも参加する。

All for one

2020–

コロナ禍のメモリバのあり方を表すキーワード。大巻と事務局との会議において大巻が提示した。これまでの大きな本番においては、地域のみんなのためにシャボン玉を飛ばす「One for all」で活動してきた。しかし、コロナ禍において大人数で集まれない状況となってしまった。そこで、誰か1人のためにシャボン玉を飛ばして新たに記憶を紡ぎたいと大巻伸嗣は考えたという。これが「メモリバのホームステイ」企画のコンセプトにつながる。

メモリバのホームステイ

2021–

足立区内各所にシャボン玉マシンが1台訪れ、家族や小さなコミュニティの会話を引き出す企画。2021年度、コロナ禍で市民が集まる機会が失われるなか、それぞれの場所（ホーム）で思い出を振り返るとともに、新たな思い出を紡いでほしいという願いから企画された。これまで、西新井地域、千住緑町などの各所で実施している。

しゃボンおどりの歌

「しゃボンおどり」は、シャボン玉と盆踊りをかけた「Memorial Rebirth 千住」オリジナルの盆踊りです。
盆踊りの盛んな足立区・千住で、もっと人々がひとつになれるようにという大巻伸嗣の提案で生まれました。

作曲｜松岡美弥子（くるくるチャーミー）
作詞｜阿部初美＋大巻チーム［千住バージョン］
阿部初美＋西新井のみなさん［西新井バージョン］

［千住バージョン］

ふわりふわり　ほらきえないで
きらりきらり　きみにふってくる
あそぼあそぼ　ほらみていてね
ひかる 負けずぎらい　つかまえて　（ほい）

荒川　広がる　河川敷　橋をこえて
レモンのかたちの千住にお嫁に来ました

都電　見送った　花電車
遠く　見えた　白い煙突
踊る　春は　桜の並木
今日も　ひびく　やっちゃ場の声

ふわりふわり　ほらきえないで
きらりきらり　きみにふってくる
あそぼあそぼ　ほらみていてね
ひかる 負けずぎらい　つかまえて　（ほい）

［西新井バージョン］

ふわりふわり　ほらきえないで
きらりきらり　きみにふってくる
あそぼあそぼ　ほらみていてね
ひかる 負けずぎらい　つかまえて　（ほい）

青空　広がる　大師様　裏の沼で
ザリガニ　釣ってた　西新井のトム・ソーヤーたち

カゴさげて　ゆうぐれ商店街
いつも　寄った　あの町工場
夏が　来れば　東京マリン
今日も　まちは　カレーの匂い

ふわりふわり　ほらきえないで
きらりきらり　きみにふってくる
あそぼあそぼ　ほらみていてね
ひかる 負けずぎらい　つかまえて　（ほい）

「しゃボンおどり」の
紹介動画はこちらから
ご覧いただけます。

撮影｜雨宮透貴

大巻伸嗣

1971年岐阜県生まれ。東京藝術大学美術学部彫刻科教授。アジアパシフィックトリエンナーレや横浜トリエンナーレ2008、エルメス セーヴル店（パリ）、アジアンアートビエンナーレなど世界中の芸術祭や美術館・ギャラリーでの展覧会に参加している。展示空間を非日常的な世界に生まれ変わらせ、鑑賞者の身体的な感覚を呼び覚ますダイナミックな作品《Liminal Air》《Memorial Rebirth》《Echoes》を発表している。
http://www.shinjiohmaki.net

アートプロジェクトがつむぐ縁のはなし　絵物語・声・評価でひもとく 大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」の11年

発行日｜2022年3月17日

企画・制作｜「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事務局、東京藝術大学熊倉純子研究室
監修｜熊倉純子
著者｜熊倉純子、藤枝怜、佐野直哉、槇原彩、篠原美奈
制作チーム｜藤枝怜、王季帆、篠原美奈、京谷眞鈴、田中天眞音、中島初穂
イラストレーション｜目［mé］、mutsumi
編集｜今野綾花
デザイン｜川村格夫［ten pieces］
印刷｜前田印刷株式会社

発行｜公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4丁目1-28　九段ファーストプレイス8階 TEL: 03-6256-8430 / FAX: 03-6256-8827　https://www.artscouncil-tokyo.jp/

アートアクセスあだち 音まち千住の縁
主催｜東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
東京藝術大学音楽学部･大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区

プロデューサー｜熊倉純子［東京藝術大学］
ディレクター｜吉田武司［特定非営利活動法人音まち計画］
事務局長｜長尾聡子［特定非営利活動法人音まち計画］

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京｜森司［東京アートポイント計画 ディレクター］、
岡野恵未子、櫻井駿介［東京アートポイント計画 プログラムオフィサー］
足立区シティプロモーション課

※「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」は、東京アートポイント計画の一環として実施しています。

「アートアクセスあだち
音まち千住の縁」公式サイト

「Memorial Rebirth 千住」
特設サイト

［**お問い合わせ先**］
「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事務局
〒120-0034 東京都足立区千住5-13-5 学びピア21 7階
TEL: 03-6806-1740（13時～18時、火曜･木曜除く）
E-mail: info@aaa-senju.com　https://aaa-senju.com

※本書はTokyo Art Research Lab 研究･開発の
「流通･発信プログラム」の一環として制作されました。

2022 ©公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
All rights reserved　Printed in Japan
ISBN978-4-909894-32-8　C0070

足立区